

モビルスーツアーカイブ MSN-06S シナンジュ



MOBILE SUIT ARCHIVE

MSN-06S SINANJU



モビルスーツアーカイブ MSN-06S シナンジュ



MOBILE SUIT ARCHIVE

MSN-06S SINANJU



TVアニメ

『機動戦士ガンダムユニコーン RE:0096』

2016年4月3日スタート!

毎週日曜あさ7時より テレビ朝日系列全国ネットにて



「赤い彗星の再来」と呼ばれた
ネオ・ジオンのフル・フロンタル
その乗機の全貌に迫る

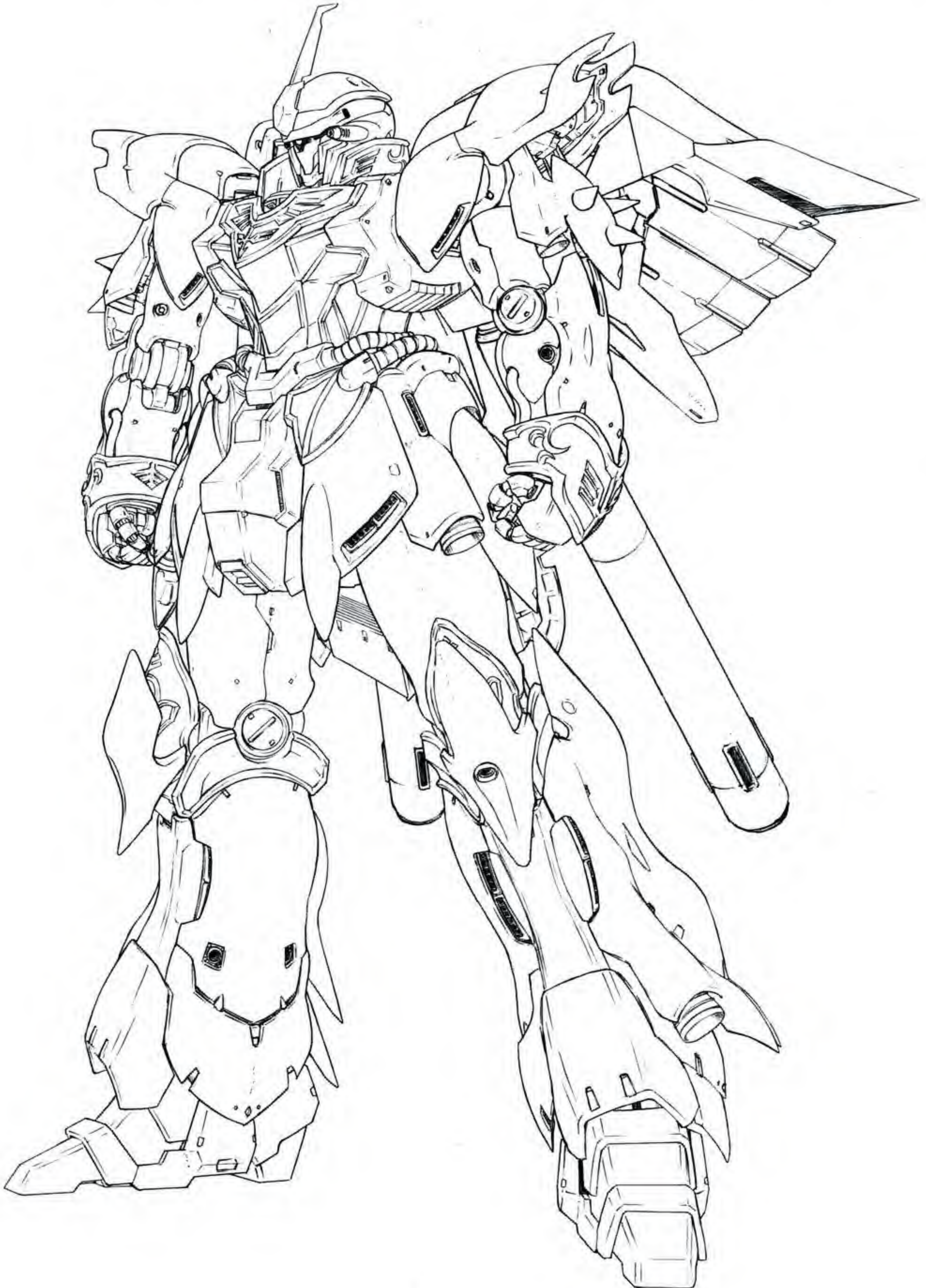
UCMS専門書籍シリーズ第二弾!

モビルスーツアーカイブ MSN-06S シナンジュ



MOBILE SUIT ARCHIVE

MSN-06S SINANJU





MSN-06S SINANJU

宇宙世紀0096年、フロンタル派ネオ・ジオンの呼びかけに応じた、旧公国系残党勢力による「斉蜂起は、地球連邦の首都「ダカール」に壊滅的被害をもたらすなど、地球圏に大きな爪あとを残した。「シャアの反乱」以降、沈黙化傾向にあった戦乱が二気に拡大したことで、しばしば「第三次ネオ・ジオン戦争」とも呼ばれるこの一連の騒動の影に、一機の特異なMSが存在したことはあまり知られていない。

MSN-06S（シナンジュ）。全身を真紅に染め上げたこの機体は、瓦解寸前のネオ・ジオンをまとめあげた人物、フル・フロンタルの手で運用され、幾多のテロ攻撃に用いられた。当時、この機体と対峙した連邦軍の将兵たちは、口々に「叫んだ」という。「シャアの再来」、「赤い彗星の亡霊」と……。しかし、この機体の開発経緯を探ることは簡単なことではない。本稿では、この歴史の闇に埋もれた名機の実像に迫るべく、軍関係の公的記録やA.E.社の社内記録、関係者の証言や当時の報道内容を総合し、考察を試みるものである。



MSN-06S SINANJU

CONTENTS

- 004 SINANJU Photo Files
シナンジュフォトファイル
- 016 DEVELOPMENT HISTORY
シナンジュ開発経緯
- 032 STRUCTURE AND SYSTEM
構造とシステム
- 076 ARMAMENT
機体武装
- 090 CAUTION SIGN
コーション
- 104 NEO ZEONG
ネオ・ジオン
- 116 ARTIFICIALLY-ENHANCED CYBER-NEWTYPE
強化人間開発史





■《ジナンジュ》は新生
ネオ・ジオンの実質的
な首魁として認知されて
いたフル・フロンタル大
佐によって運用された。
ネオ・ジオンのプロバガ
ンダ戦略にとり、自らの
存在について正しく認識
していたであろうフロン
タルは、《ジナンジュ》を
駆ってその象徴としての
役割を十分に全うしたと
いえる。



■〈シナンジュ〉の戦闘力はまさに一騎当千と呼べるほどのもので、〈リゼルC型〉から成る〈ゼネラル・レビル〉麾下のMS小隊を文字通り一瞬で殲滅したという。フロントアルをシャア・アズナブルその人であると感じるスペースノイドは今でも多いが、こうしたエピソードを聞けばそれも無理からぬ話であろう。







●機体は全長120m、重量は12,000tと、巨大な機体ながらも、機体の各部は、それぞれが独立して動く。そのため、機体の各部は、それぞれが独立して動く。そのため、機体の各部は、それぞれが独立して動く。

[illegible]

前史

小惑星基地「アタラシス」。宇宙世紀0070年代初頭に、ジオン公国軍のアステロイドベルトにおける活動拠点として拓かれたこの基地は、「一年戦争終結後に地球圏を離脱してきた諸勢力の受け入れ先となり、やがて戦後最大級の公国軍残党の根拠地化した。満足を設備もないままに軍民合わせて3万人ともいわれる規模の人員が流入しただけに、当初は厳しい生活を強いられたという。彼らが必死になって動地に働き続けたのは、ザビ家の灯火を消してはならぬという共通の使命感からであった。今や唯一のザビ家の血筋となっていたドブル・ザビ宇宙攻撃軍中將の遺児、ミアバ・ラオ・ザビの存在が、種々な人員で構成される「ミネアラー」をまとめ上げる「黒印」となったのである。

そして、宇宙世紀0087年に入り「アタラシス」はこ

内戦状態にあった地球圏へと電報を果たす頃には、MSや戦闘艦艇を自前で開発・建造するほかに組織力を高めていたのである。中でも注目すべきは、フラナガン機関から受け継いだ知識を独自に発展させた結果として獲得していた「強化人間」と「サイコミュ」関連技術の高さである。AMX-004「ヘキサレイ」を始め、複数のサイコミュ搭載型MSを開発。さらに「グリスス戦役」に敗れた結果、投降を拒んで脱走兵と化した元サイターンズの将兵や、非人道的な人体実験を繰り返していたことで疎遠されるリスクがあったニュータイプ研究所系の人員を受け入れたことで、この方面の技術は否応なく高まることとなる。こうした背景もあって、宇宙世紀0088年に入り組織名を「ネオ・ジオン」と改めた彼らは、翌0089年にかけて巻き起こった「第一次ネオ・ジオン戦争」において、次々とサイコミュ兵器、あるいは準サイコミュ兵器を搭載した機体を実戦に投入し得たのである。

しかしながら、地球連邦の内戦を利用して上下を立

ち回っていた「ネオ・ジオン」も、敵と同じ轍を踏んでしまふ。ミアバの摂政として権力を握っていたハリー・カーンに對して、青年將校ダレミー・トリトに率いられた一派が反乱を起こしたことで、組織を二分する壮絶な内士討ちが始まったのである。そして、この状況をエウロブ系部隊に利用された結果、一時は連邦の首都「ダカール」を制圧するまでに権勢を誇りながらも、あえなく「ネオ・ジオン」は瓦解したのだ。

だが、完全にすべてが無に帰す前に、ひとりの男が立ち上がる。エウロブによる政権転覆を指導者の立場で導きながらも、その後には妻を遺していた人物、思想家ジョシム・ダイクンの長子にして、ジオン公国軍のトップエースとしても有名なシャア・アズナブルその人である。宇宙世紀0090年、シャア・アズナブルは元少前会を通じて、「ネオ・ジオン」の残党内で最大規模を誇ったダラン・ダシ・ホジソン少將のダラーンに接触する。これを機に部下に収めることに成功。さらに地球上に残留していた部隊や、「サイド3」を始めとする各地に散り散りになっていた





■〈アーガマ〉に代わるエウーゴの新たな旗艦が〈ネェル・アーガマ〉である。第一次ネオ・ジオン戦争終結後、エウーゴが地球連邦軍の主導権を握ると、同艦は別の任務を帯び、主として反地球連邦政府運動の摘発に従事。第三次ネオ・ジオン戦争（ラプラス戦争）時にはフル・フロンタル率いる戦艦〈レウルーラ〉やMS〈シナンジュ〉と接触した。

た諸派を統合したシヤアは、自らを総帥として「ネオ・ジオン」の再編を宣言したのだった。

スペースノイドの自治独立という父の遺志を継ぐべく、シヤア・ダイクンを名乗り始めた彼の下で、どうにか組織を再編した「新生ネオ・ジオン」にとって、大きな問題となったのが兵器類の供給源の確保であった。ハマーン政権下の「ネオ・ジオン」が多数の機動兵器を開発し実戦投入し得たのは、兵器開発工廠と生産設備を有する小惑星基地「アクシズ」の存在あればこそであったが、「第一次ネオ・ジオン戦争」の最終戦でこれを失っていたためである。ひとまず、現存していたアクシズ製の在来機に加え、ティターンズやジオン共和国軍が運用していた機体にも、果ては旧公国軍機に至るまでをかき集め、どうにか戦力を整えたものの、着実に装備の更新を進めつつあった連邦軍に対しては、戦力差が開く一方であったのは言うまでもない。こうした苦境の中で、シヤア・ダイクンが頼ったのは、エウーゴ時代に築いた月面経済界の人脈であった。かつてエウーゴの中枢にいたことのある彼は、利害が一致した場合、アナハイムエレクトロニクス社（以下、AE社）を始めとする企業グループが反政府組織との取引に応じる意志があることを、誰よりもよく知っていたのである。特にAE社グラナダ工場には、戦後の吸収合併によりジオニクス社などの旧公国系兵器メーカーから移籍した人材が多く、ネオ・ジオンに同情的立場を示す者も少なからず在籍していた。また、同工場はエウーゴ結成にあたり、MSA・099（リック・ディアス）などを開発した実績もあり、シヤア・ダイクンの個人的な人脈も利用することができたようだ。かくして新生ネオ・ジオンは交渉の末に、AE社と手を握り合うことになったのである。



■グリプス戦役時に反地球連邦組織エウーゴが投入した MSZ-006〈Z ガンダム〉は、その生産数の少なさにも関わらず、驚異的な戦績と後の MS 開発に与えた影響によって TMS (可変モビルスーツ) の傑作機として名高い。本機には、ファンネルのような無線攻撃端末は装備されていなかったが、パイロットの感応波を検知し機体制御に用いるという新機軸のシステム「パイオセンサー」が実装されていた。当時の技術では、完全なる思考制御までは実現せず、あくまでも補助的なものに過ぎなかったが、それでも後のインテンション・オートマチック・システムへと与えた影響は極めて大きいものと推測される。



■エウーゴ艦隊の中核としてグリプス戦役時に新造された強襲揚陸艦〈アーガンマ〉。かつてシャア・アズナブルはクワトロ・バジナ大尉を名乗ってエウーゴ中枢に入り込むとともに、同艦所属の MS 隊を指揮した。〈アーガンマ〉はやがてハマーンとの第一次ネオ・ジオン戦争のさなか地球に降ろされ、以後はカラバによって使用された。

新生ネオ・ジオンのMS開発

MSを含む機動兵器を開発するにあたり、シャア・ダイクンはハマーン・カーンの遺産を有効活用する道を選んだ。ハマーン政権下のネオ・ジオンにおいて開発されていた汎用機、AMS-117（ドーガ）の設計データを流用しつつ、これをブラッシュアップすることで新軍の主力機とする計画を立てたのである。懸案となっていた製造設備についても、AE社グラナダ工場への生産委託が決まったことで問題解決の目処が立ち、開発計画は順調に進展。結果として、AMS-119（ギラ・ドーガ）がロールアウトし、量産が開始されたのである。

ただし、装備更新を実現し得たとしても、連邦軍が圧倒的に優位な立場にあることには変わりない。そこで、シャア・ダイクンは個々の戦闘局面において数次的不利を覆す手段として、サイコミュ搭載機を要に据えることとした。「アクシズ」内でサイコミュ研究を行っていた旧フラナガン機関系の技術者に加え、連邦系のニュータイプ研究所から合流してきた人材を加え、独自の「ニュータイプ研究所」を設立。AMS-119をベースとしたサイコミュ搭載型MSの開発に着手したのである。

しかしながら、この試みは難航する。AMS-119NとAMS-120Xというふたつの試作機が完成したものの、いずれも性能的には目標値を下回るものでしかなかったのだ。当時の技術では、サイコミュ・システムの小型化には限度があり、キャパシティに余裕が無いAMS-119系フレームを用いた場合、どうしても妥協せねばならない点が多かったようである。とはいえ、大規模な開発設備を持たない研究所では、機体の新造はもちろん、

フレームレベルからの改設計すら難しい。この問題に対する解決策として、彼らはふたつの施策を採ることになる。ひとつは、当時開発中であった新素材「サイコフレーム」を用いたサイコミュ・システムの抜本的な小型化、そして、もうひとつがAE社グラナダ工場への試作機の建造委託である。

「サイコフレーム」とは、ニュータイプ研究所の所長に就任していたナナイ・ミゲル女史が、以前より個人的に研究を進めていた新機軸の構造材である。ミゲル所長は、ティーンエイジャーの頃から旧公国系の独立運動に従事していた根っからの「活動家」であると同時に、当時からフラナガン機関の流れをくむ（サイド3）内の研究施設にて、被験者、および研究助手としてキャリアを積んできた人物である。さらに宇宙世紀0084年以降は、地球連邦軍が設立した「オーガスタ・ニュータイプ研究所」に研究生として在籍。宇宙世紀0087年の「グリプス戦役」においては、所属研究所がティターンズの傘下に入ったことで、キリマンジャロ攻防戦の後にカラバに投降することになり虜囚となる経験をしたものの、これを上手く切り抜け宇宙世紀0090年代初頭には宇宙へと戻り、「スウィートウォーター」にて民間研究機関「サイコ・コミュニケーション・ラボラトリー」に在籍するいち職員という立場でニュータイプ研究を続けていた。その最中に彼女が考案したのが、サイコミュ・システムの基礎的な機能を持つ微細なコンピュータ・チップを、金属粒子レベルで鑄込んだ新機軸の構造材、つまり後の「サイコフレーム」に繋がる技術であったという。この後、シャア・ダイクンの勧誘を受け、ナナイ・ミゲルが新生ネオ・ジオン傘下の「ニュータイプ研究所」の所長に収まったことで、同研究所にサイコフレームの基礎理論がもたらされ、結果として軍事

利用可能なレベルの技術が形成されたものと推測されている。

そして、試作機の建造がAE社に委託されたことで、問題のサイコフレーム関連技術も同社の手に渡ることになる。グラナダ工場にはサイコフレームの製造設備が作られ、直ちに生産が開始された。AMS-119系のムーバブル・フレームをベースとしながらも、機体設計を抜本的に見直した素体に、サイコフレームを導入した小型サイコミュ・システムを搭載した試作機、MSN-03A（ヤクト・ドーガ）を完成させたのである。この機体は、円筒型ファンネル6基を搭載しているが、サイコフレームを採用したことで無線コントロールの追従性と即応性は、従来型サイコミュ・システムのそれをはるかに凌ぐ水準となったという。ただし、この機体には、ファンネルへのエネルギー充電機能が実装されていないなど、いくつかの問題があり、シャア・ダイクン総帥らネオ・ジオン側の高官を満足させることはできなかったようだ。

結局、AE社はAMS-119系フレームの流用を諦め、23メートル級の大型ムーバブル・フレームを新規に設計することで、MSN-04X（サザビー）を完成させる。当初からサイコフレームの採用を前提とした設計が成されたこともあり、十分なキャパシティを有していた本機には3960kWの大出力ジェネレーターに加え、充電機能付きファンネル・コンテナや、拡散メガ粒子砲1門が標準装備されるなど、高火力を有する重MSとして完成したのだ。後にこの機体は、若干の調整を経てMSN-04として正式にロールアウト。シャア・ダイクン総帥の乗機となり、新生ネオ・ジオンのフラグシップ機として数々の戦場で活躍することになったのである。



■ AE 社が新生ネオ・ジオン向けに開発した MSN-04〈サザビー〉は、MSN-03 とともに「サイコフレーム搭載機」の第一世代に数えられる。グラナダ工場の手による機体という意味では MSN-06 の始祖と呼べなくもないが、同機の設計は RX-93 系列機のそれに近く、ファンネル搭載型の重 MS という設計思想が受け継がれることはなかった。ただし、〈スタイン 01〉を入手した「袖付き」が改装を加えた際には、「シャア・ダイクン総帥機」としての MSN-04 を多分に意識したらしく、流線型の装甲形状など端々にその意匠が受け継がれている点は実に興味深い。



サイコフレームの行方

A E社とネオ・ジオンはMSの開発、生産に関わる委託契約を結ぶ際に、当然のことながら機密保持条項を設けたうえでサインを交わしていた。最新のサイココミュニケーションはもちろんのこと、主力MSの設計データを連邦サイドにリークされたのでは話にならないのだから、当然の事と言えよう。

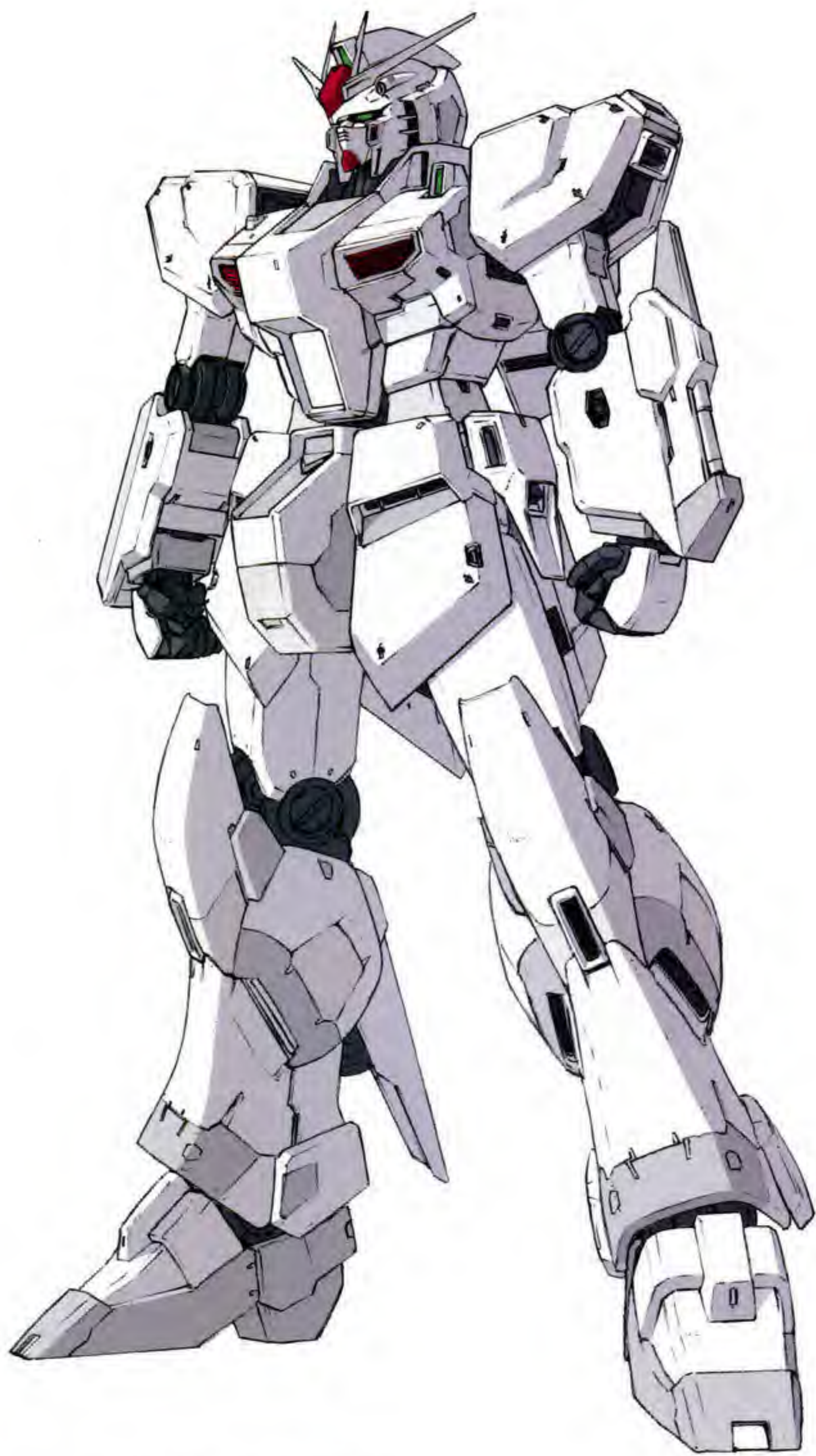
これに対し、ネオ・ジオンとの取引に応じることとなったA E社グラナダ工場は、通商担当のレブリオ常務の指示に従い、警備体制を強化するなど万全の構えて対応

していた。当時、A E社における各工場は、さながらひとつの企業であるかのように独立性が高く、例え同じグループ企業に属す職員であったとしても、隣の工場で何が製造されているのかさえ満足に知ることができない状況にあった。

それにも関わらず、ネオ・ジオンにとつての最高機密といえるサイコフレーム関連技術が流出する。宇宙世紀0093年初頭、A E社の材料開発部門を通じて、フォン・ブラウン工場にサイコフレームが横流しされたのである。同工場がサイコミュー搭載型MSを開発していたのも、その試作一号機がネオ・ジオンの仇敵ともいえる地球連

邦軍の外郭新興部隊「ロンド・ベル」に納入予定であったことも、決して偶然ではないだろう。これが戦い合う両陣営に兵器を供給する「死の商人」としての皮算用によるものだったのか、あるいは別の意図があったのかは今とまでは判らない。ともかく、フォン・ブラウン工場が建造を進めていた連邦宇宙軍向けの新鋭機、RX-93（νガンダム）に急遽、サイコフレームが実装される運びとなったのである。

かくして図らずも兄弟機となったMSN-04とRX-93が、シャア・タイクン大佐とアムロ・レイ大尉というふたりの「英雄」によって運用され、その後のアクシズ攻防



■ロンド・ベル隊に機体が引き渡される前、同隊に渡された資料に添付されていたとされる（νガンダム）の外観図。初期のテスト時にこの図と同様の塗装が施されていた可能性もあるが詳細は不明である。

RX-93 vGUNDAM

v-Gundam
vガンダム
型式番号：RX-93
全高：24.2m
頭頂高：22.0m
本体重量：27.9t
装甲材質：ガンダリウム合金
出力：2,980kW
推力：97,800kg
センサー有効半径：21,300m

武装
ビーム・ライフル
グレネードランチャー
ビーム・サーベル×2
90mm バルカン砲×2
ニュー・ハイパー・バズーカ
シールド
シールド・ビーム・キャノン
ミサイル×4
フィン・ファンネル×6

DATA

HEIGHT: 22.0m

WEIGHT: 27.9t

TOTAL OUTPUT: 2,980kW

TOTAL THRUST: 97,800kg

ARMAMENT

BEAM RIFLE

GRENADE LAUNCHER

BEAM SABER × 2

60mm VULCAN CANNON × 2

NEW HYPER BAZOOKA × 1

BEAM GATLING GUN × 2

SHIELD

SHIELD BEAM CANNON

MISSILE × 4

FIN FUNNEL × 6

戦にて激突、共に未帰還となったことはあまりに有名であり、ここで詳細を語る必要はないだろう。重要なのは、これらサイコフレーム搭載機が第二次ネオ・ジオン戦争に投入され、実戦において良好な戦績を示したことで、サイココミュ搭載型MSの新たな境地を切り拓いたという点である。

しかしながら、開発環境は一転して悪化する。まず、宇宙世紀0093年3月の一連の戦闘において、「地球寒冷化作戦」に失敗したばかりか艦隊戦力のほとんどを喪失したネオ・ジオンが、事実上の壊滅に追いやられたことが問題となった。総帥を失ったことで、組織の立て直しすらままならない状態のネオ・ジオン側からの新型機開発の発注など望むべくもない。また、連邦サイドとしても、「地球圏を脅かす存在」が消え去ったことで、とかく開発費がかさみがちなうえ大量調達も望めないサイココミュ搭載機の開発に、巨額の支出を割く大義名分を失ったのである。

さらに問題だったのが、俗に「アクシズ・ショック」と呼ばれる不可解な現象の原因として、サイコフレームの

介在が指摘された点にある。軍広報は一連の戦闘終結から間を置かず、小惑星「アクシズ」の落下を阻止したのは、ロンド・ベル旗艦（ラー・カイラム）のクルーたちによつて構成された白兵戦部隊による決死の爆砕作戦が成功したためであると発表。分断された「アクシズ」の一方が、地球の引力圏を脱する際に観測されたオーロラの如き「光の帯」についても、爆砕時に生じた大量の破片と粉塵が大気との摩擦で燃え尽きた時に生じたものであると結論づける「最終報告書」を早々と公表していた。

だが、その一方で調査部門によつて、まったく異なる結論を記載したレポートが宇宙軍参謀本部に対して提出されていたことが、近年の情報開示により明らかとなっている。このレポートによると、サイコフレームは試験段階からサイココミュ・デバイスとしての優秀性を示しながらも、許容量を超える感応波を受信した場合に原因不明の発光現象を起こすというトラブルを抱えていたという。問題なのは、この発光現象が発熱こそ伴わないものの、時として物理エネルギーに転化し、一種の力場を形成することが観測されていたことにある。開発陣により「サイコ・フィールド」と命名されたこの謎めいた力場が、

「アクシズ」を巡る攻防戦でも発生していたのではないかと……それがレポートの肝であった。

曰く、隕石の落下による「核の冬」の到来が叫ばれるなか、地上からも目視可能なまでに迫る「アクシズ」を目撃した人々が、恐怖とともに発したであろう莫大な感応波が、RX-93（vガンダム）に搭載されたサイコフレームを媒介として、大規模なサイコフィールドを形成。結果として隕石を文字通り「押し返した」のではないかとという推論である。

常時なら、オカルトやファンタジーの領域だと蹴されそうな仮説であつたとしても、物理法則に反した「奇跡」を見せられた直後とあつては無視できない。参謀本部としても、レポートの内容を鵜呑みにしたわけではないのだろうが、ほかにすべてを説明しきるだけの仮説があつたわけでもなく、受け入れざるを得なかったであろう。仮説の真偽はどうあれ、ともかく理論が解明されていない不可解な現象を伴うサイコフレームの開発を、そのまま続行させるわけにもいかず、AE社に対しては研究の無期限中止を命じるよりほかになかった。



■「シャナジウ」のベースとなった「スタイン01」は、シャナジウ・オールドタイプ導入試験機として「U.C.計画」の一環で生み出された。その完成形のひとつが「シャナジウ」であり、またフル・サイコフレーム機（ユニコーンガンダム）でもある。両者は単純には見えないが、MS 単位としての戦闘能力はほぼ同等と、いっていいものであったろう。「スタイン01」は試作機ではあるが、無条件でセプトモのものが前めから高い完成度を誇る「正しい」ものであったことは間違いない。

■開発コードは本来「スタイン01」（あるいは単に「スタイン」）の予定は本機のロールアウト時点まで用いられ、以後「シャナジウ」と改称される。その後、ネオ・ジオンによって改称を受けた本機が「シャナジウ」であると認識するにつれ、通って改称前の開発機名「シャナジウの原石」の意味での「シャナジウ・スタイン」と呼ぶようになった。



その名は「原石」

連邦軍上層部が第二次ネオ・ジオン戦争の戦後処理と、「アクシズ・ショック」に関する情報統制に奔走するなかで、サイコフレームの処遇に関して動きが生じる。開発再開に向けてA.E.社と軍部の双方が、新たな道筋を模索し始めたのである。

A.E.社は、ネオ・ジオンからサイコフレーム搭載型MSの開発を請け負う過程で、サイコフレームの製造設備をグラナダ工場内に設けていた。サイコフレームの開発が中止となった場合、巨額の設備投資を行ってまで用意したその生産ラインを、ほとんど稼働させることなく捨て去ることになる。当然、投資額を回収することなく捨て去ることになるわけだ。経営上、到底許容できるものではない。文字通り衝撃的な結果を示した「アクシズ・ショック」を目的にしたりしたからといって、最大手の商売相手である連邦軍に悔みづいてもらっては困るのである。関係者の証言によるとA.E.社は、発明者であるネオ・ジオンすら生産能力を保有していなかったことを連邦軍サイドに告げ、唯一の「メーカー」であることを強調し、リスタ・コイントロールが可能であると強く主張したようだ。そうとなれば、軍部としては情報管理の徹底を求めつつ、利用法を模索したくなるというものである。

また時を同じくして、宇宙軍参謀本部の高級将校たちの間で、「アクシズ・ショック」の要因にサイコフレーム搭載という「ニュータイプ」がらみの要素が挙げられていたことについて、問題視する声が上がってきたことも無視できない。仮に「ニュータイプ」と「奇跡」を安直に関連付け、「人類の革新」を説いたジオン・ズム・ダイクンの思想に結びつけられたとしたらどうなるだろう。ネオ・ジオンの瓦解によって勢いを失っていたジオン・ズムに根ざしたスバースノイド独立闘争に、ふたたび火を付けかねない。

い。もちろん情報統制をかけてはいたものの、アンダーグラウンドの報道が反体制派の世論形成戦略に利用されることは歴史の常であり、決して楽観視はできない状況である。こうした「歪んだニュータイプ論」を封殺するには、「ニュータイプ」を確実に制することができる強力なアンチ・サイコフレーム兵器の存在が欠かせないというのが、彼らの主張であった。

サイコフレーム搭載機を売りたいA.E.社と、優秀なアンチ・サイコフレーム兵器を欲する軍内の派閥……、需要と供給が噛み合えば、後は表向きに体裁を整えて財源を確保するだけだ。かくして、宇宙軍参謀本部が立案していた「連邦宇宙軍再建計画」の枠内で、サイコフレームを搭載した新型MSの開発に関する予算が計上されることとなった。これが後に「U.C.計画」と呼ばれることになるプロジェクトの発端である。

このように着々と外堀が埋められていく中で、A.E.社は先行して極秘裏にサイコフレームの研究を再開する。とはいえ、一度は軍部からサイコフレームの開発中止という方針が打ち出されていた以上、事は慎重に運ぶ必要があった。駆動系への改良型サイコフレームの導入を予定していたRX-93系列機（俗に「ヘビー・ウェポンシステム」と呼ばれる増加装備を装着するRX-93HWS試験機）など、すでに動き始めていたサイコフレーム搭載機の開発計画をすべて白紙撤回したうえで、別途、新たに社内プロジェクトを立ち上げたのである。

当時、A.E.社に在籍していたある設計技師の証言によると、新規プロジェクトの主幹はフォン・ブラウン工場からグラナダ工場へと移管され、MSN-03やMSN-04を開発してきたメンバーを中核として、「部」RX-93系列機を手がけたスタッフを合流させるといって「特別編成」が敷かれたようだ。その上で基礎設計段階に入っていた



■軌道上において機動試験を行う「スタイン01」。この機体もまた、最終的に「ガンダム」に置き換えられ軌道中に存在・シフトする機体となる。機体は「ガンダム」の機体を受け継ぐことになる。

RX・93系列機のデータを転用し、サイコフレームの技術検証機の建造に着手したらしい。軍部からの正式発注を待たずに建造が始められたのは実験機には、ネオ・ジオン向けサイコミュ搭載機の系譜を示すMSN-06Sの形式番号と、原右を意味する「スタイン01」(Stein 01)の開発コードが与えられた。これが後に「シナジー」と呼ばれることになる機体である。

フル・サイコフレームへの挑戦

MSN-06S(スタイン01)は、ムーバブル・フレームの構造材として、部分的にサイコフレームを採用していた。MSN-04(サザビー)やRX-93(ガンダム)がコクピット・プロダクトの周辺部分にサイコフレームを実装することでサイコミュ・デバイス的小型化を成していたが、これを駆動系へと拡大することで、機体制御への応用を試みたのだ。そのため、「バイオセンサ」のテクノロジーを発展させた「インテンション・オートマチック・システム」と呼ばれる新機軸の操縦システムを開発。コクピットで極知したパイロットの感応波を増幅し、ダイレクトに駆動系の挙動に反映させることで、完全なる「思考によるコントロール」の実現を目指したのである。

関係者の証言によると、駆動系にサイコフレームを導入するというアイデア自体は、フロン・ブラウン工場が進めていたRX・93HWS試案から引き継がれたもので、操縦システムについてもすでに設計がほぼ完了していたという。問題はサイコフレームの強度であった。そもそもサイコフレームはサイコミュ・デバイスとして設計されたもので、コクピット・プロダクトの外殻に用いることができる程度の剛性を有していたとはいえず、構造材として開発されたものではない。そのような材質で機体を支え動かす

ムーバブル・フレームを造ろうというのだから、入念なテストが必要だったのは言うまでもないだろう。それでも従来の操縦システムであれば、機体挙動のほとんどが事前にプログラミンクされていたモノシロン・データに依存するため、負荷のかかる部分をシミュレーションにより算出することも可能であろうが、思考制御となれば話は別である。パターン化できない人間発した動きを、その時々要求されるということで、膨大なデータ取りが不可欠であったのだ。またムーバブル・フレームの剛性のほか、追従性の確認も必要であった。「インテンション・オートマチック・システム」により、思考によって機体をコントロールできるとはいっても、その反応速度が遅ければ意味がない。少なくとも既存の操縦システムと同等の追従性が担保できなければ、実戦投入などできないからだ。

つまり、ロールアウトに伴い「シナジー」というベクトルを与えられていた「スタイン01」は、本来「U.C計画」で予定されていた「フル・サイコフレーム機」の雛形として、サイコフレームの剛性と追従性を検証するための役割を与えられた機体だったのである。そのためか、フレームにより負荷がかかる状況を創り出す目的で、機体の外装には過剰ともいえるほど推進装置が取り付けられ、高機動仕様としてまとめ上げられている。一方、武装面はRX・93系の標準武装の延長線上にあるものしか用意されておらず、フアンネルなどの無人攻撃端末も実装されることはなかった。

フル・サイコフレーム機
フル・サイコフレーム機は、フル・サイコフレームを採用した機体。機体は「ガンダム」の機体を受け継ぐことになる。機体は「ガンダム」の機体を受け継ぐことになる。

■ 日本映画のワンカメ撮影には、赤く塗られたA18(18インチ・20センチ・ドッパ)が用いられたといわれる。撮影した写真は別冊のなかでも、当時のA18がグレースケールで出回っていたという。新東宝・日活の生像館に保管されたA18(18インチ)には、いくつかの傷痕が存する。そうしてはドリーミーランド原稿の複製で生み出されたのが、ここに分類された複製である。これは、新東宝がまだ都村の注文で複製するものではない時期であり、スチールドラマなどの巻に対しては複製を依頼するワタダスベツを有していたこと(しかし、巻の原画は複製が困難であるなど、複製時期の後のこと)があったように、その巻の仕様や複製されることはなかった。このように経緯で、製品がのちに本に写された順序を持つという機材のためか、後に18インチに引換が施された巻、印刷したA18・フクロム大粒の変更と同一箇所が異なることなど、色色に再認識されたようだ。



■(シアンジュ・コタマシ)は映画賞証明の媒体として開発された両面で、面がな仕様の異なる音楽型テープ。また、資料に付属するたぬりムービー、フレームのものを含め多くの種類製品が同時に生産されたと言われている。字、14.5mmに彫られた媒体のほかに、シアンと青の2種を製造されたものとされた。半透明のフィルムに彫られる。

加工された原石

宇宙世紀0094年6月15日、サイド1から月方面に向かう航路上で、トラップ板巡洋艦(ヘンカイ)と、その僚艦である同(ヘー・デルス)が、ネオ・ジオン残党のMS部隊の襲撃を受けた。軍広報の発表によると、この戦闘により(ヘンカイ)および(ヘー・デルス)は撃沈され、約400名のクルーが戦死、生き残ったのは救命ボートで脱出した僅から名のみであったという。

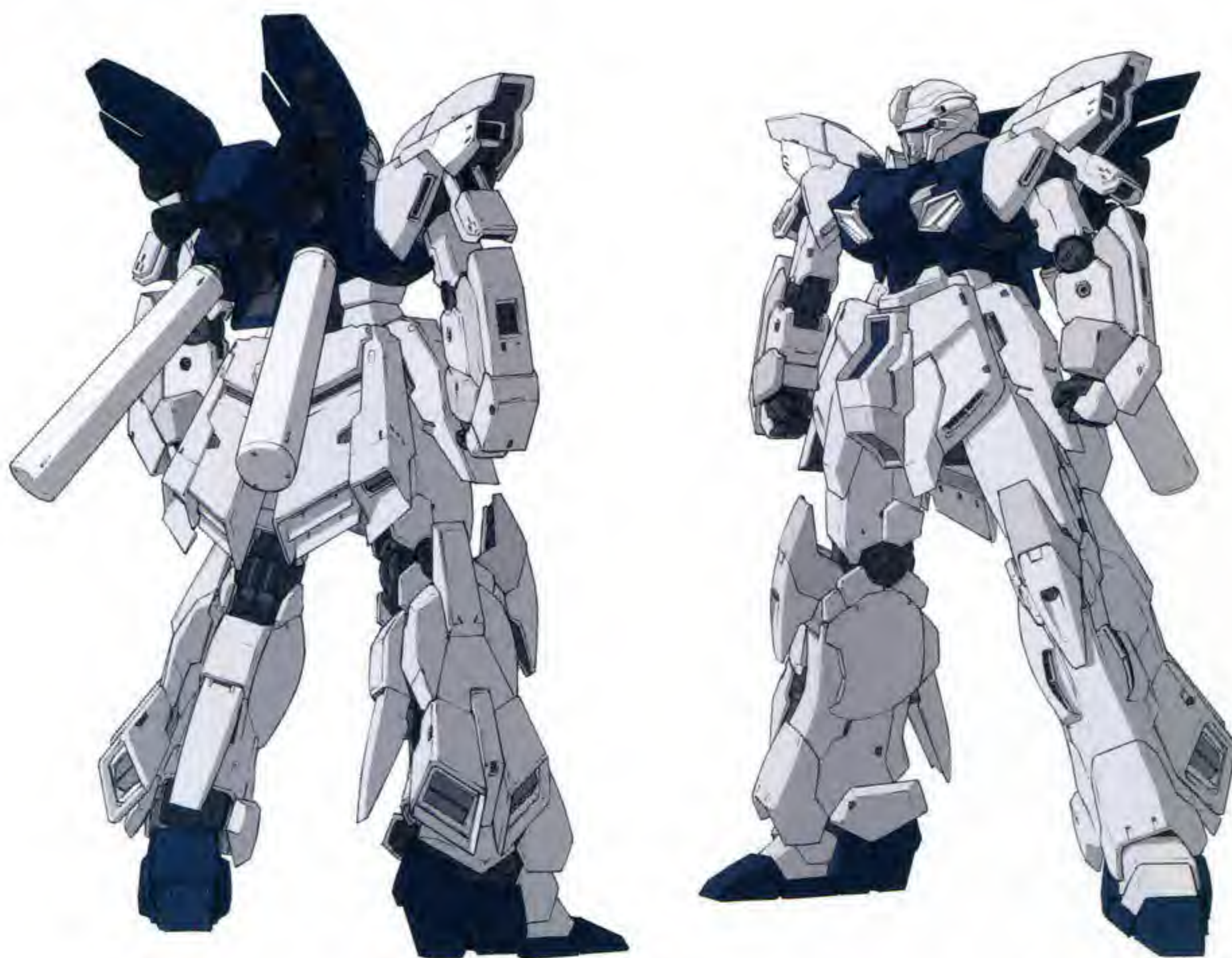
襲撃事件の数日後、調査委員会が発表した情報は、スコミ各社を通じて全世界に配信され、大いに注目を集めた。ネオ・ジオン残党のMS部隊の中に、赤色に塗装されたAMS-119「ギラ・ドーガ」が確認されていたためである。「シャアの再来か」の大見出しとともに、「二艦の戦没をセンセーショナルに伝えた報道は、「シャアの反乱」の記憶が新しい状況で、一般大衆にも強い印象を残した。事前に襲撃を察知した中央情報局の命令で、「ウンカイ」に準備し対策に奔走していたカルロス・クレイグ大尉の奮戦と戦死という悲劇的なエピソードが添えられたことも同情を買うことに貢献したが、それでも3日も経つ頃には、世間の目は別のコースへと向けられるようになり、重要な事実が知られることはなかった。機密指定の解除を受けて、ひっそりと公開された軍関係の記録を丹念に調べることでも、ようやく判明した事実……それは、「ウンカイ」がMSN-06S（シナンジュ）のタイプ1機と、その整備部品、および武装一式を輸送する任務に就いており、これをネオ・ジオン残党に奪われていた、というものである。

実は当時から、アスター・グラウペルのネットワーク上に

は、(ウシカイ)襲撃事件の様子を周辺宙域を航行していたジャンク船の船外カメラが撮影したとされる映像が出回っていた。この映像によると、戦闘中に赤色のAM S・119が(ウシカイ)に取り付いた直後、同艦のMS デッキより、突如として白色のMSが出現、連邦軍所属のRGM-89(ジェガン)タイプを撃破したうえで、(ウシカイ)と(ラー・デルス)を立て続けに攻撃して沈める様子が記録されていた。元々、ロンダレンジより撮影された映像は極めて荒く、補正に補正を重ねたことであろうと判別できる程度のものである点は考慮しなければならぬが、この映像が意味するものは大きい。なぜなら、ネオ・ジオン所属機の援護から、MSN-06Sの奪取に至るまでの時間があまりに短いのだ。

宇宙世紀0080年代半ばに登場したりニアシートが、その後のグリブス戦役や第1次ネオ・ジオン戦争を通じてデファクト・スタンダード化し、操縦システムの国際規格化が進んでいたといえる。MSN-06Sは新規軸の操縦システムを採用した実験機である。おつげ本番で動かせる類のものではない。いかに「インテンション・オートマチック・システム」をオフにして、通常モードに切り替えたとしても、そう簡単に起動できるものかどうかとも疑問だ。また、たつた機のMSで通る程度の人員で、戦闘配備中の巡洋艦から、重要機密である積み荷をかくも短期間のうちに奪えたというのが、どうにも解せない。たまたま襲撃した艦隊が輸送していた実験機を強奪したという偶発事には思えず、そこに奪うべき目標があるぞと知つたうえで行動に思えるのだ。それどころか、輸送していた連邦軍サイドが、製造を担当したA.E.社側に内通者がいたのではないかとさえ、疑いたくなるほどの段取りの良さなのである。

MSN-06S SINANJU STEIN



■ MSN-06S (スタイン 01)

こうした事実から、連邦宇宙軍とA.E.社上層部が結託し、襲撃を装って計画的にネオ・ジオン残党側に実験機を譲渡したのではないかという、陰謀説が一部で囁かれている。彼らの主張によれば、「連邦宇宙軍再建計画」および「UC計画」を推進したい軍部とA.E.社にとっては、当時のネオ・ジオンは世間を納得させるだけの「脅威」足り得ておらず、力添えが必要であったというのだ。A.E.社としては反地球連邦勢力は、有益な取引相手である。「シヤアの反乱」の失敗により、瓦解したネオ・ジオンが力を取り戻すことは経営上、歓迎すべき事柄であろう。一方、連邦軍サイドとしても、残党勢力がこのまま細分化して無数の見えざるテロリストと化すよりも、ひとところに集まった方が対処は容易となる。その意味でも、連邦側とA.E.社、そしてネオ・ジオン残党の利害が一致していたというのだ。果たして、この仮説が事実であったのかどうかは、確たる証拠となるような記録が残されていない以上、今となつては解らない。とはいえ、A.E.社側がいかに社内プロジェクトであったとはいえ、わざわざジオン式の形式番号である「MSN」ナンバーを与えていた点などを考慮すれば、あり得ない話と切つて棄てることもできないだろう。

元ネオ・ジオン関係者を名乗る人物から得た証言によると、MSN-06Sを手にしたフロントル派ネオ・ジオンは、正式な運用に先駆けて、まずは徹底的な機体の点検を行ったという。実験機という性格上、各種データをモニタリングする機器が無数に取り付けられており、収集したデータを送信する機構さえ存在しようである。自機の位置を発信するような機体を実戦に用いるわけにはいかない以上、機体のクリーニングは必須であったのだ。



■ MSN-06S (シナンジュ)

また、「インテンション・オートマチック・システム」という新機軸の操縦システムが採用されていたため、稼働試験も通常型MSと比べて入念に行われたようだ。同システムを完全に動作させるには、サイコミュの調整が不可欠であったし、実装されていたサイコフレームもA.E.社により改良が加えられていたため、ネオ・ジオンの技師たちにとっても未知の部分が多かったらしい。

さらに諸々の調査と試験を終えた後も、外装の全面的なリニューアルという大規模な改修作業が待っていた。本体とともに予備部品一式を奪うことに成功していたとはいえ、中長期的な視野に立てば在庫は決して十分ではない。したがって、特に推進系統などの消耗部品に関しては、在来機と共通化しておくことはないと判断したようだ。また、その作業と同時に装甲形状も刷新。直線的で角ばった印象のあるそれを、流線型の「ジオン風」のデザインに変更したうえで、全面を赤色で塗装した。これは「シャアの再来」を演出することで求心力を確保していたフル・フロンタルの乗機とするための政治的判断であつたらしい。

以上のような経緯を経て、原石であった「ヘスライン01」は研磨され、「赤い彗星の亡霊」としての輝きを帯びた宝石へと変貌を遂げた。これ以降、本機はネオ・ジオン内部でも「シナンジュ」と呼称され、以後、「ヘスライン」と呼ばれることはなかったという。



MSN-06S

STRUCTURE AND SYSTEM

MSN-06S シナンジュ 構造とシステム

MSN-06S「シナンジュ」は、サイコフレーム搭載の駆動用モーターを改良し、これをパイロットの思考によって直接操作する「シナンジュ・オートマチック・システム」を導入した試験機である。武器は「ブラスターフォーム」である。性能上、最大装填搭載状態におけるバスターフォーム限界、シナンジュ・オートマチック・システムがそれに及ばず、効果やパイロットに与える生理的影響の有無、統合兵器システムとの親和性などを実験するため製造された機体であるが、これを改裝し完全な実戦機体として完成させたものが、赤い彗星の再来と呼ばれたワル・クワダールの駆るカラーMSN-06S「シナンジュ」である。

本項では、赤い外装で認知度の高いMSN-06S「シナンジュ」の構造とシステムについて解説するが、その元となったMSN-06S（「シナンジュ・システム」以下「システム」と表記）とは不可分の関係であるため、必要に応じて「システム」についても同時に記述する。ただし、「システム」に関しては不明な部分も多いため、推測の域を出ない内容もあることをあらかじめお断りしておく。

ST

MSN-06S

SINANJU STEIN



■シナンジュ・スタイン腕部

前腕部には、ビーム・サーベルの収納ラックが内蔵されている。これは単純なラックではなく、スライドさせることで腕部に装着したまま、ビーム刃を形成することができる他、固定ビーム・ガンとして利用することも可能であったようだ。

■シナンジュ・スタイン用シールド

〈スタイン 01〉用のシールドには、小型ミサイル4基とビーム・ガンが搭載されていた。この構造は、RX-93 向けのシールドとほぼ同じ構成である。

SJ

MSN-06S

SINANJU



■袖の装飾

フロンタル派ネオ・ジオン残党の所属機には、「袖」にあたる部分に「袖付き」の通称の由来ともなった独特のエングレービングが施されていた。これは旧公国軍の軍服の意匠を採り入れたものである。同派は組織固めのためにミネバ・ラオ・ザビを擁立するなど、ザビ家色を排していたシャア・デュラン時代のネオ・ジオンと対比的な政治戦略を採っていたが、「ジオン趣味」的な機体装飾もその一例といえるだろう。

Graphics by Anaheim Electronics **AE**

コンセプトMS（シナンジュ・スタイン）

シャアの反乱（第二次ネオ・ジオン戦争）によって突きつけられた現実とは、単なる一握りの非国家組織であつても地球に壊滅的な打撃を与えることが可能である、ということであつた。地球連邦にとつて一年戦争終結以来繰り返されてきた紛争は、マクロな観点から見れば正規軍対非国家武装勢力、言い換えればテロリスト集団との非対称戦闘といつていいものだが、正規軍は予想を上回る損害を被ることもあり、後を絶たない小競り合いによるわずかな疲弊消耗の積み重ねはいつの間にかボディブローの如く連邦軍戦力を削つていた。

しかし戦時のように軍事企業を統合し、あらゆる物資、資金を投げ打つようなMS開発・生産態勢をとることは軍事政権でもない限り不可能だつた。一年戦争以来、財政状態は必ずしも芳しいとはいえず、必然的に軍事予算も圧縮の方向に流れる時勢にあつて、再三にわたる紛争の勃発は危機管理の重要さをいやが上にも思い知らされるものであつた。

物量により「仮想敵」を圧倒する戦時のような態勢が困難であれば、来たるべき危機への備えは、少数で多数を制圧しうる圧倒的に高いアドバンテージを有する次世代MSの開発に帰着せざるを得なかつた。地球圏のMS技術はすでに連邦による完全なコントロールを不可能としており、サイコフレームを搭載した新たなMSやMAの出現が高確率で予測される以上、こういった考えに至ることはむしろ必然であつたろう。むしろ、治安維持のためにはある程度の数の維持も必須である。その

ため、可能な限り高性能な次世代のユーティリティMSの開発に資金、資材を集中させ、これと同時に旧世代MSでも運用可能な高性能多用兵装システム体系を実現することで旧式化したMSの兵器プラットフォームとしての性能向上を目指す。これが宇宙世紀0090年代初頭の連邦軍MSと運用兵器に求められるものであつた。

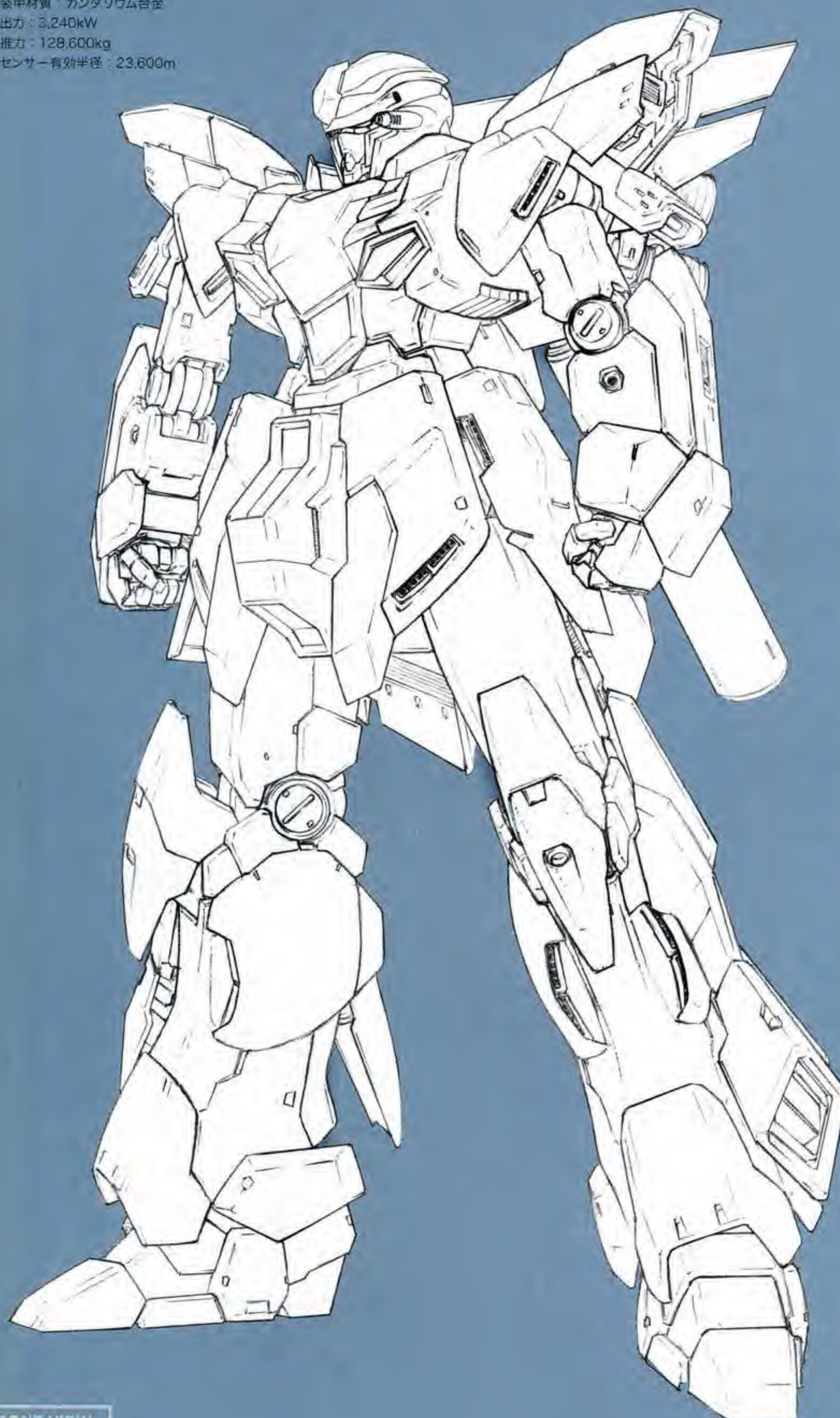
アムロ・レイの存在が大きかつたことは否めないが、RX-93（νガンダム）の成功でサイコミュ対応機材の導入方法に誤りのなかつたことを確認し自信を深めたAE社には、サイコフレームという新材料を大々的に用いることで連邦軍が求めるMSの要求仕様に明確な解答を用意し、（νガンダム）の基本設計を一段と先鋭化する方向に指針を定めた。機体のレスポンス・タイム短縮を最大の命題に据え、これを達成するために必要なシステムを構築することを目指し、具体的な形で生み出されたものが「サイコフレーム搭載モーター」や「インテンション・オートマッチ・システム」である。そして、これらのシステムが有効であることを実証するために開発されたMSが（シナンジュ・スタイン）である。

初めてサイコフレーム搭載モーター（以下PSFモーター）を装備し、インテンション・オートマッチによって機体をダイレクトに操作する実験機として製造された（スタイン）は、将来、機体全体にサイコフレームの導入を実現するために必要なデータ収集をするために必要な機体でもあつた。RX-93（νガンダム）に搭載されたものから一段と改質の進んだサイコフレームを内蔵する

ST

MSN-06S SINANJU STEIN

SINANJU STEIN
シナンジュ・スタイン
型式番号：MSN-06S
全高：22.6m
本体重量：23.1t
全備重量：54.2t
装甲材質：ガンダリウム合金
出力：3,240kW
推力：128,600kg
センサー有効半径：23,600m



DATA

HEIGHT: 22.6m

WEIGHT: 54.2t

TOTAL OUTPUT: 3,240kW

TOTAL THRUST: 128,600kg

ARMAMENT

60mm VULCAN CANNON × 2

HI BEAM RIFLE × 1

BEAM SABER × 2

BEAM CANNON × 2

MISSILE × 2

SHIELD × 1

FRONT VIEW

PSFIモーターを各部駆動用に使用、指令伝達や制御をインテンション・オートマチック・システムでダイレクトにコントロールするわけだが、サイコフレームの特性を含めてこのシステムにはまだまだ未知数の部分が多く、革新的なデバイスとして大いに期待されながらも理論上のデータと実働データとの乖離を小さくするために実働実験を重ねることが必要であった。当然ながら有人での試験も予定されていたが、それ以前に機体パフォーマンスの限界値を明確化するために無人の機動試験が行われることになった。無人試験運用は、機体搭載AIにあらかじめプログラムした基本機動を実行させることから始まり、随伴するMSから遠隔操作によってリアルタイムで動作を指示・確認するテストまで多岐にわたり、機体単独（いわゆるクリーンな状態）から運用予定の各種装備を搭載してのフルロード機動試験までが予定され、宇宙空間だけでなく重力下、有重力下での駆動確認も行われるはずであった。この時点ですでに（スタイン）にはサイコフレームを用いたコクピット・ブロックが装備され、RX-93用機材を改良したリニアシートも装備されている。しかしパイロットの生命維持に必要な機器類はオミットされ、代わりに多種多様な測定装置や疑似思念波受信機材が搭載され、パイロットシートには耐Gスーツにエラストマーとゼリー、精密測定用センサーを押し込んだクラッシュ・ダミー人形が据えられていた。

試験を行う宙域に向かう輸送艦には工場で完全にアッセンブルした（スタイン）1機と予備の部品が積載された。機体の試験は、生産施設で行われる繰り返し運転の駆動実験とは異なり、機体全体の駆動限界や各部の協

調、バランスなどを見るが、たとえば脚部関節に故障が起きた場合にはその場で補修は行わず脚部を完全に新しいものに置き替えて試験を継続し、故障した脚部は点検のち損傷・故障が軽度なものであればパーツを交換、損傷度合いがひどい場合にはそのままラボに返送する手筈であった。特に構造上の欠陥である場合、事態は重大なことになるため、即座に試験は中止することになった（おそらくそのようなことはないかと判断されていた）。最終段階ではあえて過負荷をかけて、機体をいじめるような試験を行う予定もあり、このため四肢の予備は5セット、頭部はセンサーを搭載したもの2基、センサーなしのもの2基、胴体関連のフレーム、各部位外装など多数のスペアが準備され、装甲形状や質量の異なるものも用意され、機体と二緒に運ばれている。また、AE社が（スタイン）専用火器候補として推薦していた火器も同時に搬送されていた。これとは別に（スタイン）による運用試験を行う次期多用兵装システムの二候補「MS用統合火器システム」は生産施設が異なるため別の貨物艦で輸送され試験宙域へ向かっていた。

しかし、フル・フロントル率いるネオ・ジオン残党によって（スタイン）は強奪され、どこから情報を入手したのか別送されているMS用統合火器システムも奪われる事態を招いてしまった。この失態によって、軍民どのぐらいの人間が詰め腹を切らされたのかは定かではない。しかし、少なくとも表向きには「MS用統合火器システム」は即座に計画の破棄が決定され、次期多用兵装システムは他の企業のプランに移行し、AE社のシナンジュ・スタイン計画も頓挫することになる。（スタイン）2号機、3号機は存在は確認されていないし、製造していたと

いう情報もない。しかし、強奪の一件にまつ噂が事実であれば、AE社は同様の機体を密かに隠し持っていた可能性は大きい。でなければ、RX-0の開発がそのような短時間で成し遂げられるはずもないだろうからである。

強奪した（スタイン）はフロントル配下の者たちによって改造が行われた。その多くはネオ・ジオン（あるいは旧ジオン）の技術者だったが、少なからずAE社に関連する企業の技術者も関与したと言われている。ネオ・ジオンへの協力者、あるいはジオニズムを信奉する人々は、コロニーや月面に限らず地球上にも一定数存在し、その大部分は実際に戦闘に加わるなどの行動を起こすわけではないが、ネオ・ジオンの活動に共感し資金援助を行う、あるいは情報面での協力を惜しまないという者たちは確実にいた。

（スタイン）がネオ・ジオン軍の残党に供与することを前提に密かな便宜を図られたという疑惑は拭い切れないのである。

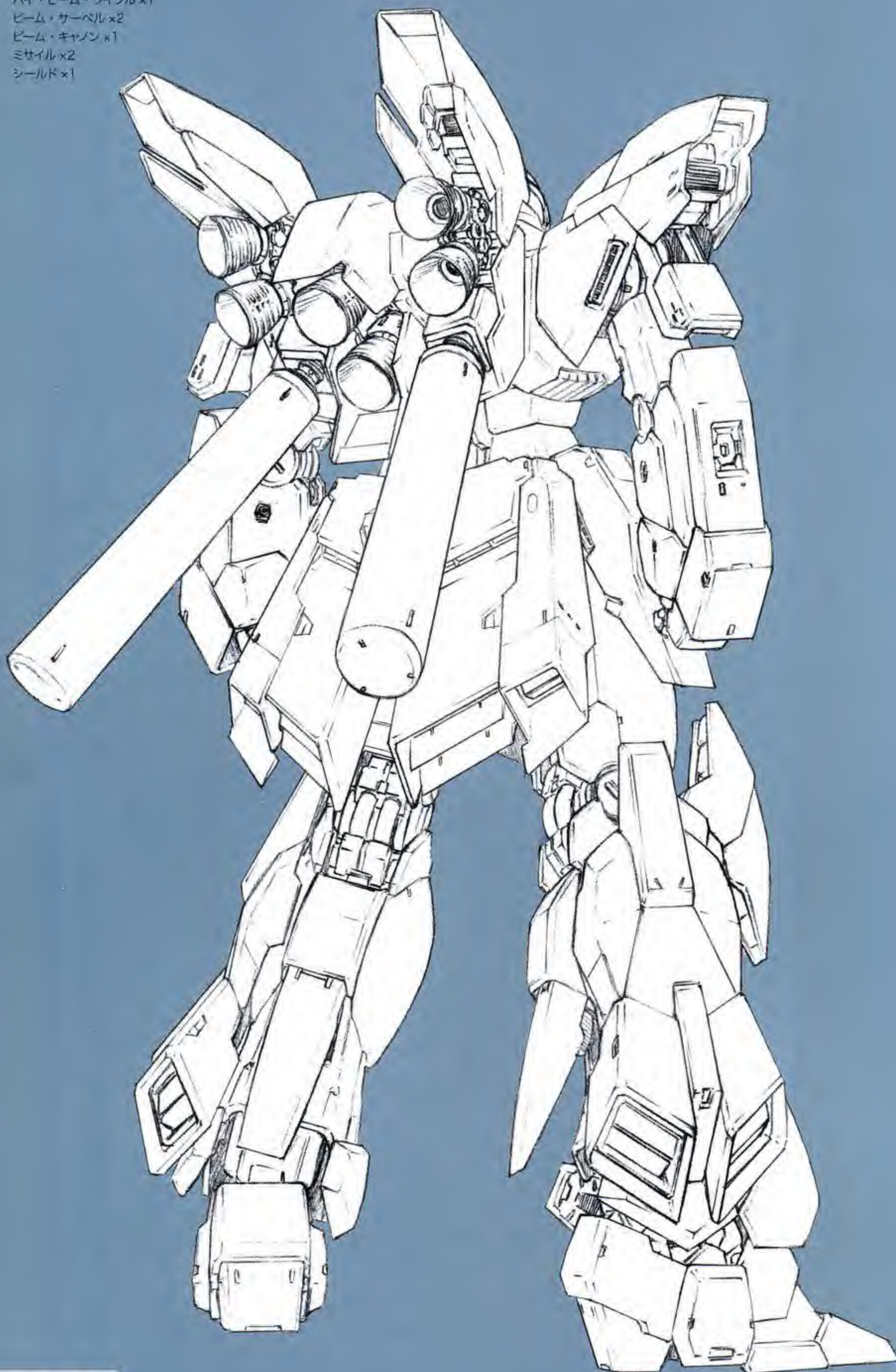
改修を終えた（スタイン）は（シナンジュ）となり、これには実際にパイロットが搭乗してセンサーの能力、機動性、反応速度などの運用テストが行われた。模擬戦の最中に相手機を実際に撃破してしまうような重大な事故も発生したが（これは（スタイン）専用の火器ハイ・ビーム・ライフルを用いたときに起こった。自動射撃管制システムに起因するものとされる）機体そのものの調整は順調に進み、フル・フロントルが搭乗するフラッグシップ機として完成されていたのである。

ST

MSN-06S SINANJU STEIN

武装

60mm バルカン砲×2
ハイ・ビーム・ライフル×1
ビーム・サーベル×2
ビーム・キャノン×1
ミサイル×2
シールド×1



REAR VIEW

新たな装甲

（シナンジュ）には、ネオ・ジオン軍の技術者たちが新規に製造した装甲が装着された。これは原型機である（スタイン）とはまったく印象の異なる、ジオン系MSの流れを汲む意匠を強く意識したものである。装甲の変更に関しては様々に憶測が語られ、たとえば損傷を受けたときに交換するための部品用部材の確保が困難であったとか、単純に（スタイン）のデザインを嫌いジオン系MSを象徴するような装甲デザインに変更するため新たな装甲を用意したなどであるが、実際的な問題としてMSまるごと1機分の実用可能な装甲をカスタムでオーダーするとなれば、単なる思いつきや拘りだけで実現するほど甘いものではない。

（スタイン）は次世代システムの実験用機体として、フレームはじめ各部部材は、宇宙世紀0096年当時の量産型実戦機を超える高い精度で加工製造されていた。データ収集を目的とする、あるいはデータ収集のための搭載機器はテストの内容に応じ頻繁に交換する必要がある、作業を迅速かつ柔軟に行えるよう配慮され、また高機動用スラスターのような可動部に外装する装甲も、内部機材の交換・変更に対応しやすいように、容易に着脱できる分割の多い装甲とするなど、実験機としての利便性を優先した機構だったため、実戦用機体としてそのまま運用するには耐弾性という観点から不安が残るものだった。

このため（シナンジュ）は、ムーバブル・フレームはそのままに、実戦運用に適した強固な構造を有する実戦用装甲が用意されたという。装甲とフレームの間には内部搭

載機器の保護を強化し保持をより強固にするステイを兼ねた二次装甲的な隔壁状構造が追加された。外装装甲にはガンダリウム合金が用いられているが、その材料の入手先や素材の種類に関しては明らかになっていない。

連邦軍の特徴でもある平面的な形状の装甲は、ビーム兵器対策として表面にビームコーティングを施し、実体弾兵器に対しては相応の避弾経始を有するように設計されているが、いっぽうのジオン系MS（それはネオ・ジオン軍に至っても多分にデザインとして継承されている）は全体を曲面で構成する装甲をまとっていた。この違いの大きな要因はそもそもの設計構造の発想の違いに通じる。小型宇宙艇にマニピュレーターとバイペダルギアを付けるというところから発展したジオン軍のMSは駆動系をはじめとする多くの機材をモノコックあるいはセミモノコック式の外殻内に収めるという発想であり、長らくジオン系MS設計の定石となっていた。そしてモノコックとしなければならなかったもうひとつの要因が、軽量超高強度材料の開発、選択に限界があったことである。

これに対しMS開発では後塵を拝する形となった連邦軍だったが、なにより強みはガンダリウム合金（当時のルナチタニウム合金）の導入が可能であったことにある。結果的に量産MSすべてにガンダリウム合金の導入こそ叶わなかったものの、設計の基礎はこの合金を有効に活用可能な形状にまとめあげることに向けられ、当時まだ加工性の良くなかったガンダリウム合金製装甲に合わせ平面的構成を多用した形状が生まれたのである。

（シナンジュ）の装甲が曲面を多用する膨らみの多い形状に何らかの物理的効果を見出そうとするむきもある

が、ムーバブル・フレームの技術が確立しガンダリウム合金の改質と物性バリエーション、成型方法が進んだ今日となつては、そこにながしかの物理的効果を求めることは難しいだろう。それは、連邦軍MSにも当然当てはまることで、平面的な構成の外殻に拘泥する必要性はすでに失われている。ただ、連邦軍のMS開発思想の根底には生産効率の高さに配慮するような傾向が染みついているようで、さらに形状がシンプルであればメンテナンスや補修も容易であるといった考え方も根付いているようである。

曲面装甲は実体弾兵器に対して平面の装甲を傾斜させるよりも多方向に対して避弾効果が高いという誤解が、いつの間にか生じているが、これは単に視覚的なイメージにすぎず実質的にMSが運用する火器（実体弾でもビームでも）、あるいは対MS用火器の直撃、あるいは至近での爆発を受ければ、モビルスーツは無事では済まないというのが現実である。

もちろん、耐弾・耐ビーム性能の向上は常に図られているが、それを撃ち破る兵器の高性能・高出力化も間断なく行われる。MSの時代になつても同じことの繰り返しで、ここにも矛と盾の無限循環が生まれているのである。

（シナンジュ）の装甲に話題を戻そう。優美ですらある曲面で構成される装甲は、ガンダリウム合金の加工技術が進んだとはいえ、その製造工程には手間のかかるものであることは間違いのない事実である。曲面を多用した装甲をあえて採用した最大の理由は、ありふれた説明になるが「新生ジオン」としての象徴」というアイコン的

SJ

MSN-06S

SINANJU

SINANJU

シナンジュ

型式番号：MSN-06S

全高：22.6m

本体重量：25.2t

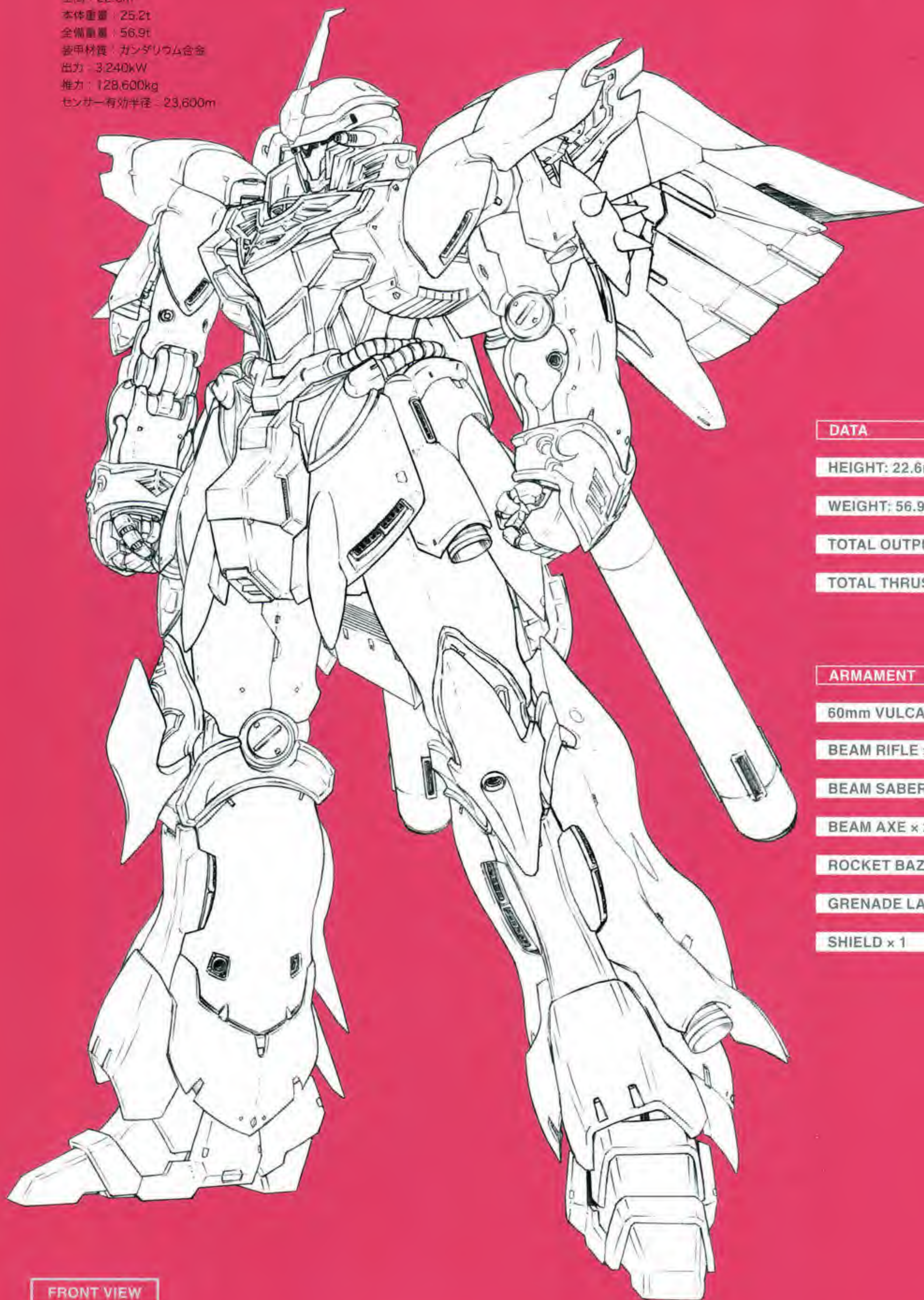
全備重量：56.9t

装甲材質：ガンダリウム合金

出力：3,240kW

推力：128,600kg

センサー有効半径：23,600m



FRONT VIEW

DATA

HEIGHT: 22.6m

WEIGHT: 56.9t

TOTAL OUTPUT: 3,240kW

TOTAL THRUST: 128,600kg

ARMAMENT

60mm VULCAN CANNON × 2

BEAM RIFLE × 1

BEAM SABER × 2

BEAM AXE × 2

ROCKET BAZOOKA × 1

GRENADE LAUNCHER × 1

SHIELD × 1

な意味合いからであるというのが実際のところであろう。だからこそ、装甲が試験機の仕様であつたかどうかよりも「スライム」のシルエットが「容認しがたいもの」であつたわけである。

この「スライム」用装甲は、もちろん単層ではなく、一体型の傾斜機能構造の装甲でもなかつたようで、ガンダリウム合金と異種装甲材との積層による多層複合材料で、各層を溶着して一体化したものであつたという。それゆえに製造にはいつそうの手間がかつたことは想像に難くない。相当に高度な技術が必要ではあるものの、大がかりで高度な技術を投入した設備に依存しなくてもよいという利点はあつた。加工技術そのものは過去のジオン軍MSに用いられたそれとは異なる方法論によるものであるため、職人的な高度の技量を有するAE社に關係のある技術者集団が直接関与している可能性を取り沙汰される一要因となっているが、真相は不明なままである。

装甲表面には耐ビーム用のコーティングが五層施されている。通常のMSでは二層コートが一般的であるが、これは単純にコスト面の問題といわれる。その点からも「スライム」の特殊性が窺える。それぞれのコーティングは、粒子ビームのエネルギー減退を段階的に行うためにかなりの厚みで形成されており、これは前述の溶着積層とはまた別の技術で施されている。おそらく溶射によるものであるかと思われる。表面に出る第一層は厚く層が形成されるが、ビームを受けた瞬間に蒸発、エネルギーの物理的な拡散を行うものである。ビーム化された粒子の運動エネルギーと衝突時に発生するエネルギーが超高温の熱エネルギーに変換されることで、被ビーム照射体

は分子レベルで崩壊し破壊される（ありていに言えば溶けることになる）が、第一層は、いわば粒子ビームに対する「紙鍋に含まれる水分」といったような作用を及ぼす組成を有する。もちろん、その効果は紙鍋の中の食材が煮えるほどの長時間にわたって継続するものではなく、数秒のレベルにすぎないものである。しかしこの数秒は、残る四層が装甲本体に到達するエネルギーを可能な限り殺ぐうちに十数秒という長さに増幅される。この時間は、高いレスポンスを持つMSにとって（さらにそのパイロットがニュータイプ素養者であつたならば）ビームの収束部位を外しつつ反撃にうつるには充分すぎる時間でもある。もちろんこの理屈は装甲が平面であろうが曲面であろうが大きな違いは無い。粒子ビーム兵器にとって装甲の形状は大きな意味を持たないのであるから。

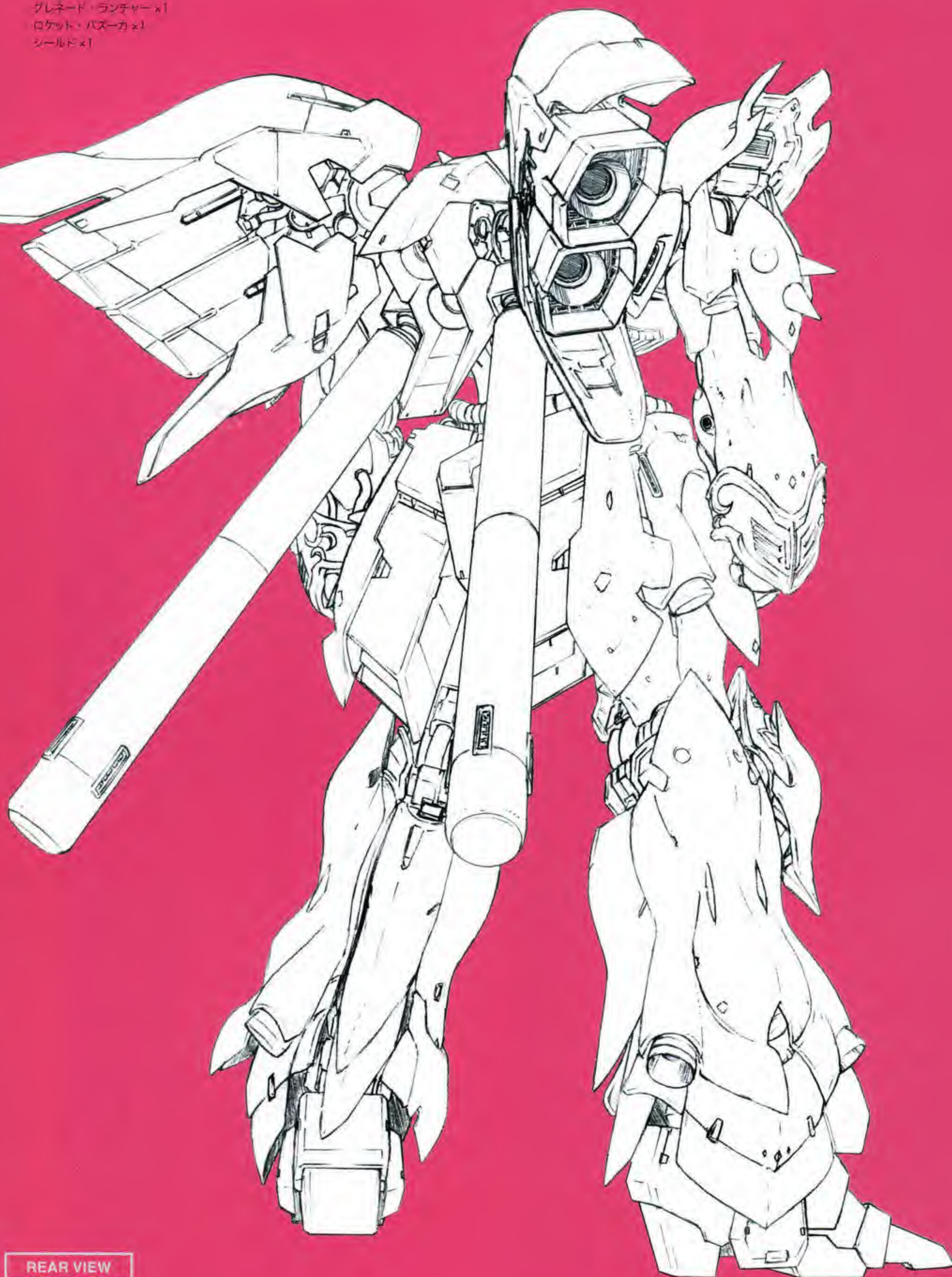
最終的に装甲本体表面に到達したビームのエネルギーは、いずれ装甲本体を溶解することになるが、機体フレームへの直接的な被害を最小限度に食い止めるために構造を破壊する装甲メカニズムは、古くから存在するリアクティブ・アーマーの対ビーム兵器版と理解すればいいだろう。理論こそあつたものの、それを実装したとしても光速で到達する高エネルギー粒子ビームと、時間差で追い打ちをかける実体弾の連携攻撃を受ければ防ぎきれものではない、というのが従来の考え方であり、連邦軍のMS装甲は、この方向への技術革新は遅々とした歩みであつた。実質的に回避不能であると考えられていたビーム兵器に対する「盾」として発展した理論の実証例が、「スライム」には装備されていた。それは、肉を切らせて骨を断つ、古来の達人剣客の域でなければ有効に活かすことのできないものであつたことも事実ではあるが、この多層型ビーム・エネルギー減衰コーティングは、多少の誇張も含めて「対

ビームコーティング」として流布され、それを応用した装甲を通称、エヴァポレイティッド装甲、あるいはクラッシュプル装甲と呼ぶようになっていた。

もうひとつ、「スライム」特有の、というよりはフロントアル派ネオ・ジオンのMSに装備された装甲の一部がきわめて特殊なものだつたことについて言及しておこう。連邦軍が擲弾と畏怖をない交ぜにして名付けた「袖付き」という呼称の元となるフロントアル派ネオ・ジオン軍MS特有の装飾がそれである。黒地に金の彩色を施した実戦兵器としては過剰ともいふべき装飾過多なレリーフ状の追加外装は、単なるネオ・ジオン再興のシンボルの構造としてとらえられていたが、実はそうではない。これは、かつてジオン軍のMS開発に携わりネオ・ジオン軍MS設計に際しても尽力したといわれる金属材料工学分野の専門家（個人名は明かされていない）の金属材料設計によつて生み出された材料が使われた。変性ガンダリウム合金とでも表すべきものであるが、かつてのガンダリウム合金がそうであつたように、理想的な高強度軽量耐熱合金であつたにもかかわらず加工性がきわめて悪い。連邦軍もRX-78の材料選定を行った際、近似の組成をもつ合金の実用化を目指したが、あまりの歩留まりの悪さにひとまず材料工学的「コールドケース」入りが決定されたといわれるいわく付きの材料である。当時の連邦軍がルナ・チタニウムX（カイ）と仮称した合金は、宇宙世紀0090年代に入つて再度研究が行われ、構造材用ガンダリウム79900系合金として部分使用が行われているが、装甲には適用されていない。依然として加工性に問題があるためというのが理由であつた。

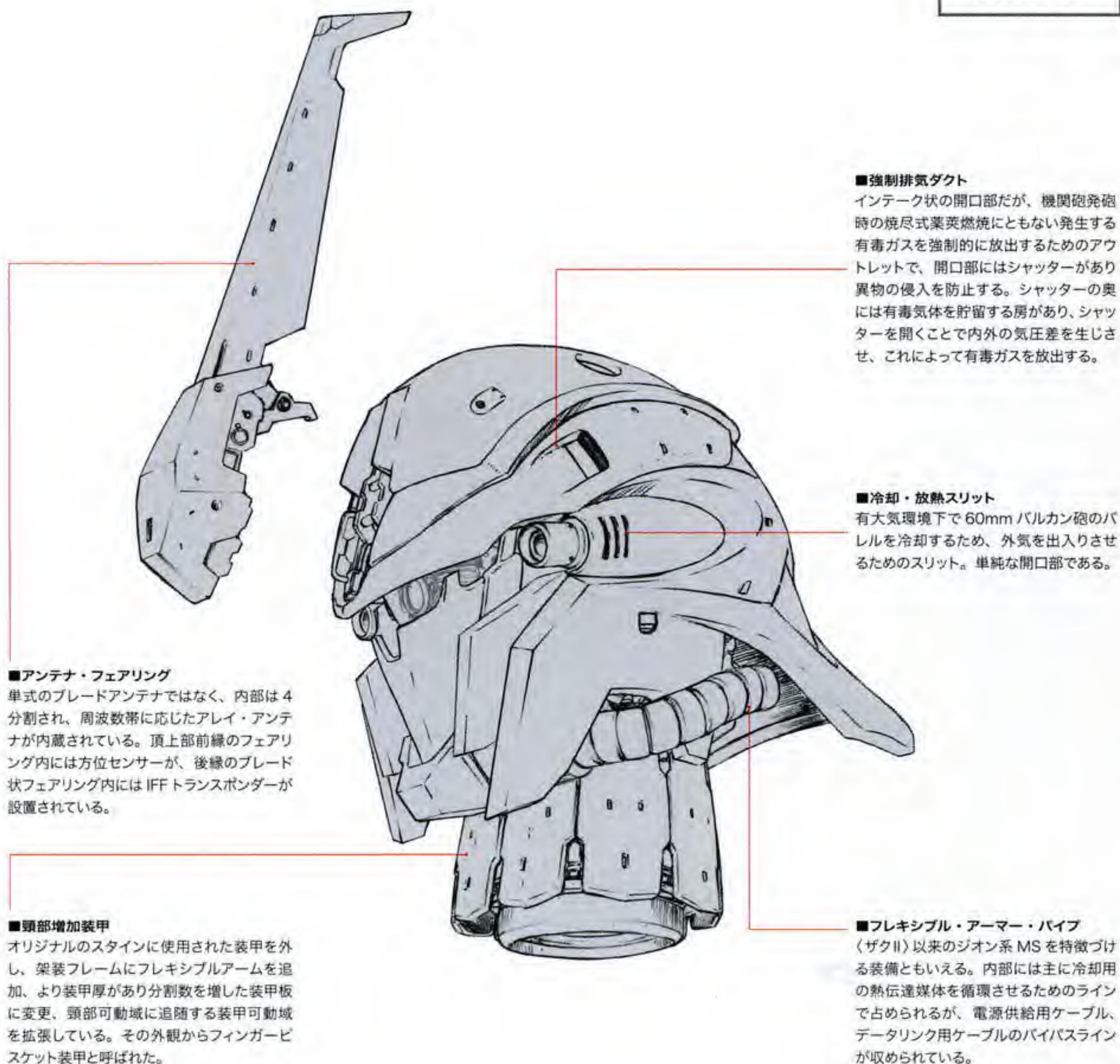
武装

60mm バルカン砲×2
ビーム・ライフル×1
ビーム・サーベル×2
ビーム・アックス×2
グレネード・ランチャー×1
ロケット・バズーカ×1
シールド×1



REAR VIEW

HEAD



頭部

かつて「赤い彗星」と恐れられたシャア・アズナブル乗機を彷彿させる前頭部のブレードアンテナが追加装備された以外、原型機〈スタイン〉のシルエットを残す頭部は、装甲外殻はそのままで、機材交換を容易にするため分割されていた頭蓋部装甲を接合、一体化したうえで、耐ビーム性能を向上させるためにエヴァポレイティッド・コーティングを追加している。ガンダム系MS特有の額部V字アンテナは〈スタイン〉には未装備で基部フェアリングのみが設置されていた。〈シナンジュ〉はフェアリング内に通信用機器を収納し、ブレード型フェアリング内には多用途アンテナを収めている。ブレードアンテナの形状は、あえて旧ジオンのデザインを踏襲した意味は今更いうまでもないだろう。

最も手が加えられたのは複式のカメラ部分で、〈スタイン〉に装備されたガンダムタイプと通称されるデュアルアイ方式から、ジオン系MSスタンダードなモノアイシステムへと改造されている。これについては別項で詳述する。

また、フェイス・プロテクターもモノアイの可動域に合わせるため新造され、〈スタイン〉のものは、アゴ部レドームともども撤去されている。

機体全体を〈スタイン〉とは全く異なる外観に仕上げているにもかかわらず、〈シナンジュ〉の頭部のみが〈スタイン〉そのままなのは、連邦軍に対する当て付けであるとも言われる。しかし機体装甲の変更は構造の強化が目的であり、その観点からすれば頭部外殻装甲の大幅な変更は必要がなかっただけという現実的な理由があげられる。いずれにせよ、〈スタイン〉は連邦軍ガンダム系MSのアイコンともいえるV字のアンテナ、頭頂部のセンサーが未装備で、かつてデュアルアイをモノアイに変更した時点で意匠的な象徴性は完全に失われたといってい

いだろう。

■アンテナフェアリングとブレードアンテナ

一年戦争時、ジオン軍では中隊長機を表すインシグニアとして頭部にブレードを装備していた。一年戦争後のMSにも意匠のひとつとして取り入れられてはいたが、第二世代のMSで、AE社の開発したMSであるRMS-108〈マラサイ〉では実用的な通信アンテナ用フェアリングとして装備された。

〈スタイン〉はブレード基部のフェアリングのみが装備されていた。これは通信に関連する試験項目の順位があとに回されていたため、新型の遠距離通信用送受信アンテナとアレイレーダーの試作が遅延していたことによる。額の基部フェアリング内には遠隔操作のためのアレイ・アンテナが収納されており、左右にはV字アンテナ接続用のソケットが設けられていた。

〈シナンジュ〉に改装された際、アンテナ基部内に収められたアンテナはそのまま設定を変更して活用されている。左右のソケットは内側から塞がれ、フェアリング上端にジオン伝統ともいえる中隊長表示ブレードを模した形状のブレード状アンテナフェアリングを装備、内部には多用途の全方位性アレイ・アンテナが内蔵され、レーダー探知、通信用として使用されている。

■メインカメラ

〈スタイン〉は、グレイズ・シールドの面積が小さいデュアルアイ方式のメインカメラシステムを搭載していた。この点からも、〈スタイン〉が実験機体ではあっても何らかの次期ガンダム系MSのプロトタイプに近い存在であったことがわかる。奪取後はジオン系MSの代名詞ともいえ

るモノアイシステムに換装されている。

メインカメラなど視覚センサーをはじめとする機材の交換は、従来のMS（運用試験機体であっても）で行われることはほとんど例がない。これは、搭載されているAIのプログラムを全面的に更新する必要があったためである。一年戦争当時のMSでは外部からの取得情報と機体運動のハーマナイズは、機上AIの助けを借りながらパイロットが行っていた。だが宇宙世紀0080年代の半ばごろから機体レスポンスをより迅速かつ精確にするためセンサー情報と機体運動の連動は機上AIへの依存度が高くなり、可変MSの登場以降この傾向はより強くなっている。第二世代MS以降、外部情報取得機器すなわちセンサーを交換すると関連する処理プログラムだけでなく機体全体のプログラムも更新が必要になったのである。このため、センサー機材の更新は行われても、異質なシステムへの変更は行われなくなった。

連邦軍のデモンストレーターともいべきガンダム系MSは、量産型MS生産のためのテストベッドであるケースが多かった。一般にガンダム系MSは少数生産の特殊機材であるため、大量生産には不向きな機器を搭載し運用する。そもそもデュアルアイ式光学感受機材もそうであり、一年戦争時のようなミノフスキー粒子の影響を極端に受けている環境下で火器の照準を精密に行う、あるいは周辺の情報を精細に収集するために必要とされ、左右の「眼」が感知したカメラ画像の視差と、カメラ光軸と軸で放たれるレーザーによって距離や移動速度などを測定するというコンセプトで設置されたものである。

しかし、可視光領域を除く大部分の電磁波に干渉する高濃度のミノフスキー粒子溜まりのような地域は徐々に少なくなり、宇宙世紀0090年代には、常在的に存在するバックグラウンド粒子のレベルとなり、電磁波

による通信や探知が可能になっていたことから、高性能といわれているデュアルアイを搭載する必然性が薄れつつあった。頭部の大部分を各種のセンサー機器が占めるレイアウトのMSでは、バックアップとしての機材ではないメインカメラを複式で搭載するために関連機材の小型高性能化をいやが上にも推し進めざるをえなかったが、それによって得た成果をスライド式のいわゆるモノアイ方式に変更し、火器の照準システムを外装式の「眼」として使うことが可能ならば、頭部の容積にゆとりができる。空いたスペースを頭部機関砲の弾倉にあてたり、あるいは通信機材や情報処理コンピューターの強化に使用できる。

〈スタイン〉では、あらかじめモノアイシステムを搭載しての運用試験が予定されていた。これはMS用統合火器システムと無関係ではない。火器搭載の射撃統合管制システムが先述した外装式の眼として充分機能することを実証し、モノアイ方式の可能性を探ることが目的で、いっぽうでデュアルアイではこれまでの立体視や視差による距離感の把握などという擬人化した性能の強化ではなく、左右で全く異なるものを観て情報を個々に分析、統合する「複眼」的情報処理システムの実験が行われるはずだった。

これらを統括するプログラムはコクピット内に増設されたコンピューターによって管理されていたため、そこからモノアイ時に必要な制御プログラムだけをコピーすれば、〈シナンジュ〉のモノアイ方式に機体の制御を対応させることは簡単であった。

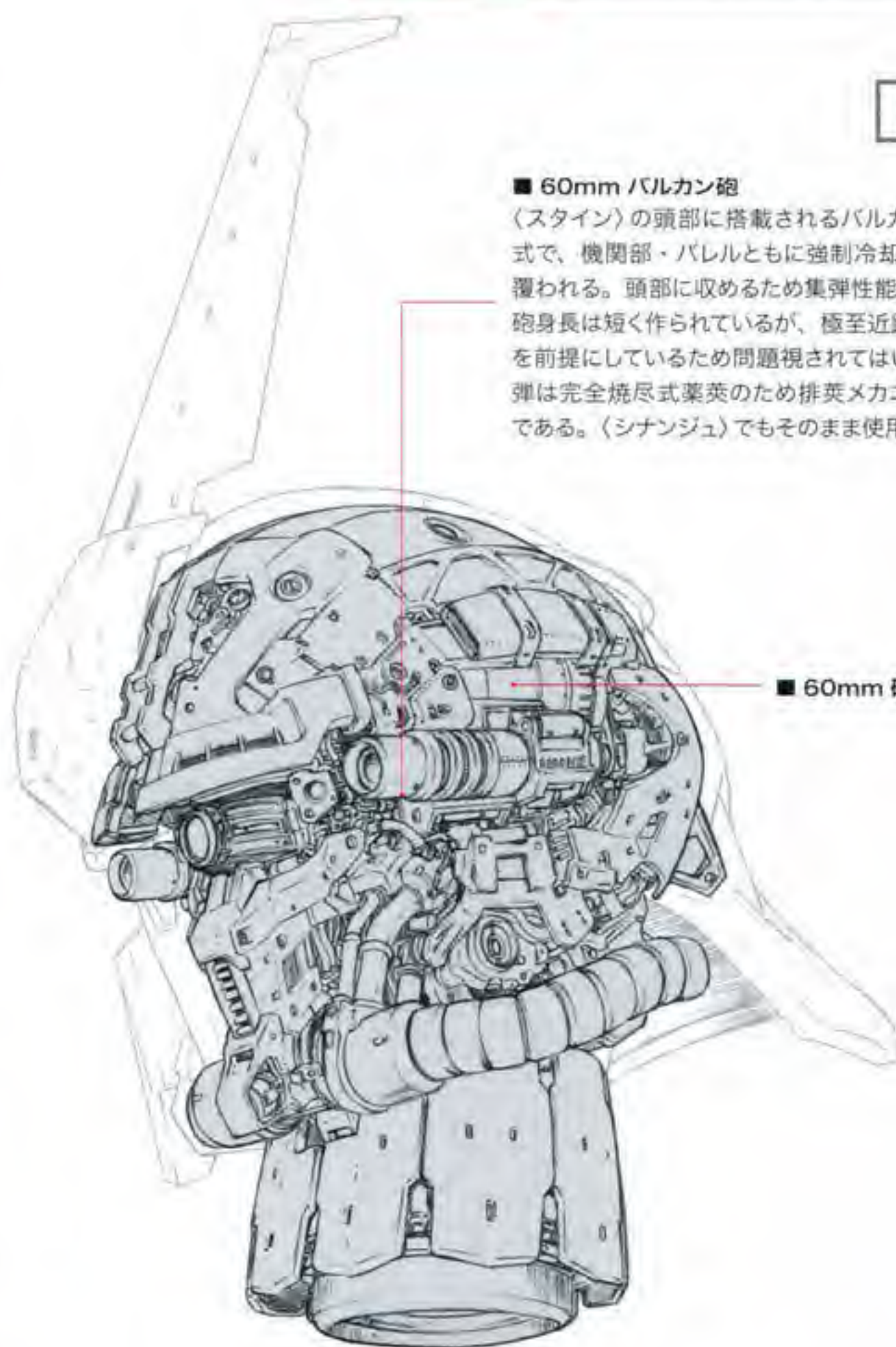
〈シナンジュ〉搭載のモノアイセンサーは〈スタイン〉用に準備されていたものではなく、いっそう小型・高性能化を進めた最新機器が搭載されたと言われている。これは月面にあるジオニクス系企業で作られた試作品ではないかといわれている。一見単眼式の、いわゆるモノアイセンサー

HEAD

■ 60mm バルカン砲

〈スタイン〉の頭部に搭載されるバルカンは3砲身式で、機関部・バレルともに強制冷却ジャケットで覆われる。頭部に収めるため集弾性能を犠牲にして砲身長は短く作られているが、極近距離での運用を前提にしているため問題視されてはいない。使用弾は完全焼尽式薬莖のため排莖メカニズムは不要である。〈シナンジュ〉でもそのまま使用されている。

■ 60mm 砲弾コンテナ



■ 60ミリバルカン

残党軍の手に渡ったかは不明だが、〈シナンジュ〉以前にNZ・666〈クシャトリヤ〉にも装備されているのではないかと考えられている。

連邦系MSに搭載される伝統的といってもいい固定武装の60ミリバルカンは、実験機体として製造された〈スタイン〉にも例外なく装備されていた。この機関砲システムは〈シナンジュ〉となつてもそのまま残され、その結果、ジオンの流れを汲むMSとしては珍しい固定武装を装備した機体となつた。〈スタイン〉に搭載された機関砲はバレル数が三本、射撃時には左右の機関砲がそれ

ぞれ逆に回転しトルクを打ち消すように作用する。発射速度は可変式で最大毎分4000発の射撃が可能だが、実際の射撃はバレルなどの過熱問題もあり1バースト最大100発と制限される。もちろんこれを超えて射撃し続けることもできるが、その場合はC整備（機体から外してメンテナンスする）が義務付けられている。

射撃時にわずかに発生する燃焼ガスなどの排気は、機関砲発射口上方にあるインタークーラクションダクトから強制排出される。機関砲発射口後方のスリットは大気のある環境でバレルを冷却する外気を採り入れる

ためのもので、宇宙空間では意味をもたない。

使用する60ミリ砲弾は撃発時に薬莖が燃焼する焼尽式を使用、発射薬は新規材料により改質された高安全性発射薬が用いられている。点火はイグナイターに通電することで行われるが、発射薬そのものが低感度であるため安全性はきわめて高い。被弾や故障などにより頭部で発射薬が誘爆することを避けるため頭部バルカン用弾薬では発射薬の安全性基準を通常使用の弾薬よりも厳しく設定しているが、〈スタイン〉で試験運用する予定であった砲弾は爆燃時のエネルギーをより大きくするため改質されており、既存のMSに搭載された60ミリバルカンよりも初速が向上している。したがって、バレルの素材もより強度の高いものと改修されていた。もちろん焼尽式であれば従来からの弾薬も使用が可能である。

もともと頭部バルカンは近接防衛兵器として搭載されたものであったことから、初期には徹甲弾と曳光弾のミックスで運用された。その後、RX-78が多用用途性を実証してみせたことから弾種のバリエーションはかなりの多様性を持つようになった。

〈スタイン〉搭載バルカンの場合、対艦・対MS装甲用の装弾筒付き高速徹甲弾、MSのセンサーにダメージを与えることを目的とした榴弾、散弾、フレシエット弾、高輝度発光弾が用意されており、給弾ラインを二系統とすることで左右四系統それぞれに弾種を選択することも可能である。装弾数は1門につき900発とされ、標準的な連邦軍MSの600発を大きく上回る。これはデュアルアイセンサーシステムを撤去したことによる空きスペースを利用したためで、〈スタイン〉のオリジナルでは600発搭載が標準である。

に思えるメインカメラユニットには、中央のメインセンサーに加え、左右三基、合計七基の高性能センサーが配置されており、もともと〈スタイン〉で実験しようとしていた「複眼式」デュアルセンサーの性能を凌駕するものとなる。これらの情報処理プログラムも同時にネオ・ジオン側にわたっているはずだが、〈スタイン〉にデフォルトで準備されていたプログラムとの整合、アジャストなどを誰がどのようにして行ったかは不明で、この新型モノアイユニットがフルスペックで運用できていたのかどうかも疑問である。

このセンサーがどのようなルートでいつごろネオ・ジオン

SJ

MSN-06S

SINANJU

HEAD



FRONT VIEW



REAR VIEW

ST

MSN-06S

SINANJU STEIN

HEAD



FRONT VIEW

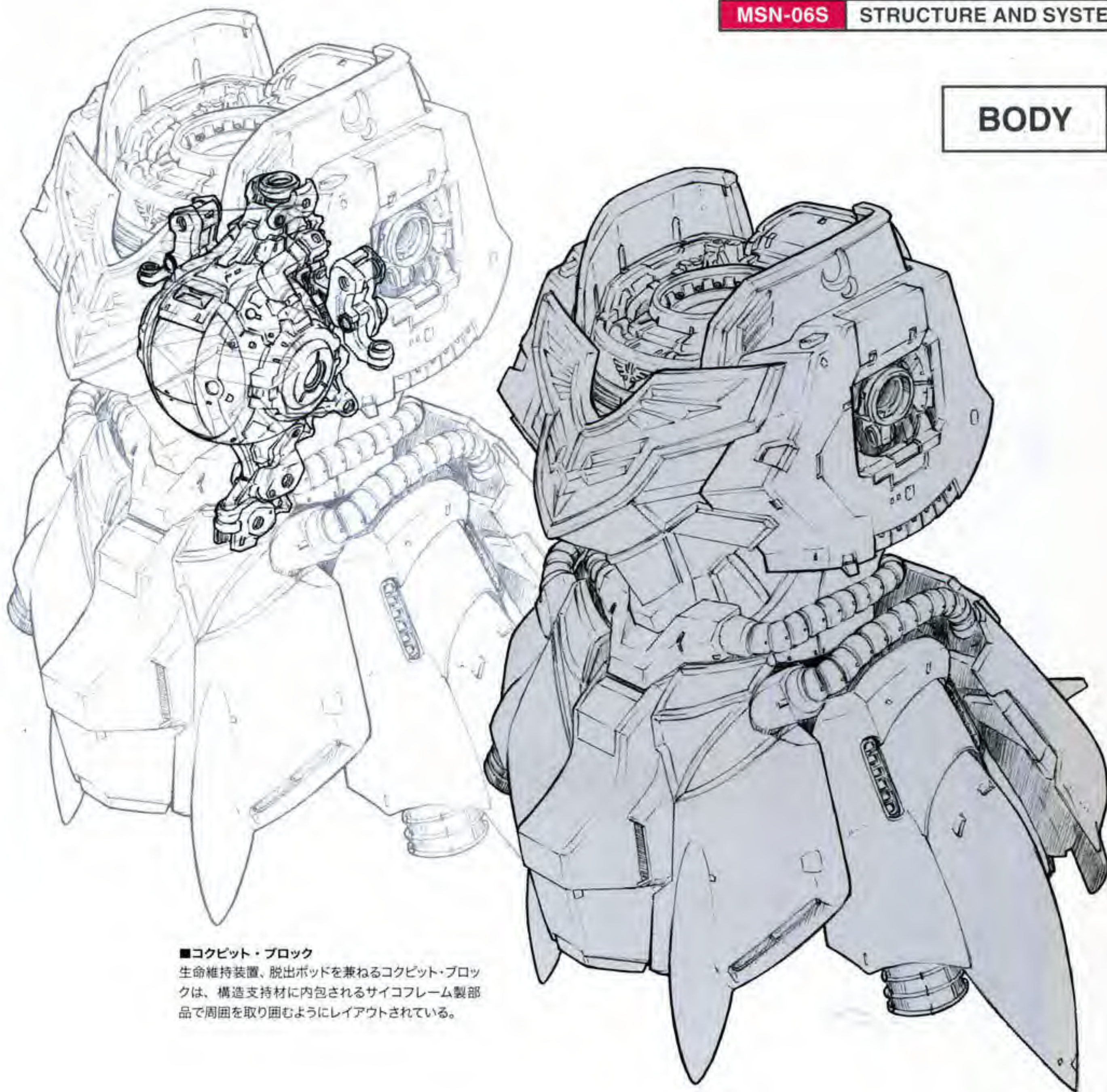


REAR VIEW



■〈スライム 01〉開発時にデザインされた頭部の外観想像図。額のフェアリング内にはいわゆるV字アンテナ用のソケットも準備されており、ガンダムタイプのアンテナを装着、試験する案もあったようだ。

BODY



■コクピット・ブロック

生命維持装置、脱出ポッドを兼ねるコクピット・ブロックは、構造支持材に内包されるサイコフレーム製部品で周囲を取り囲むようにレイアウトされている。

胸部

〈スタンイン〉にはRX-93〈レガンダム〉に機装されたコクピット・システムをベースに、精神感応波のインプット、アウトプット時の増幅、減衰を円滑に行える感応波制御機能を強化したデバイスが搭載され、〈レガンダム〉用リニアシートも装備されていた。しかし、強奪された時点では長時間の有人運用は想定されておらず、主要な実験はまず無人で行う予定であったことから、パイロットの生命維持に必要な器材は撤去されており、本来それらが搭載されるスペースには疑似感応波送受信装置、機上AIとは独立したモニター用コンピューター、各種計測機器等を搭載していた。またシート上にはパイロット・スーツを着た生体反応測定用のダミー人形が座らされている。

〈シナンジュ〉ではこれら実験計測用機器をすべて撤去し、予備電源や酸素発生装置などパイロットの生命維持に必要な器材を搭載、一般的な実戦機に準拠して仕様変更し、加えて防御性能向上を目的とした改修も行われた。

連邦系MSでは一般的に搭載されている胸部のカウンター・バーニア・スラスタは〈シナンジュ〉への改装時に完全に撤去された。空いたスペースを利用してジェネレーター出力向上のために増加パワーユニットなどを搭載している。カウンター・バーニアを廃したことで、制動性の低下や機体制御がアンバランスになることも危惧されたが、多くのジオン系MSでは機体各部に設置されたバーニア・スラスタで制動をかけることが一般的であったため、改修にあたり新たに装備されたバーニア・スラスタや脚側部スラスタの前方への可動域を増すことなどで対処で

SJ

MSN-06S

SINANJU

BODY



ST

MSN-06S

SINANJU STEIN

BODY



Graphics by Anaheim Electronics



きるといふ最終判断が下された。問題は制御プログラムの改変だけで、これはヘスタイン専用プログラム・ツールが無い状態からのスタートであるため最も不安視された部分でもあった。ジオン系のMSを多く手がけた経験をもつネオ・ジオン系のプログラマーがAE社のラボにあるメインコンピューターをハッキングしプログラム・ツールを入手したともいわれるが、いずれにせよ機体制動や制御バランスの不備はない状態に仕上がっている。

コクピット・ブロックの全面は、前述したルナ・チタニウムX系の材料で覆われた。カウンター・バーニアを廃したことで切れ目の無い装甲でカバーすることが可能となり、ネオ・ジオン残党軍を実質的に牽引していたフル・フロンタル大佐の安全を第一に考えていた関係者の不安を多少なりとも和らげる役になつていたようである。実質的にもオリジナルのヘスタインよりはるかにコクピットの防御性は向上しており、実戦向き機体として十分な装甲を有したことになる。

ヘシナンジュにはヘスタインでは見られなかったフレキシブル・パイプ状の機外装備が機装された。俗に動力パイプと表されるこの装備は、MSの時代を築く契機となつた二年戦争時の傑作機、旧ジオン公国軍のMS-06ヘザクII以来、ジオン系MSに多く見られるものである。作業用MSという名目で生産され実戦用本格生産型MSのテストベッドともなったMS-05は脚駆動部の出力不足に悩まされ、実戦型MSでは大型化して出力を向上させた駆動用モーターに変更、機装用の内部フレーム構造も強化する必要が生じた。また、視覚情報解析能力も戦

ST

BODY

MSN-06S

SINANJU STEIN



SJ

BODY

MSN-06S

SINANJU



闘兵器としては不足であると判断され、機材が更新された。胴体内には機体全体の冷却に関連する熱交換器が収められているが、戦闘可能時間を延長する目的で機外排出用蓄熱媒体の搭載量を増やすこととなった。一連の改修により、機体内容積が不足となったため装甲外殻の大型化も計画されたが、すでにMS-05をベースとした機体外殻は量産に入っていたため、急遽、対応策として提案されたのが装甲外殻内に収められている電力伝達系や冷却液循環用パイプライン、油圧系ラインなどを躯体の外に出すというものであった。各ラインは装甲と同素材で作られたフレキシブル・パイプ内に収められることになり、あの独特の外観を生み出すこととなる。量産機が完全な形でロールアウトした時点で制式にMS-06（ザク）と命名されたが、戦争に突入した時点でMS-05も予備兵力に組み込まれ、この機種も（ザク）と呼ばれることになった。しかし、両MSは事実上別の機種となっており、パーツ互換度は50パーセントそこそこであったため、兵站上混乱が生じることを避ける目的で、MS-06は正式に（ザクII）と呼ぶようになっていく。その後も、（ザクII）は大量に生産されバリエーションも多く作られているが、一貫して「動力パイプ」を外装しているデザインを踏襲しているのは、メンテナンスの利便性が高く、また特に脚部では内部に各ラインを配するよりも構造が単純で、かつ脚部の可動による配管・配線被覆用軟素材の疲労がほとんどない、などの副次的なメリットが生じたことが大きな要因といわれる。

（シナンジュ）に装備されたフレキシブル・パイプにも電装系や冷却系、および各部のバーニア・スラスタ用推進剤のラインが内蔵されている。（スタイン）では機体外殻の内側に収められていた装備をあえて外部に追い出した

のは、コクピット・ブロック全体を強化したためとも、ジェネレーター補器の装備強化を優先したため、あるいは搭載推進剤タンクの増積などいろいろと推測されるが、その真相は定かではない。おそらくそのいずれも正解であり、（ザクII）で使用が続けられたメリットもその理由であったのだろう。

駆動に関係するラインを機外に露出させている状態は戦闘時に大きな弱点を晒すのではないかと、一年戦争時にジオン軍のMS解析に携わった連邦軍技術者から多く上げられた意見だが、フレキシブル・パイプは軟素材でできているわけではなくMS本体の装甲と同質のものであり、機体内に収めたところで装甲を貫通するような攻撃を受ければ同じことであるというのがジオン側の評価であった。ジオン系の技術者から見れば、連邦軍が頑なに装備し続ける胸部のカウンター・バーニア・スラスタの配置こそ不安で、戦闘時に敵と対峙してもっとも狙われやすいコクピットの周辺に装甲が脆弱になる可能性の高い開口部を設けることこそ弱点を晒すことになりかねない、ということになる。設計思想の違いはこのようなところに象徴され、それは連邦とジオンの技術が融合してもなお、歴然とした違いとしてMSの上に表れているのである。

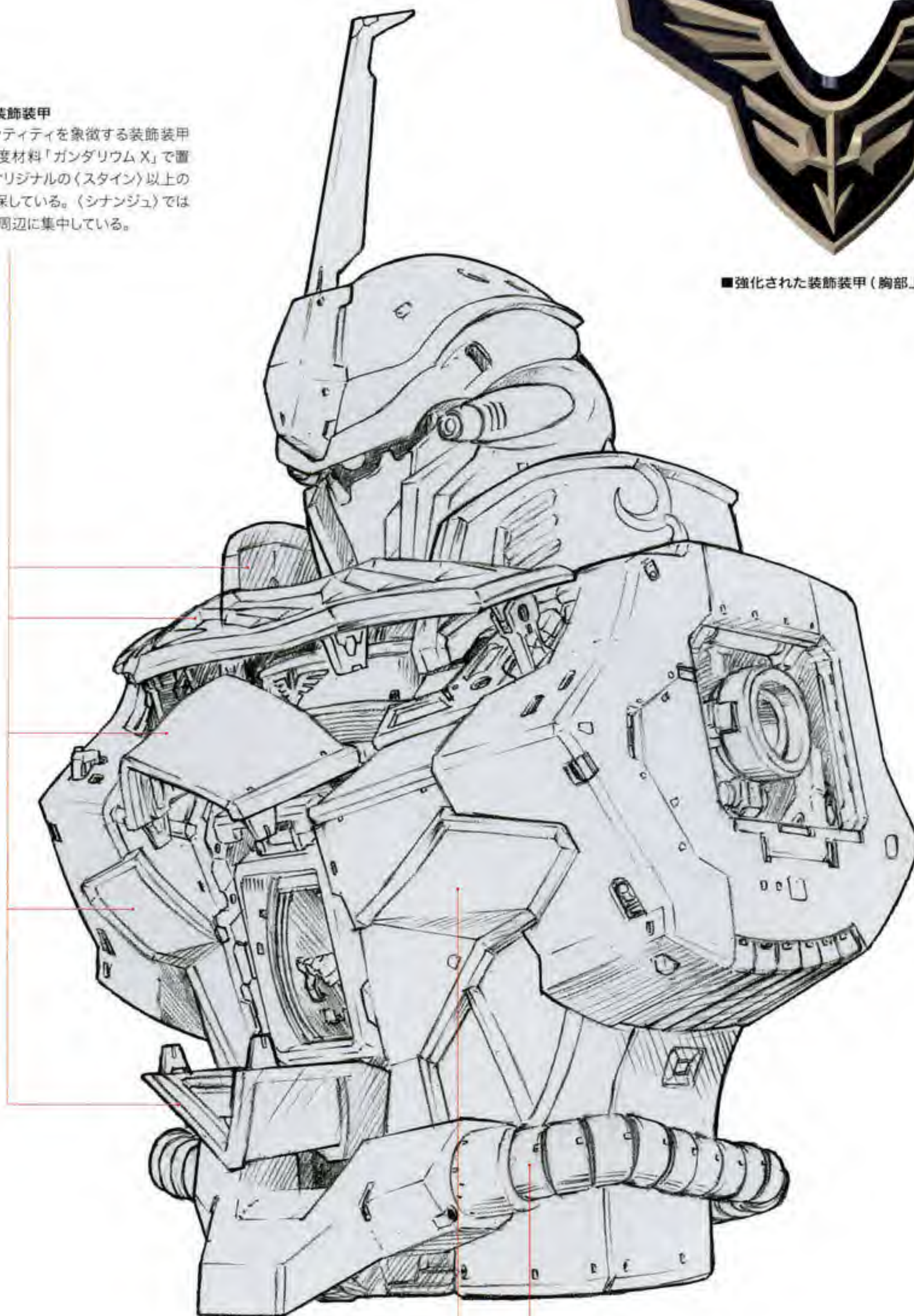
腰回りのフレキシブルパイプに関しては、MSN-04（サザビー）に搭載されたメガ粒子砲を（シナンジュ）にも装備する予定があったことの根拠とする憶測もある。しかし近接機動戦闘を重視した性能に特化させたとは思えない（シナンジュ）に、わざわざ大きな負荷のかかる大出力兵器をシステム上のリスクを負ってまで搭載する必然性はなく、むしろ手持ちの兵器でそれを補えばいいだけのことである、というのが通説になっている。

■強化された装飾装甲

自らのアイデンティティを象徴する装飾装甲は、一部高強度材料「ガンダリウムX」で置き換えられ、オリジナルの〈スタイン〉以上の装甲性能を確保している。〈シナンジュ〉では特にコクピット周辺に集中している。



■強化された装飾装甲（胸部上面）



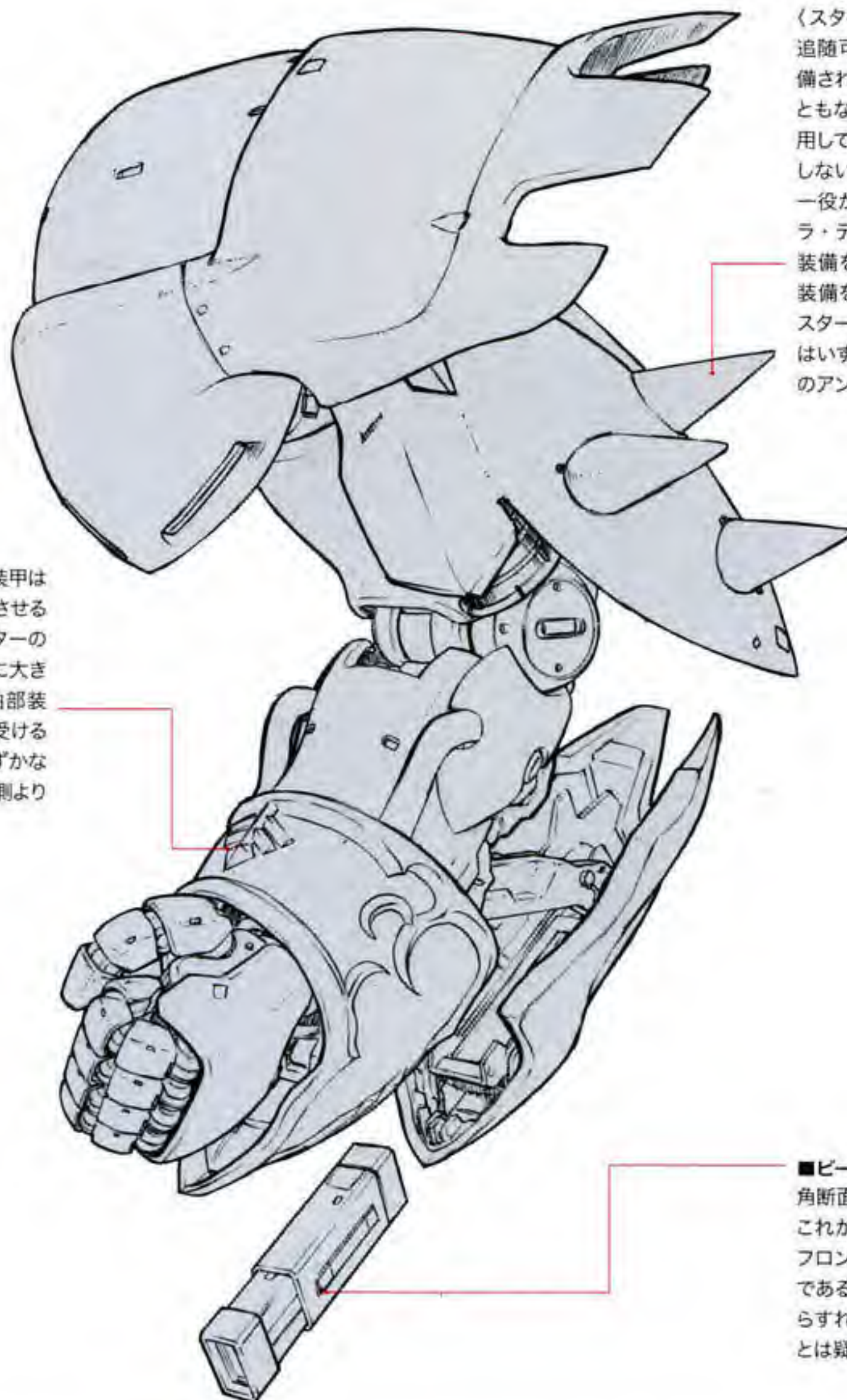
■カウンター・バーニア・スラスターの撤去

〈スタイン〉では連邦軍MS標準装備である胸部制動用スラスターが設置されていたが、〈シナンジュ〉ではこれを撤去した。これにより機体制動操作は難しいものになったとされるが、フル・フロンタルはそんなことを感じさせないまでに機体を縦横に操っている。スラスターを廃したことで、コクピット周辺の装甲強度も高まったこと、コクピット関連の整備時アクセスが容易になったことなど、その利点は大きかった。

■フレキシブル・アーマー・パイプ

胴体内に設置された電源、データリンクなどの配線、冷却用熱伝導媒体循環ラインを機体外に追い出し、パイプ内に収納している。これは機体の冷却効率を強化するため空いたスペースに二次熱交換器などを搭載、機体の運用時間延長を図ることが大きな目的であったといわれる。

ARM



■袖装飾装甲

ガンダリウムX合金で製造された装飾装甲はサーベルを固定したままビームを発生させる使用を考慮した設計で、マニピュレーターの手甲部装甲にオーバーラップするように大きく延長されている。〈シナンジュ〉の袖部装飾装甲は、敵サーベルの打撃を直に受けることも想定しており、溶断に要するわずかな時間を少しでも延長すべく、外側は内側よりも肥厚した構造になっている。

■スラスター・バック

〈スタイン〉では肩口の開口部と上腕部を保護する追随可動式装甲（フォローイング・アーマー）が装備される。この装甲は外装式装備のハードポイントともなった。〈シナンジュ〉は装甲の可動機構を利用して高出力の推進装置を搭載した。スイングこそしないが上下可動域は大きく、機体の高機動化に一役かっている。可動軸を共有するようにエクストラ・デバイス・ホルダーが収納され、オプションの装備を架装することが可能である。ただ、外装式装備を搭載した場合、肩部高機動バーニア・スラスターとフォローイング・アーマー搭載のスラスターはいずれか、または双方が使用不能となる設計上のアンバランスさがうかがえて、興味深い。

■ビーム・サーベル

角断面の本体グリップ（筐体）を有するものである。これが〈スタイン〉の試験候補器材であったのか、フロントル配下の技術者が用意したものかは不明である。形成されるビーム制御フィールドの形態からすれば、ネオ・ジオン系の技術が基礎にあることは疑う余地もないところであろう。

腕部

〈スタイン〉の肩から上腕は、肩関節部を前後から挟み込むように覆う装甲や上部の大型構造体、肩口を保護する懸垂式のフォローイング・アーマーなどで構成されるが、一見、大きく印象を異にする〈シナンジュ〉もこの基本フレーム構造をそのまま踏襲している。前後の肩装甲にはそれぞれ長短2対のリニアタイプの機動制御バーニア・スラスターを装備、内側にはタンクが搭載され、バーニア・スラスターへの推進剤供給を行う。

肩上部の構造体はアナハイム系MSの設計によく見られる特徴のひとつである。多くのMSでは上部構造体内部には機動用バーニア・スラスターを設置することが一般的であった。〈スタイン〉についても外観からそのような装備が設置可能なように見えるが、実際にはスラスターの類いは装備されていなかったようである。これが「設置予定であるが未装備」なのか「他の装備を搭載予定」だったのかはわからない。肩側方には上腕の動きに追随しながら可動する懸垂式のフォローイング・アーマーが付けられているが、可動域最大まで上方にスイングした際に上部構造体内に収まるように作られていることから、何らかの追加装備マウントとしての機能を持たせようとしていたのではないかと考えられる。

〈シナンジュ〉ではフォローイング・アーマーの駆動機構をそのまま流用する形で、内部にスラスターを装備し、肩口の保護にはスパイク付きの装甲を配置した。このスパイクは何のために備えられているのか不明だが、多分に意匠的な印象を優先したものと思われる。このスラスター内蔵の懸垂式装甲には、さらに収納式のエクストラ・デバイス・ホルダーも設置されている。これは〈シナンジュ〉

■高機動用バーニア・スラスター

〈スタイン〉に装備されているものをそのまま使用している。横方向への推力を得るために用いられる。複数枚設置された推力偏向バーンによって、噴射ガスの拡散・集束を調整することが可能である。

■姿勢制御用バーニア・スラスター

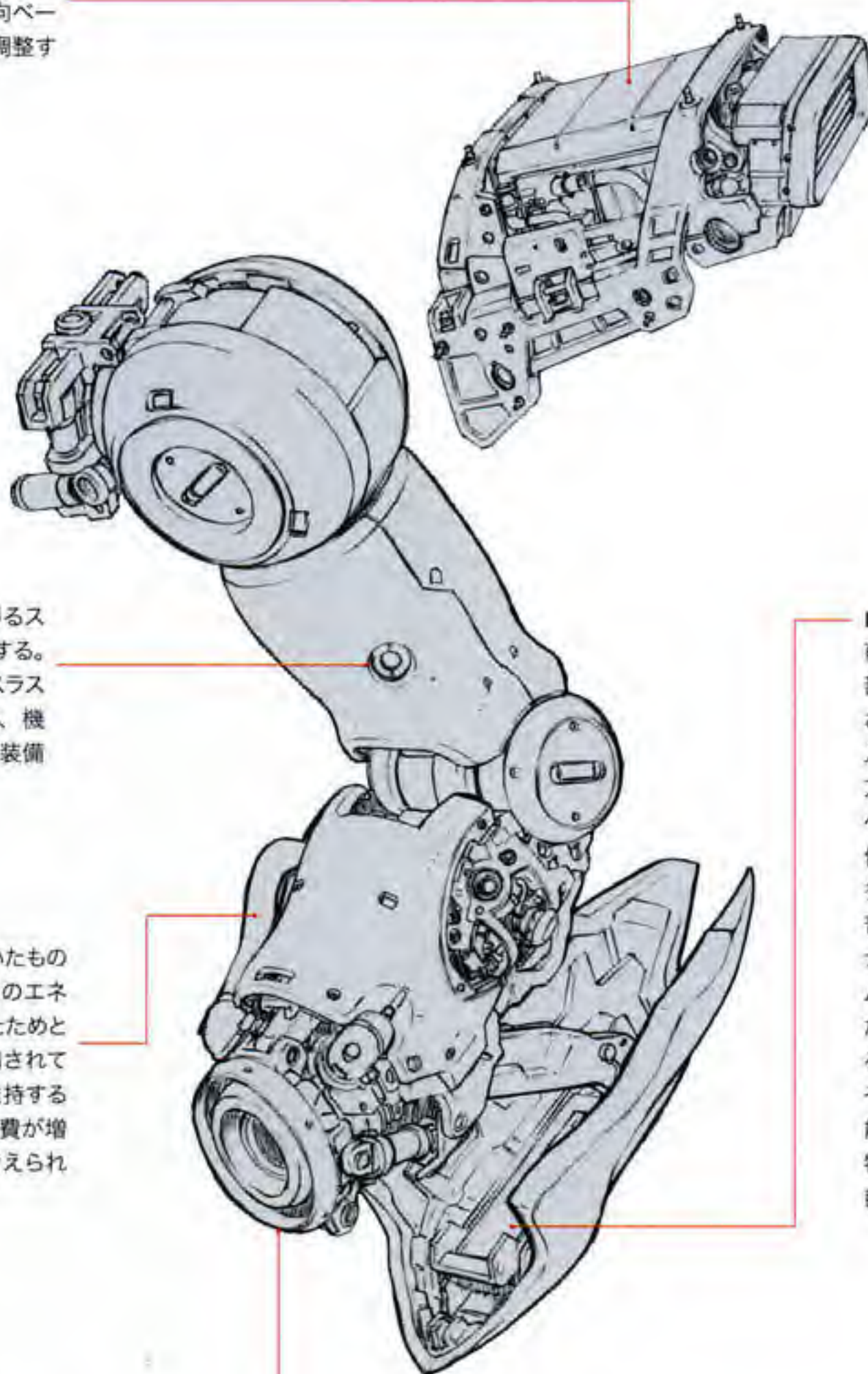
非燃焼式の高圧質量体噴出で推力を得るスラスターで、蓄熱媒体気化ガスを利用する。プロペラント・ペレット使用の燃焼式スラスターのような高推力は期待できないが、機体機動や姿勢制御には充分な補助推進装備である。

■エネルギー供給ケーブル

〈スタイン〉では腕装甲内部に配されていたものを強化、サーベルへの単位時間あたりのエネルギー供給量を大きくする必要があったためとされる。これは〈スタイン〉に本来装備されていたサーベルとは異なる偏向ビームを維持するフィールド形成によって、エネルギー消費が増大したことに対応するためであったと考えられている。

■インナー・フレーム

複雑な手首の動きを制御するため遊動式のリング状マニピュレーター・マウントを、アクチュエーター機能も有するアクティブ・サスペンションで支持する構造のインナー・フレーム。この外側にアウター・フレームが装着され、さらに外装装甲が架装される。



■ポップアップ式サーベル・ホルダー

前腕にビーム・サーベルを内蔵携行する方式は、内部機構の複雑さを増し、一方で構造体としての脆弱さを招くという理由から普及型MSではあまり採り入れられてはいない。しかし、従来からの「櫛掛け」方式に比べはるかに小さな腕部の挙動によってサーベルを使用可能状態にできることから、特殊用途機体（実験機や試作機など）では装備されるケースが多い。〈スタイン〉も同様であるが、本格的な量産普及化を意図した試験器材であったといわれる。〈シナンジュ〉もこれを活用しているが、装備するビーム・サーベルの形状がデフォルトの器材とは異なるため、ホールディング・トレイ部分は改造されているようである。サーベルはトレイから射出されるが、そのままホールド・ロック状態でのビーム展開も可能であった。ただ、〈スタイン〉では周辺の装甲に特に耐ビーム処理が施されているという記録はなく、自傷自損事故の可能性もあったものと考えられる。

〈シナンジュ〉の肩、肘など腕部に搭載されるフィールドモーターは当然ながら他の部位同様に〈スタイン〉のものをもそのまま使用している。これはサイコフレームを内

一説に、〈シナンジュ〉は将来的に肩部にジェネレーターを搭載し、機体の性能向上を図る計画があったと言われる。肩部ジェネレーターはZ計画におけるMSA-0011〈Sガンダム〉などで実現されている技術だが、構造的・物理的な制限が生じるため広く敷衍可能なものではなく実験的な色合いの濃い装備であった。しかし、最新のMSを入手することが難しい状況にあるネオ・ジオン残党軍にとっては、手取り早くジェネレーター出力を向上させて機体のポテンシャル向上を目指すためには、もつとも効果的な選択肢であったのだろう。

懸垂式装甲は〈スタイン〉同様に上部構造体装甲内部にスタック可能なようになっていた。この場合、上部構造体内に収められた推進剤タンクとスラスターがダイレクトに接続され、短時間の高出力スラスト発生が可能であるとされる。

追加された装備で、武器搬送用トレイとしてのシルドを極限までマルチ・ユーティリティ化し、ペイロード最大限の装備搭載によって重武装化した場合でも、本来のシルド・マウント・デバイスである腕の自由度を確保する目的で増設されたものである。作戦をおこなった際の画像が残っている。もちろんその際はスラスターの使用はできない。また追加武装は反動の少ないものであればマウントしたままでの運用も可能なように射撃統制ライン・コネクターも内蔵され、いわゆる「隠し腕」的な装備としての機能も有する。

SJ

BODY

MSN-06S

SINANJU



ST

BODY

MSN-06S

SINANJU STEIN





■強化された裝飾装甲(袖部分)

蔵したもので、RX-93に装備されたものと外見、サイズ共に同じであるため同系列のモーターの設計を利用して製作されていることがわかるが、駆動の命令や制御系統を一括してサイコフレームで処理するため周辺の補器類が簡略化されている。

前腕部にはビーム・サーベルを格納するポップアップ開閉式のストレージ・ユニットがあり、内蔵されるサーベル・

シース(マウント)を利用することで、マニピュレーター(手)でホールディングの必要もなくビーム・サーベルの運用が可能とした。この機構は(スタイン)で試験的に導入されたシステムであるが、それをどのように運用することがもつとも有効であるかを見極めること、使用に関する規定を規格化するためのデータ収集をすることが(スタイン)の試験項目であったが、強奪後に(シナンジュ)がいきなり実戦用のシステムとしてこれをそのまま流用し有効活用していた事実には驚きを禁じ得ない。

アナハイム系MSでは小型化の進んだビーム・サーベルの収納位置として前腕を選んだ機体が繰り返し現れている。(スタイン)の前身ともいえるRX-93は左腕外側部の専用ホルダーにビーム・サーベルを装備したが、これは簡易ビーム・ライフルとして機能する新型ビーム・サーベルでの射撃が可能であった。(スタイン)にこの機能が組み込まれていたという記録はない。

(スタイン)の上腕本体はごくシンプルな装甲で覆われるが、バランス制御を補助する小型のスラストが設置される。これは(シナンジュ)でもそのまま踏襲されており、装甲もそのまま流用されているようであるが、耐ビーム・コトティングを強化しエヴァポレイテッド装甲化されている。

(スタイン)は前腕部にも機動時の姿勢制御用バーニア・スラストが装備されているが、前腕に設置されたスラストは機体の軸回転に寄与するものであるため(シナンジュ)でもそのまま装備されている。(シナンジュ)の袖口には追加の裝飾装甲がオーバーラップ装備されるが、当然ながらルナ・チタニウムX系合金製である。

マニピュレーター本体は、(スタイン)では連邦系MSで広く用いられる角形断面の指を備えたものが装備されていたが、(シナンジュ)にはネオ・ジオン系MSの標準的な楕円断面の指を備えた手に交換されている。外観上はNZ-666(クシャトリヤ)で使用されているものと同型なようであるが、(スタイン)は手首から指の駆動についてもインテンション・オートマッチク・システムに対応するためのPSFIモーターを装備していたはずで、(シナンジュ)が手首から先をネオ・ジオン製のユニットに交換して正常に稼働するとは思えない。おそらく外装のみをネオ・ジオン標準のものに換装したということだろうが、そこまで形状に拘泥する利点は見いだせない。

なお、腕をはじめとする全身のムーバブル・フレームには、各部装置や構造のステータスを監視するためにモニタリング・センサー・システム(構造の歪み、捻れ、変形、亀裂などを感知するものや駆動部のレスポンス・タイム、温度などを測定する)が作り付けで内包される(これらはすべてのMSで標準化されている)が、(スタイン)はこれらと同様のモニタリング・センサーをさらに複式で付加設置されている。これらは外装式の通常電子回路方式であり、また回路は一方が機上搭載されたモニタリング・データ収集用コンピュータへ、もうひとつは、ユニットごととに完結する回路とコンピュータにデータを送る。これに加えて、サイコミュ稼働時に感応波が各駆動系に及ぼす影響を測定するモニタリング・センサーが設置された。(シナンジュ)への改装の折に、これらの増設モニタリング・センサー・システムは撤去されている。

WAIST

■メイン・シャシー用アクティブ・サスペンション

股関節部の大型駆動装置と機体荷重を支えるため重厚な構造を形成するが、各駆動デバイスにはサイコフレーム器材が内蔵されるため、そのレスポンスはきわめて鋭敏でピーキーともいえる。機体全体にいえることとして一般的なパイロットによる操縦であってもそれなりの性能は期待できるが、その潜在的な性能を遺憾なく発揮するためには高度な操作技術が要求される。これは〈スタイン〉がもともと有する性質であり、〈シナンジュ〉はさらにその点が顕著になっている。



■腰部ブロック

各部に高機動、姿勢制御用スラスタが配される。さまざまな形態のスラスタが混在するのはオリジナルの〈スタイン〉が実験機であったことに加え、〈シナンジュ〉への改造時にネオ・ジオン系機材へと交換されたためである。

■非常用スラスタ・バック

ライナー式のスラスタで、主推進装置が使用不能となった際に戦域離脱など脱出行動を行う場合にのみ用いるものである。後部懸垂式装甲内部に専用のプロペラントが内蔵され、他のスラスタ制御系とは独立した操作命令回路で制御される。有酸素環境下でも運用可能なように、冷却用外気流入機構も装備される。

腰部

MSの荷重を支える股関節機構は他の構造にくらべてもひととき強固な部位として設計されている。フレーム構造は〈シナンジュ〉へと改装されても〈スタイン〉のまま、リスクを伴うような構造への変更はない。RX-93に準拠した設計であるが、PSFIモーターを搭載した関係から機材不調を生じた場合に股関節を接続するコアとなるユニットを迅速に交換できるような構成となっていた。〈スタイン〉では俗に「フンドシ」や「コッドピース」などと呼ばれる股間正面装甲の上下に点検および部品交換用のハッチ・ドア（落とし込み式になっている）が装備されていたが、〈シナンジュ〉ではこれを廃止し、より実戦向きの一体型装甲カバーで股関節を覆っている。下部前方には可変バーン付きのバーニアを設置し、カウンター・バーニアとして用いられていたようである。

〈スタイン〉には股間部装甲左右正面にスリット状の開口部があり、ミノフスキー粒子散布バーンとして運用される予定であったという説もあるが、信憑性は薄い。ここには二次熱交換器材が収納されている関係から、大気圏内での運用の際に外気を取り込むためのジェット・インテーク・ダクトで、〈シナンジュ〉でもそのまま残されていたにすぎない。

〈シナンジュ〉の腰部装甲背面上部にはユニバーサル規格に準じた上下展開式のマウントが内蔵され各種装備の搭載が可能となっているが、これは〈スタイン〉からのものである。武器以外にプロペラント用増加タンクの搭載も可能であるが、推進剤供給ラインへの接続口を持たないためスラスタへの直接供給はできない。この場合は別途プロペラント供給用の外部ラインを用意しなければならない。



■懸垂式フォロイング・アーマー

フロント、サイド、リアの装甲は分割や取り付け基部構造など、従来型と大きな技術上の変化はない。しかし「ヘスライン」から「シナンジュ」への改造にあたっては、装甲の大幅な形状変更が行われており、これにともなう「サイド・スカート」への「バーニア・スラスタ」増設が行われた。肩部への増設スラスタと同様に燃焼式のプロペラントを使用するタイプのもので、一般用MS設計の定石から外れたサイコミュ専用MSでよく用いられた方式である。一般用MSでこのような位置に燃焼式スラスタを設置すると自損事故につながるケースがあまりにも多かったため、一年戦争当時から特殊機以外には装備されないものである。この部分に限らず、機動姿勢制御用バーニア・スラスタの多くは非燃焼式を用いることが常識となっており、「ヘスライン」や「シナンジュ」でもスリット状の開口部

をもつリニア式スラスタや小さな穴状開口部のものは皆、これを用いていた。

「ヘスライン」のフロント・スカートは機動姿勢制御用バーニア・スラスタを左右各2基装備、スカートには非燃焼式プロペラントを入れる、いわばカセット式のタンクが取り付けられている。連邦系のMSではプロペラントの交換を迅速に行うためにプロペラントタンクを内蔵したアーマーを丸ごと交換することが一般的であったが、「ヘスライン」ではそれをより効率化するための実験装備が搭載されていた。しかし「シナンジュ」では機動姿勢制御用バーニア・スラスタはそのままにしていたが、ワンメイクの装甲であるためユニットごとの交換は行えず、またカセット式の交換方式も装甲の分割を嫌うことからこれを廃し、装甲内側のパネルを外してタンクを交換、あるいは内側にある推進剤給入口からプロペラントの補給を行うようにしている。下向きに尖った紡錘形の構造はメインタンクである。

スカート上部から胴側を回ってリアスカートに繋がるフレキシブル・パイプ状構造は、前後の装甲に搭載される非燃焼式プロペラントを輸送するためのパイプラインおよび冷却系パイプラインなどが収められる。

「ヘスライン」のリアスカートには可変ベーンを持つバーニア・スラスタが装備されているが、これはメイン・スラスタはじめ他のバーニア・スラスタに深刻な問題が生じた際

にコクピットを含むコアブロックを推進させるために機能するオーグジリヤリ・スラスタであり、装甲内に独立した半固形のプロペラントが内蔵される。この装備は後に生産されたRX-10と同じくパイロットの生存率向上のための装備とされ、通常の航行には使用しない。ノズル本体を露出させないデザインは直接の被弾を避けるためであり、また機体の電気系統が機能を停止しても短時間であればイグナイターを起動させることが可能なようにバッテリーも搭載され、コクピットとは緊急用の回路で接続された。しかし、「シナンジュ」では、このスラスタも緊急時以外に積極的に運用されているらしく、半固形のプロペラントではなく、通常の燃焼式プロペラントに変更されている可能性が高い。

「シナンジュ」のサイドスカートには前述したように肩に装備されたものと同等の推力を発生可能なバーニア・スラスタを左右各2基追加装備している。主にロール系の制御に利用され、未装備である「ヘスライン」に比べロールレートは20パーセント以上向上したが、機動の制御バランスが著しく不安定なものになっていることは間違いなく、フルフロンタルでなければ使いこなすことはできなかった装備であったはずである。モーターで挟まれた中央の紡錘形構造はプロペラントタンクが内蔵されるが、推進剤搭載量はさほど多くはない。

「ヘスライン」のサイドスカートに搭載されている前後2基の非燃焼式姿勢制御用スラスタもそのまま残されており、機体制動、軸旋回などに利用される。

LEG

■増設タンク取り付け部

外装の装甲がスリム化されたことにより、プロバント搭載部は(スライム)には不向きとされている。このため(シナンジュ)には脚部推進装置用にコンフォーマル・タンクが準備されており、スラスター・コンポーネントの取り付けに支障がなかったとされている。またプロバント搭載量の減少が機動性に不都合を生じたという事実は、知られている限りでは報告されていない。

■脚部推進装置

足を深く屈曲した際の保護を目的に設置されたため、通常は外装装甲の内側に大部分が入り込む構造となっている。

■脚部推進装置

バリアブル・ベクター・スラスター・コンポーネントと呼ばれるもので、バックパックの内部に配置されている。スラスター・バックと同等であるが、より可動の自由度を備えたシステムである。サイコロフレーム内蔵機構がそのシステムで、通常の駆動系では発生する振動を吸収できなかったといわれる。(スライム)のリアエンジンから出力される推進力を使用するネオ・ジオン標準スラスターに置き換えられており、また前方への可動域が拡大されている。

■前足

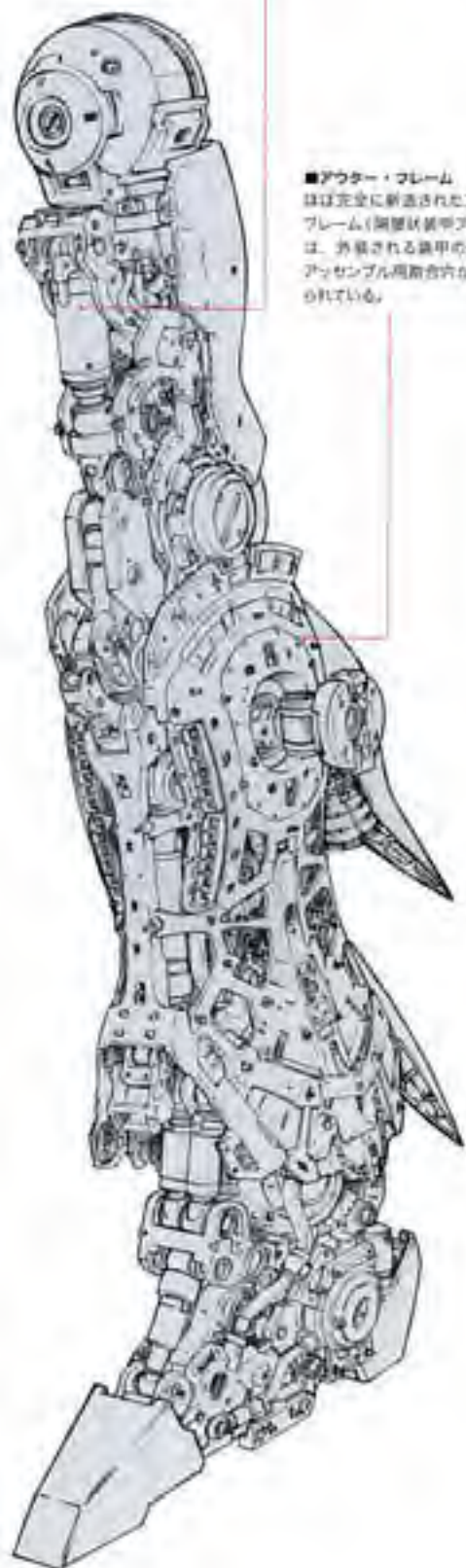
(スライム)では前足部分にエラストマー・油圧を用いたプロテクターを装着しているが、(シナンジュ)ではこれを撤去し、その代わりはスリムになっている。

■メイン・フレーム

各部駆動機構やそれを支持するフレームを含め原型となる(スライム)のものをもそのままだで使用している。(シナンジュ)への改造を手がけたチームの案では外装の交換にともない、内部の各種ラインを調整部のようにプレシジョン・アーマー・パイプの増設によって全体外へと導き出すことが考えられていたが、下部外側のスラスター・コンポーネントをフルに活かすことが優先されたため、各種ライン、調整部の配線はほぼ(スライム)のままである。

■アウター・フレーム

ほぼ完全に新造されたアウター・フレーム(隔壁状装甲フレーム)には、外装される装甲のクイック・アセンブル用結合穴が多数設けられている。



脚部

股関節を駆動させるモーターは大きな荷重(上体の重量)を受け止め、大きな質量移動(脚部)を支えるため、構造強度が高く、大型で高出力のものが使用されてきた。当初、(スライム)では単一のモーターで3軸方向の駆動が可能な球形ジョイント・モーターを搭載する予定であったといわれる。この3軸球形モーターはすでに小型の作業用機械で歩行脚の関節や多関節ジョイント・ジョイント駆動用に実用化されて久しい。関節を取り巻く構造の単純化を図るためMSの関節に対する導入は幾度か試みられているが、要求される出力に達しないもの、制動や静止状態の維持に問題が生じることが多く、耐用期間が要求値に届かないため、本格的な採用は見送られていた。連邦軍は量産MSの一部、RGM系で低重力下または宇宙基地などに配備され整備・哨戒任務に就く機体への試験的な導入が行われているらしい。

(スライム)では問題点を改良したとされる最新実用型の3軸球形ジョイント・モーターを搭載し、駆動試験をする予定があったとされるが、一般機体用ではなくサイコロフレームを内蔵しインテンション・オートマチック・システムに対応するものと改造された結果、きわめて反応が高くなり動きも滑らかになる一方で、モーターが脚部駆動の慣性に抗しきれず、制動特性にムラが生じる事態を招いてしまったという。このためスライムへの3軸球形モーター適用は断念され、標準構造の股関節プロテクターが装備されている。標準的方式であれば制動、静止固定など、運動と停止の基礎技術は確立されており、インテンション・オートマチックの使用によって生じるであろう負荷予想も立てやすく、物理的な対応は比較的容易であったとされる。サイコロフレーム化にはインテンション・オートマチック導入により、その駆動レスポンスは一般用のモーターが見せるパフォーマンスをはるかに凌駕し、滑らかなかつ迅速な駆動が可能となった。しかし予想通りにそれ

にともなう機械的制動の強化は必要となり、構造材そのものの強度向上も求められたが、(スライム)で用いられたものは当時最大の強度を有する構造材用ガンダリウム合金であったためモーター支持部は「骨太」にして対処するしかなかったと思われる。

(スライム)から(シナンジュ)への改造時、脚部の装甲を大幅に形状変更したことから、脚部ムーバブル・フレームを取り巻く隔壁状装甲フレームにまで形状変更(というよりも完全な新造ではないが、ともいわれている)が行われている。オリジナルは装甲同様に厚み平面的であり、ムーバブル・フレームと隔壁状装甲フレームの間には四隅部分にスパーが設けられ、そこに下腿のプロバント・タンクのセパレーターが設置可能である。

しかし(シナンジュ)の場合には、ムーバブル・フレーム

MSN-06S

SINANJU

SJ

LEG



Graphics by Anaheim Electronics

AE

のぎりぎりまで密着するような装甲デザインに変えられている。とくに太もも部に顕著であるため、従来のMSによく見られるような「太ももにはタンクを設置」という安直な発想でプロペラント搭載スペースを捻出することが難しくなっている。なぜここまで「贅肉」をそぎ落としたのか確かな理由はわからないが、大腿部のスリム化を図り可動域を少しでも大きく採ろうという意図があったものと思われる。

下脚側面と脛ら脛に収納されるメイン・スラスタ、制動用リニア式バーニア・スラスタは《スタイン》を踏襲しているが、これに加えて姿勢制御用スラスタを追加しているが、《シナンジュ》は下脚部も絞り込みの強いデザインの装甲に変更されているため、各スラスタの推進剤は実質的に搭載量を減じているのではないかと推察される。

脚側面や脛ら脛部のバリアブル・ベクター・スラスタ・コンポーネント（一般にはフレキシブルスラスタやアクティブ・スラスタと呼ばれる）は肩部に増設したものと同型のモーターに積み替えていた。これは故障、損傷時のパーツ補給を容易にするためで、ズール系MSで用いられているものを選別、チューンし直したものであるとされる。脚側面のスラスタ・コンポーネントは、《スタイン》よりも前方への可動域が大きくなるように調整され、機動性の拡張だけでなくカウンター・バーニアとして制動時にも使用できるようになっている。ただし、機体重心の下にあるためその運用方法は難しく、一般のパイロットには容易に使いこなせるものではなかったという。

外観こそ大きく異なっているもののムーバブル・フレーム

ST

MSN-06S

SINANJU STEIN

LEG



はそのままであるため、膝関節部を正面から保護する装甲の可動支持部もそのまま利用されている。MSの膝関節は屈曲可動域を深くするため二軸ないし三軸の可動関節を有することが多く、伸展位で膝関節を保護できても、屈曲位では関節駆動機構を曝すケースもあり、この部位の保護にはさまざまな対策が講じられてきた。《スタイン》では、伸展位では一体化する膝関節保護装甲を、各駆動軸に追随するように分割した、セパレーション方式を導入している。この点については構造が複雑化することが大きなマイナス要素として、これまであまり実装されることはなかったが、《スタイン》が実験機であることや、サイコミュ器材による追随性の向上から改めて盛り込まれた機構である。

《シナンジュ》も機構はそのままであるが、伸展時の装甲をオーバーラップ式にアレンジし、脚が伸びている場合には装甲が二重となるように設計し直され、最大屈曲位にあつても関節構造を可能な限りカバーできるよう改修されている。これはオリジナルよりはるかに優れた点であろう。通常は赤い装甲が装飾装甲を覆い隠すような位置に来るが、当初は外側の装甲に装飾装甲を配する予定であつたという。しかし、この部分に《スタイン》から受け継いだスラスターをアクティブな状態で保持する必要があつたため（機体機動バランスの問題から必要であつた）より成型加工性のよい通常装甲材料を用いることになったといわれる。「スペシャル装飾装甲材料」であるルナ・チタニウムXでは、現在見られるような形状を一体で作るには奥行きが有りすぎ、深く鋭角である点が難点である。削り出しで加工することは可能だが、スラスター用の開口部を設けるとリップ部分から応力割れを引き起こす可能性もあり、この部分にルナ・チタニ

ウムXを使うことは断念され、その結果、皆が知る組み合わせとなったのである。

先にも述べたが、脚部には各種のスラスタが集中するわりに、推進剤の搭載スペースを削るようなデザインの外装を用いたことの大きな理由は、MS設計で常識となっていた脚部への質量集中から脱する目的があったからという。ヘスラインもそうであるが、ムーバブルフレームと外部装甲の作る空間には、可能な限りプロペラントなどを搭載することが常識で、この

ため脚部の質量変化にともない機上AIによる補正が行われるが、機体の挙動が敏感にパイロットに跳ね返ってくる



るインテンション・オートマチックをより効果的に活用するためには、脚部質量の変位を最低限に止めることが重要であることを、ネオ・ジオン残党軍の技術者は熟知していたようである。

なお、ヘスラインの下脚側面にあるバリアブルベクター・スラスタ・コンポーネントでは上方に大きく伸びる構造がある。この内部には推進剤のタンクがあり、スラスタが軸回転する際のカウンター・ウェイトの役割を持たせている。ヘスラインも同様の突出構造が設けられ、小型のスラスタも設置されるが、推進剤の搭載部はコンポーネントの回転軸周辺に集中させてあり、突出構造の先端部にはマスバランスとして作用する「オモリ」が入っているだけで、推進剤は搭載されていない。

またコンポーネントは切り離しが可能で、被弾、損傷時などにパイロットの指示で投棄される。通常は装甲で塞がれているが脚内側面にも左右各1カ所、スラスタ・コンポーネント接続用の支持架が内蔵されており、最大で4基を装備することが可能である。スラスタ・コンポーネント4基のユニットを搭載したヘスラインの姿も記録で確認されているが、おそらく試験時に限定的に装備されたものであろう。同様の仕様はヘスラインの運用試験においても予定が組まれていたとされ、対モビルアーマー戦闘における高機動、高出力移動の実効性を確認する意図であったとされる。ヘスラインもこの計画を参考に効果の確認を行ったが、フロントルの判断により、実戦運用され

てはいない。

前中後3分割式の足部は宇宙世紀0096年当時のMSにおいてごく標準的な仕様である。宇宙空間での使用を前提に開発された機体であったが、RX-93で装備された内蔵式スラスタは接地時に生じる破損の可能性を重く見てヘスラインでは廃止され、タッチダウン時における制動やテークオフ時の初期推力は、下脚部に集中させた各種スラスタで充分対応可能という判断もあり、ヘスラインにも増設は行われていない。ただ、接地部分の衝撃吸収には新開発のエラストマー金属が用いられ、接地や歩行時の足への衝撃を、内蔵するショックアブソーバーのみならず、ソール全体でも分散吸収する。このエラストマー金属は従来からの耐熱合成樹脂製エラストマーに代わるもので、とくに摩擦によるダメージが大きい重力下圏運用機体用に宇宙世紀0095年頃から導入が開始されている。

ソールに内蔵される機体固定用の起倒式アンカーフックは、宇宙用MSの標準装備として搭載、足裏の滑り止めパターンは宇宙仕様で、コロニー内など重力下での行動も念頭におかれているものの運用基盤である艦の甲板上に最適化され、パターンはごく単純で、滑り止めはもっぱらエラストマー金属の摩擦に依存している。

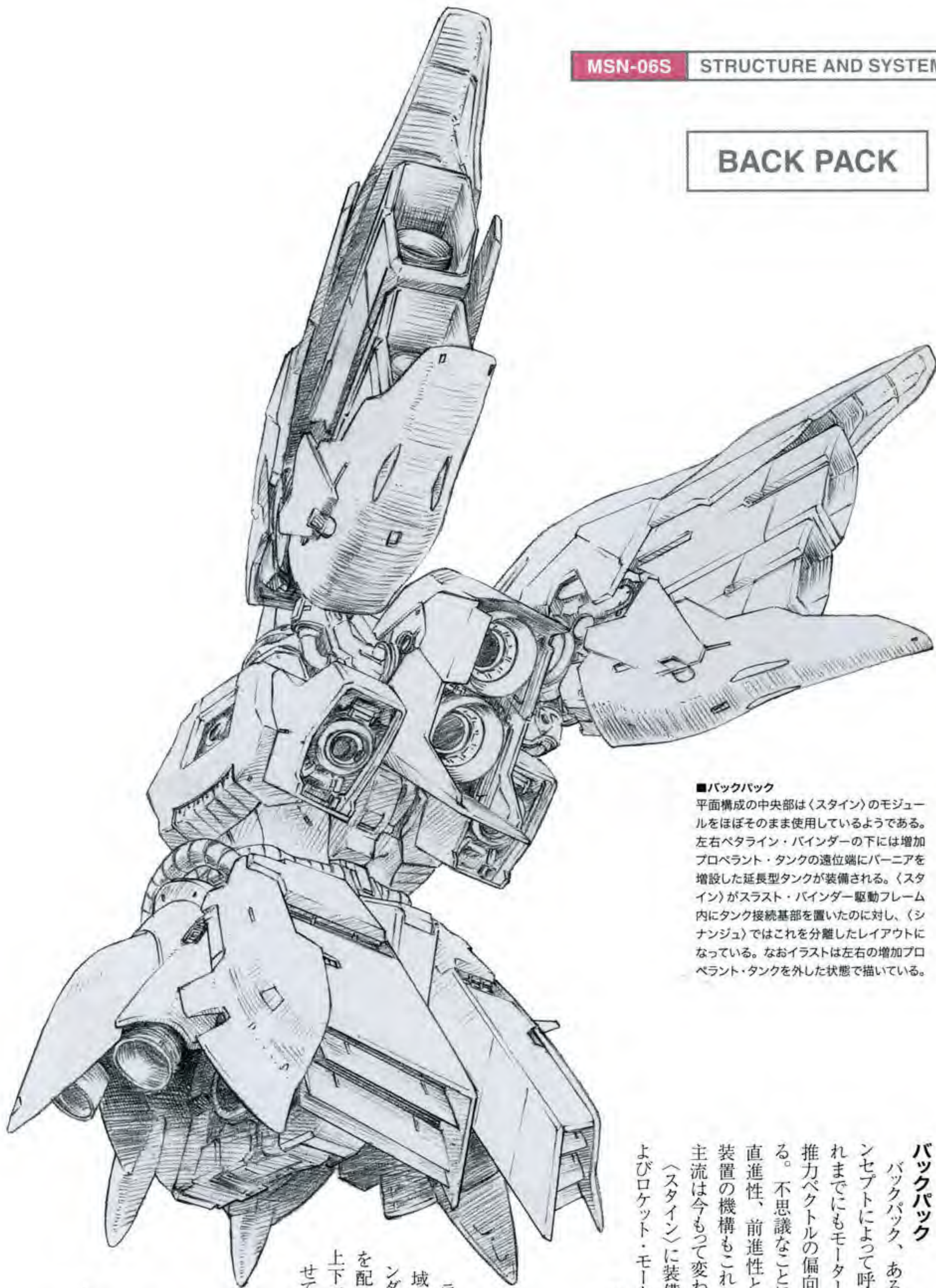
ヘスラインでは爪先部分にもエラストマー素材で作られた外装を被せている。これは格納庫内での歩行時に周辺機材を傷付けないための配慮から付けられたものとされる。しかしヘスラインではこれを外して運用した。ヘスラインの爪先がヘスラインよりも細くなっているのはこのためである。

LEG



■〈シナンジュ〉の下脚側面にあるバリアブル・ベクター・スラスター・コンポーネントは、実戦に投入された際には外側の一対のみ装着されていた。同コンポーネントは内側にも増設可能で、〈スタイン 01〉における機動試験の予定もあったとされる。最終的にはフロントルの判断で実装されなかったようであるが、本装備が実現していればより本機の機動性は向上し、フロントルでさえ扱いあぐねる極端な特性を示したかもしれない。

BACK PACK



■バックパック

平面構成の中央部は〈スタイン〉のモジュールをほぼそのまま使用しているようである。左右ペトライン・バインダーの下には増加プロペラント・タンクの遠位端にバーニアを増設した延長型タンクが装備される。〈スタイン〉がスラスト・バインダー駆動フレーム内にタンク接続基部を置いたのに対し、〈シンジュ〉ではこれを分離したレイアウトになっている。なおイラストは左右の増加プロペラント・タンクを外した状態で描いている。

バックパック

バックパック、あるいはバインダー等、その形状や運用コンセプトによって呼び分けられている主推進装置は、これまでにもモーター搭載躯体全体を可動として大きな推力ペクトルの偏向を行う方法を採用機種が作られている。不思議なことに旧ジオン軍、連邦軍ともにMSには直進性、前進性と高速性を求める傾向が強く、推進装置の機構もこれを念頭に発展してきており、設計の主流は今もって変わらない。

〈スタイン〉に装備・搭載されるメイン・スラスタ（およびロケット・モーター）は、RX-93に似たユニットを搭載する予定であったが、インテンション・オートマチックに対応するため思い切った設計の変更が行われ、2基一組にしたスラスタを

三組搭載する構成に変更された。中央のブロックは固定され（スラスタ・ノズルは上下に10度の可動域を有する）その左右に遊動式の「バインダー」に装備された各2基のスラスタを配する構成で、各スラスタ・ノズルは上下10度、外側にも10度の可動域を持たせていた。また下方にはプロペラント・タンクが増設されているが、取り付け

基部はユニバーサル・ジョイント方式で、左右バインダーが噴射を行うときに、自動的にタンクに高温の噴射ガスが当たらない位置に「逃げる」機能が設けられる。ミッションによってはさらに容積の大きいタンクの取り付け（荷重の関係で

SJ

BACK PACK

MSN-06S

SINANJU



ST

BACK PACK

MSN-06S

SINANJU STEIN

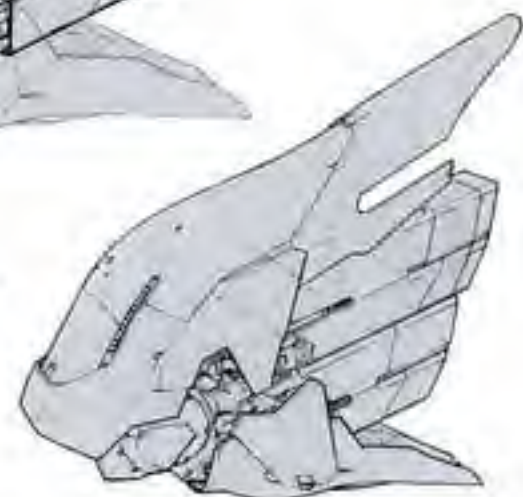
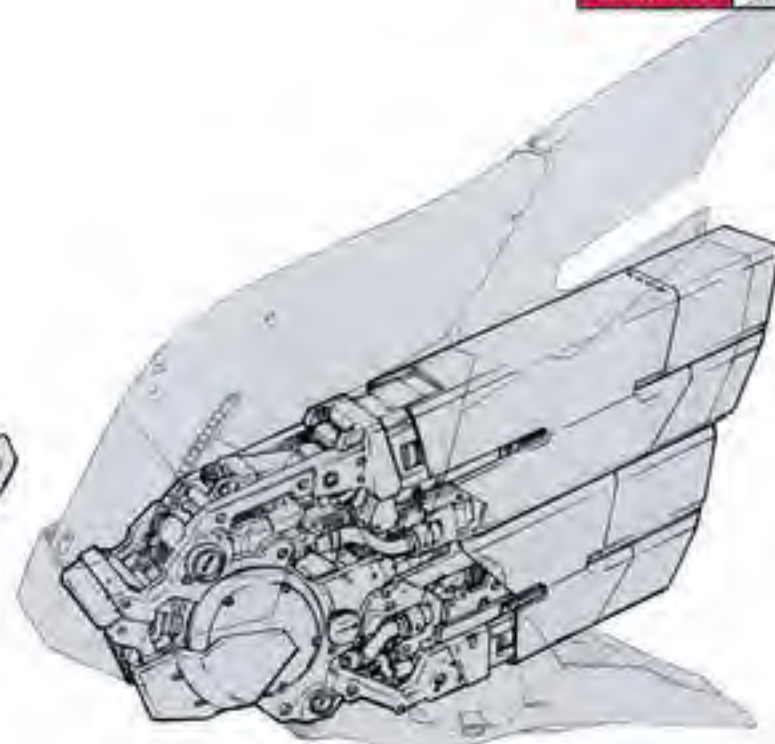
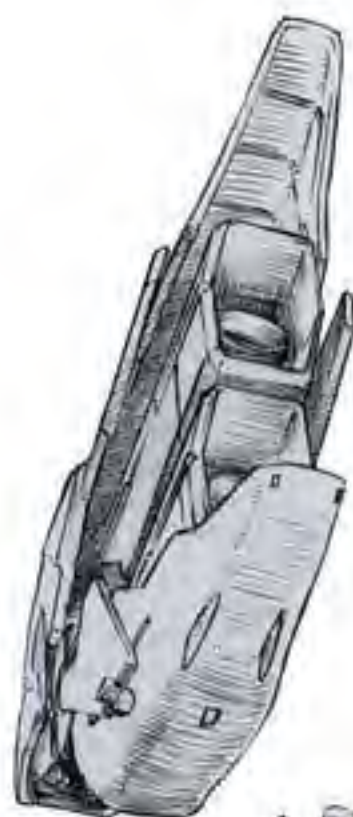
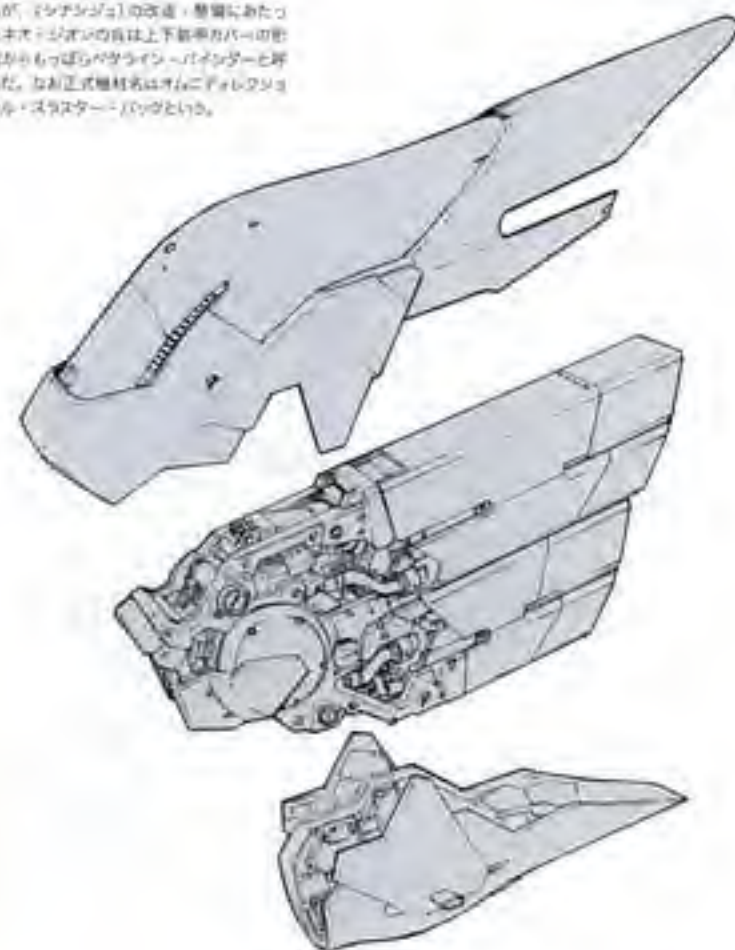


Graphics by Anaheim Electronics **AE**

BACK PACK

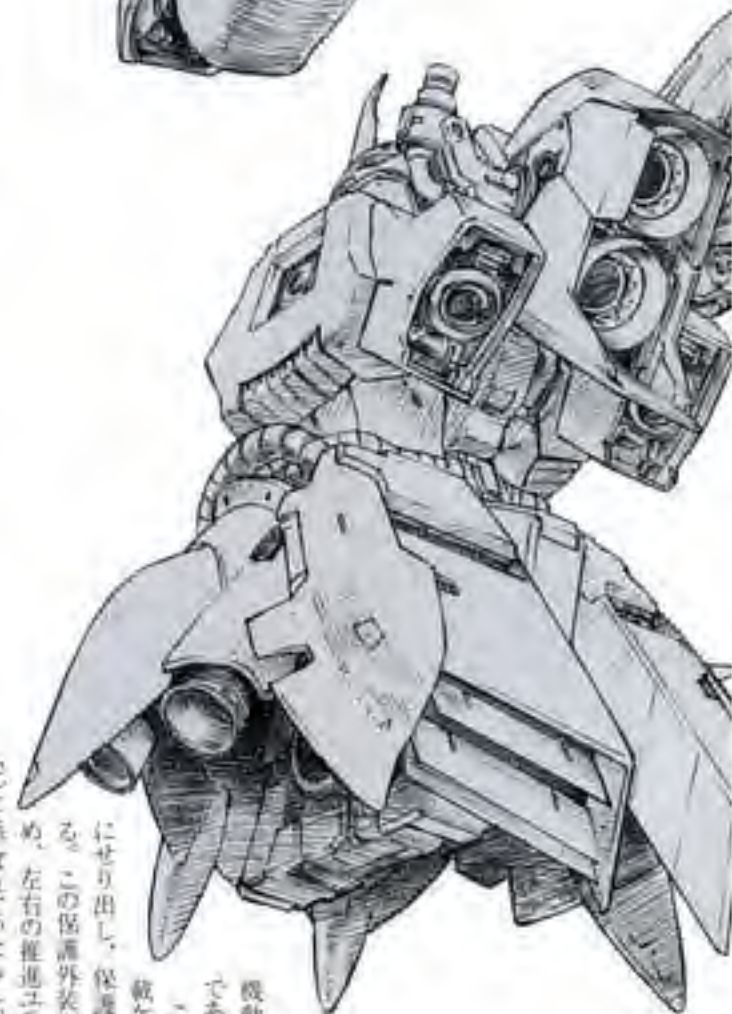
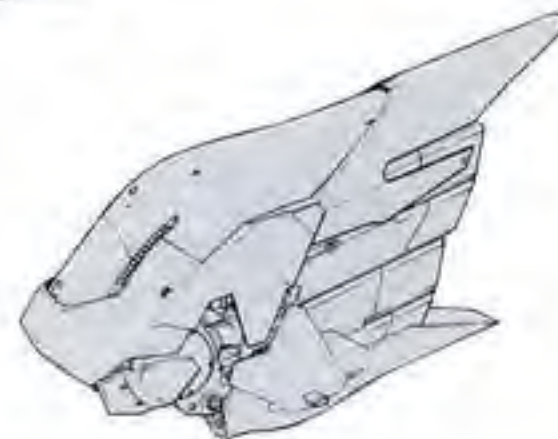
■ベタライン・バインダー

推進装置。いわゆるバックパックは左右と中央の3ブロックに分かれるが、左右の2ブロック・バインダーは固定基盤に可動部が設置され、船内に後方軸線を設置することが可能である。『シナンジス』でも『スタイン』のバインダー可動機構をそのまま適用しているが、可動域が狭げられている可動部が無い。この可動部はスラスター・バインダーは一般にブレイク・スラスターと呼ばれるが、『シナンジス』の改造・整備にあつた本誌・シナンジスの上下部からバウの形状からみればベタライン・バインダーと呼ばれる。なお正式機体名はオムニ・デュラシヨナル・スラスター・パックという。



■パワーブースト

平面構成のスラスター・モーター搭載セーシングは、高機動時に後方にセリ出し、燃焼室容積を増大、一種の「パワーブースト」状態を作り出す。通常よりも高いエネルギーでの燃焼を生じ、爆発的な推力増強が行われるが、使用可能時間に制限(60秒)がある。



宇宙空間のみの装備であることも可能とされる。このタンク自体にスラスターは内蔵されない。またタンクは授業可能である。

バインダー部分は左右個別に動くため機体正中軸を中心としたスピンや、機体の横転など複雑な機動がバックパックのみで可能となり、従来の直進性を重視した設計から大きく方針を転じた構想で作られた装備である。このバックパックと機体スラスターによる推力を合成することで、『スタイン』の機動性は、『レガンダ』の機動性能を大きく上回るものとして期待されていた。左右バインダーの上部には駆体外装とノズルの間に大きな空隙があり、ただフラップ式の整流板用構造物が装備されているが、この構造物の機能については不明である。この空隙部分に左右それぞれ1基ずつのスラスター増設が予定されており、他の6基とは異なる非燃焼式推進装置が搭載されるはずであった。あるいは増加タンクを取り付けるアダプターがあるなど空隙部分についての説はいろいろあるが、真相は不明である。

『シナンジス』では、バックパックのフレーム構造を適用しながらも、まったく異なる素材で構成されている。これは機体スラスター同様、部品交換やメンテナンスの利便性を考慮してネオ・ジオン系器材へと変更されたものである。『スタイン』では左右バインダーそのものの可動域は上下方向を主、側方への開きを従とした構造上の制限機構が設けられている。これは実験初期段階ゆえのことと、試験項目を消化するにつれ徐々に可動域を拡げる意図があったものようである。『シナンジス』は制限機構を廃し、物理的な限界までバインダーが可動するような構造になっている。『スタイン』で段階的に行う予定であった「超高機動用モード」への移行を足飛びに導入した『シナンジス』は、通常のMSでは対応不能な

アクロバティックともいうべき機動によって連環状を繰り返したのである。

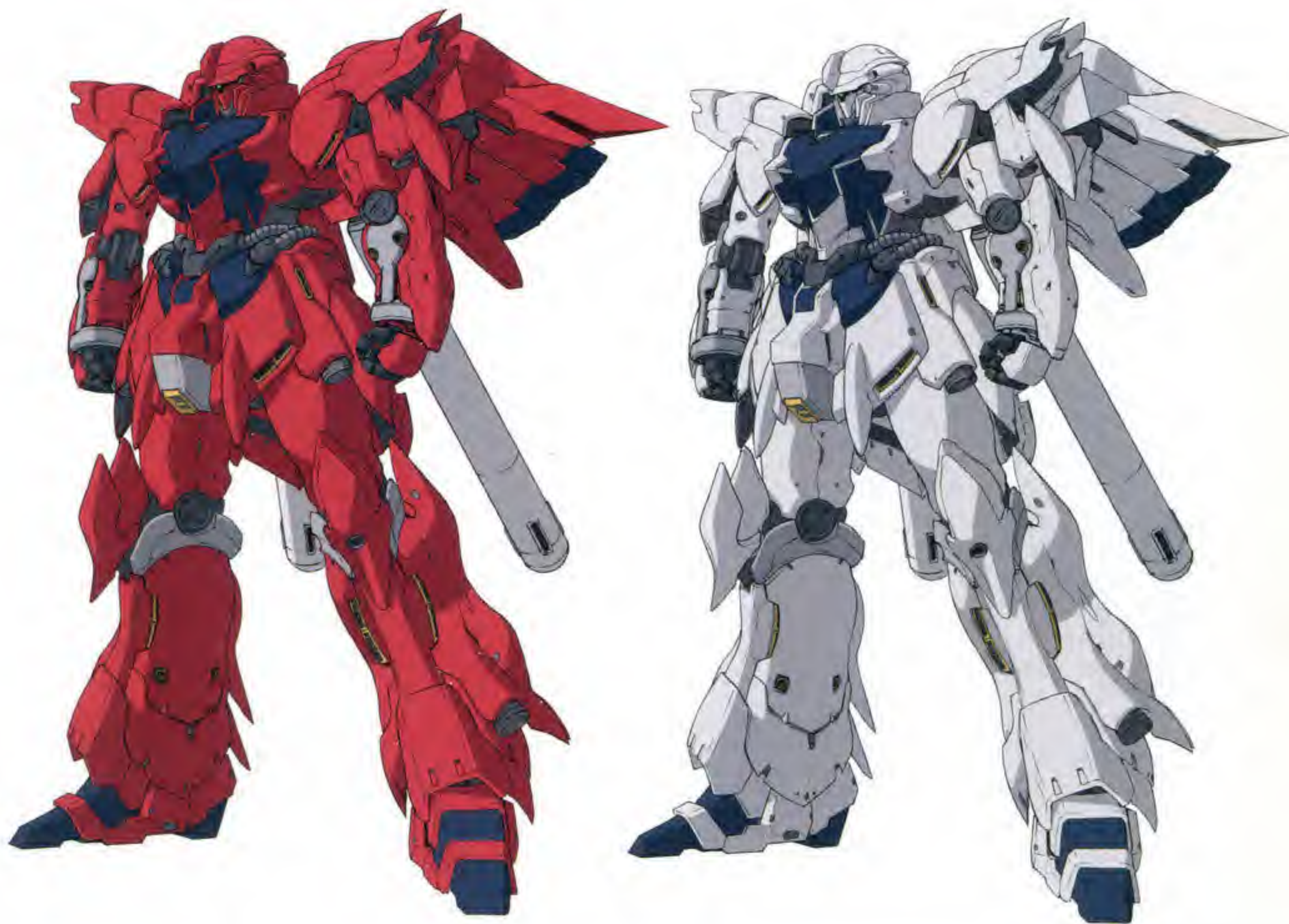
この左右バインダーのモーター搭載ケーシングは、高機動時に後方にセリ出し、保護外装は上下に大きく展開する。この保護外装が花弁のような形状であるため、左右の推進ユニットはベタライン・バインダーなどと呼ばれていたらしいが、いずれにせよ上下に展開する理由は明らかでない。ただモーター搭載ケーシングの延長は一種の「パワーブースト」状態を作り出す目的で燃焼室の拡張が行われることによるもので、文献によつては「アフターバーナー時」という表記を見かけるが、シラトエンジンではないのでこの表現は当てはまらない。通常よりも高いエネルギーでの燃焼を生じさせる目的で燃焼室加圧剤を投入するために行われるという。しかし、モーター機構全体への負荷も高くなるため長時間の使用はできず、最大でも60秒に制限される。また花弁状保護装甲の展開は、試験的に装備されたフィールドによる推力偏向システムをアクティベートするためともいわれるが、実装されたという記録はない。

増加プロペラントのタンクはそのまま流用されているが、エクスパンダーによって容積は7割ほど増している。その端部にはスラスターが増設されており非燃焼系推進剤による噴射が可能である。機体重心から遠く離れた位置でのスラストにより、効果的な機体機動を得ることが可能だが、他の部分に改造設置されたスラスター同様ビークリーな装備であることに間違いはなく、並大抵の技量で使いこなすことはできないものであった。

宇宙空間のみの装備であることも可能とされる。このタンク自体にスラスターは内蔵されない。またタンクは授業可能である。

バインダー部分は左右個別に動くため機体正中軸を中心としたスピンや、機体の横転など複雑な機動がバックパックのみで可能となり、従来の直進性を重視した設計から大きく方針を転じた構想で作られた装備である。このバックパックと機体スラスターによる推力を合成することで、『スタイン』の機動性は、『レガンダ』の機動性能を大きく上回るものとして期待されていた。左右バインダーの上部には駆体外装とノズルの間に大きな空隙があり、ただフラップ式の整流板用構造物が装備されているが、この構造物の機能については不明である。この空隙部分に左右それぞれ1基ずつのスラスター増設が予定されており、他の6基とは異なる非燃焼式推進装置が搭載されるはずであった。あるいは増加タンクを取り付けるアダプターがあるなど空隙部分についての説はいろいろあるが、真相は不明である。

『シナンジス』では、バックパックのフレーム構造を適用しながらも、まったく異なる素材で構成されている。これは機体スラスター同様、部品交換やメンテナンスの利便性を考慮してネオ・ジオン系器材へと変更されたものである。『スタイン』では左右バインダーそのものの可動域は上下方向を主、側方への開きを従とした構造上の制限機構が設けられている。これは実験初期段階ゆえのことと、試験項目を消化するにつれ徐々に可動域を拡げる意図があったものようである。『シナンジス』は制限機構を廃し、物理的な限界までバインダーが可動するような構造になっている。『スタイン』で段階的に行う予定であった「超高機動用モード」への移行を足飛びに導入した『シナンジス』は、通常のMSでは対応不能な



■ネオ・ジオンによる強奪後、〈スタイン 01〉から〈シナンジュ〉として生まれ変わった本機は複数のポイントで目撃されていたが、直接接した部隊は正確な情報を取得する前に撃破され、詳細は不明なままであった。本図は連絡員などから断片的な情報を得ていたAE社が〈シナンジュ〉改装後の姿を予想したものである。結局、実際の〈シナンジュ〉は本図とも似て非なるものとなり、連邦軍による公式な識別は〈ネェル・アーガンマ〉に同乗していたAE社重役アルベルト・ピストによる間接目視の時点まで待たねばならなかった。

■MS搭載の駆動モーター

〈シナンジュ〉搭載のサイコフレームを使用したPsFI駆動モーターは、機体表面に見えている関節部分だけに採用されたわけではない。これはインテンション・オートマチックに対応するための当然の措置である。PsFI駆動モーターと通常型モーターのそれぞれのレスポンスにタイムラグが生じた場合、これを調整することは困難であるため、機体運動のハーモナイズを一貫した形で行う目的でMSの機体運動に関連するおよそ200を超えるモーターすべてをPsFI駆動モーターとした。

PsFI駆動モーター（サイコフレーム搭載モーター）

〈スタイン〉で採用された手足の主要関節駆動機構はRX-93に用いられたフィールドモーターのスペックをもとに製造され、外観的な特徴をはじめ各モーターの規格サイズや駆動出力、消費エネルギーなど機能的特性はRX-93のそれに準拠している。

フィールドモーター駆動部はマグネットコーティングが施されており、これを取り巻くように設置されたサイコフレーム製のコントロール機材によって、外装式の制御機器はほとんど必要がなくなったことで、モーター本体のサイズは小型化が可能になっている。逆に言えば同じ容積に収まるモーターであれば従来型よりもモーター・コアを大型化し高出力とすることができるのである。



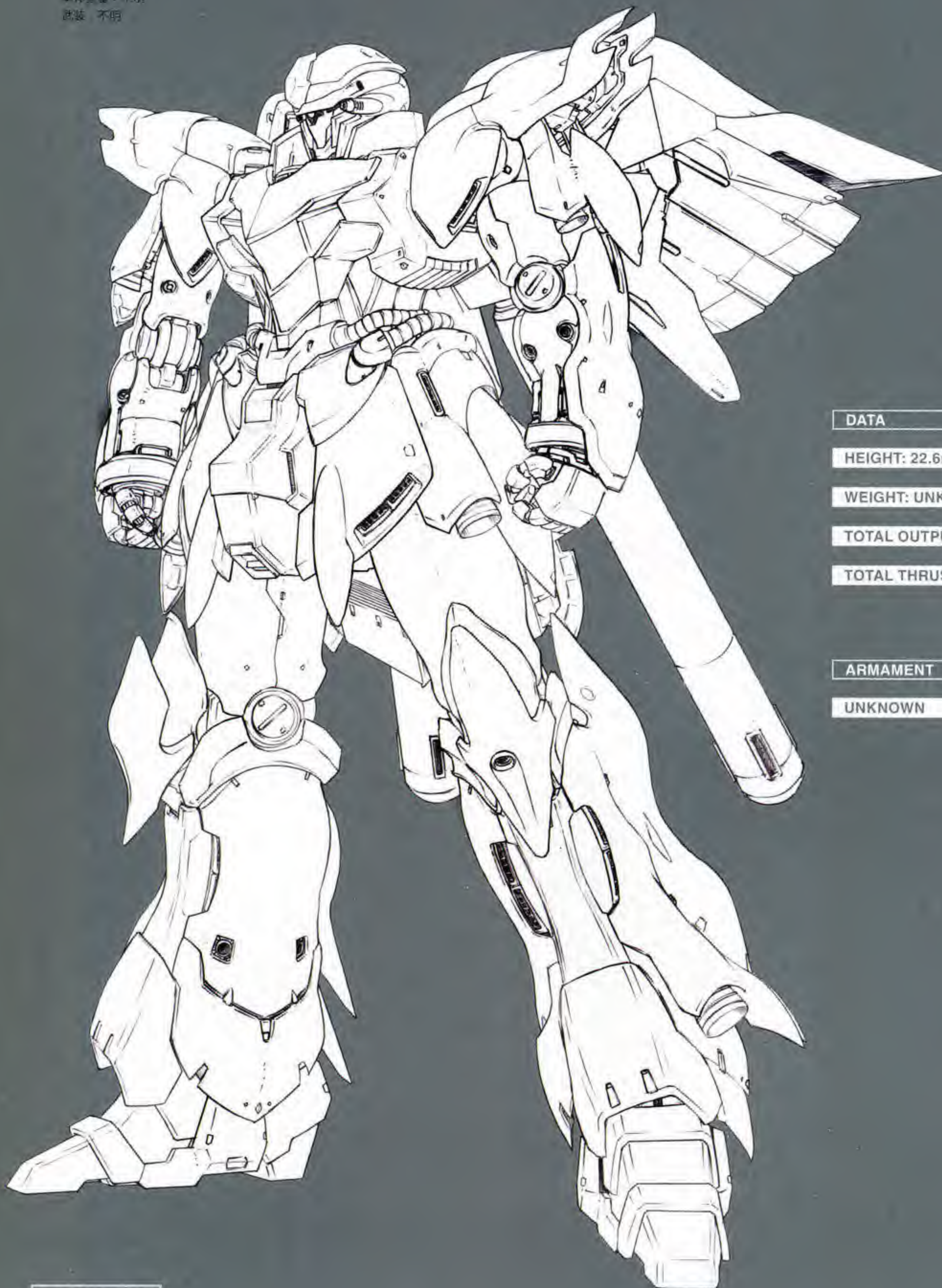
モーターはその構造上、従来からの材料によるケーシングが必要であったため、サイコフレーム部品は完全に筐体内に封じられる形となっていた。このため後に明らかとなったサイコフレームの発光現象が、モーター類で確認されることはない。〈スタイン〉のテスト段階でサイコフレーム自体が発光することは確認されていたものの、機外にその光が洩れることはなかった。これは〈シナンジュ〉においても同様である。

SJ

MSN-06S

SINANJU

MSN-06S SINANJU
 シナンジュ (改裝予想図)
 形式番号: MSN-06S
 全高: 22.6m?
 本体重量: 不明
 武装: 不明



FRONT VIEW

DATA

HEIGHT: 22.6m?

WEIGHT: UNKNOWN

TOTAL OUTPUT: UNKNOWN

TOTAL THRUST: UNKNOWN

ARMAMENT

UNKNOWN

[illegible]

シナゴジュの最後

「インダストリアル7」における戦況で大破した「シナジ」と「ネオ・ジオン」の行方については確かなことがわからない。その残骸がどの程度原形を留めていたのか、また回収されたとしてもそれがネオ・ジオンによるのか、連邦軍あるいはA.E.社によるのかすらもわからず、現在に至ってもその所在は不明なままである。「シナジ」については、もともと高性能な実験機（スタインを「芯」にしているとはいえ、これをはるかに凌ぐ高性能化が実現しており、それがパイロットの能力によるものか、A.E.社の与り知らぬ技術導入による改造が行われていたからなのかを詳細に見極めるため、徹底的な分析をしたいと考える技術者は多いはずである。■

SJ

MSN-06S

SINANJU

**■シナンジュ用シールド**

「袖付き」で運用された際に使用されたシールド。装甲形状がMSN-04〈サザビー〉用のものに酷似しているばかりか、2基のビーム・アックスとグレネード・ランチャーが取り付け可能になっている。

ST

MSN-06S

SINANJU STEIN

**■シナンジュ・スタイン脚部**

推進装置の配置位置を見ると、〈スタイン01〉とRX-93系の開発系譜上のつながりを強く感じ取ることができる。リフトアームにより独立して稼働するフレキシブル・スラスターが脚部に実装されるなど、改良された部分も多かった。

■シナンジュ・スタイン用ビーム・ライフル

RX-93 HWS試案でも標準装備とされる予定であった新型のハイ・ビーム・ライフル。かなり大型で取り回しに難はあったものの、従来型ビーム・ライフルを上回る出力を有していた。しかしながら、消耗部材の入手が困難であったため、「袖付き」による奪取後はほとんど使用されることはなかったようだ。

MSN-06S

ARMAMENT

MSN-06S 携行火器

ビーム・ライフル

（スライム01）専用として製造されたハイ・ビーム・ライフルだが、元設計は過去のRX-93（レガンダム）HWS化計画向けに試作されたハイパー・メガ・ライフルにまで遡る。当時、HWS化計画機体では艦砲並みの火力運用を求められたことから、携行兵器は通常のハイ・ライフルをはるかに凌ぐ高出力が要求された。当然、大型化は避けられないものと思われたが予想以上の小型化に成功している。しかしコンパクト化することによってシステム全体が高い負荷を受けることになり（ともに冷却系の不足による過熱）、暫定的な解決策として稼働時間の制限が設けられたという。コンパクト化の環として、照準関連の機器がビーム放射口（マズル）上部に集約された。ハイパー・メガ・ライフルの特徴のひとつでもあるデジタルセンサーの機能は、カタログデータによれば自動射撃管制（レグジュライニング）ターゲットトレース・エイミング機能のみならずファイアリングタイミング、

パワー・コントロールなどを統合制御可能なセンサーであったという。が行きとされるが、試射に関する資料によれば最大出力のビーム発射がセンサー機能に影響を及ぼすことが判っている。とりわけ大気圏内においてはプラズマ化した空気が大きな障害となり、実質的な照準系統はMS機体搭載センサーとの連携に依存せざるを得ず、照準と射撃管制の機能は従来型火器と変わらないものになるを得なかった。ライフルの機体内に照準関連機器を作り付けしたのはコンパクト化、さらにはライフルの取り回しに不便さが生じないようにすることが目的だったが、一方でライフル開発を受けたメーカーが新機軸を打ち出さんために強引な設計をしたという見方もある。いずれにせよHWS計画そのものが中止され、ハイパー・メガ・ライフルも完成品としてアブセンザルされることはなかったという。

ST

MSN-06S STEIN BEAM RIFLE



Graphics by Anaheim Electronics AE

■「スタイン」専用ビーム・ライフル

（スタイン01）の携行火器ハイ・ビーム・ライフルを製造したのが前述のハイパー・メガ・ライフル製造を請け負ったメーカーの関連企業であることは意外に知られていない。（スタイン01）が稼働試験機体として無人運用されるということから、射撃試験における照準や出力制御などはすべて火器に搭載される管制コンピューターで自動制御し（この方式は、機体依存の程度こそあれMS用火器ではすでに一般的であった）、機上搭載AIへの射撃管制依存度を最低限（目標選択と発射の意思決定）とすることが決定された。この時点で、担当メーカーは一旦白紙となったデュアルセンサー式の自動射撃管制システムを改めてプレゼンテーションした。その理由として火器単独で目標までの距離、移動速度等を精密算定するために必要であるという説明がなされ、以前の失敗を踏まえた改良が施されたことを強調している。発射ビーム出力が器材のキャパシティを大きく超えるような要求仕様ではないため、センサーへの悪影響はまったくないとされ、長射程連続発射が可能となる粒子圧縮とエネルギー・チャージに必要な時間を短縮したシステムの開発、在来型ライフルに比してビームの威力を減じないままより遠距離まで到達可能な出力向上も実現したという。もつとも射程と破壊力をどう設定しているかなど詳細なデータの開示が行われていないため、実態は不明である。



かつてのハイパー・メガ・ライフルに装備されたデュアルセンサーにはサイコミュ・システムが応用されているという噂が流れたが、〈スタイン〉専用ハイ・ビーム・ライフルがサイコミュ・システム対応の機材であることは言うまでもない。〈スタイン〉の概略説明でよく言われる「サイコフレームの強度・追従性」をテストし、その「限界性能を計測」という表現は、一見意味がありそうで実は何を言っているかわからない政治的に吟味を尽くされたフレーズだが、「追従性」という部分にビーム・ライフルをはじめとする武装の運用、使用武装そのものの反応性確認なども含まれていたことは想像に難くない。

〈スタイン〉専用ビーム・ライフルは機体が奪取された折りに、予備部品ともどもネオジオン軍残党の手に渡っている。機体は〈シナンジュ〉へと改装ののちテストパイロットによる稼働試験が行われたが、ビーム・ライフルの評価は「良好」と下された。その後、フル・フロンタルが同機の実戦運用試験を行ったときには、機体のカラーリングに合わせて外装を赤にコーティングしたビーム・ライフルを用いたという。しかし、二、三度の使用以降、〈スタイン〉専用ビーム・ライフルが用いられることはなかった。消耗・交換部品の予備がなかったであろうというのが一般に理解されているところだが、一説には、ライフルの構造に起因する重量バランスとサイコミュ対応機材のレスポンスがフル・フロンタルの操作感覚に馴染まなかったことが大きな理由であったとも言われている。

■ヘシナンジ専用ビーム・ライフル

フル・フロンタルが「スタイン」専用のハイ・ビーム・ライフルを主兵器には適さないと判断したことから、彼の意向に沿った兵器を開発する必要が生じた。ネオ・ジオン軍復活の象徴となる化粧をまとったMSに釣り合う新型ビーム兵器をどうするか。強奪した物資の中からライフル候補の選定が行われた。「スタイン01」強奪と相前後して略奪された物資の中には、「スタイン01」が運用試験を行う予定だった次期主力・支援兵器も含まれていた。積荷の発送元が異なるため本体とは別送され、実験宙域で合流するはずだったものである。「スタイン01」強奪については狂言ではないかという噂があるが、この一件はそれを裏付けるものともいえる。

「連の強奪品には、ある新興武器製造メーカーが提案したMS用統合兵器システムも含まれていた。これは基本となるビーム・ライフルに外装式のサブマシン銃を組み合わせることと近距離戦闘用兵装から長射程装備までひとつのシステムで対応しようというものである。今さら珍しくない発想だったが、すべての兵器を同じプラットフォーム内に統一規格でシステム化することを再提案し

たものである。新型MSが開発されるたびに専用の兵器システムを導入するという従来からの方法は、兵站の観点からも生産面から見ても非効率である、というごく真つ当な見解を示したものだ。この提案は仮採用されMSによる運用試験を行う名目で実用可能な試作品一編えが軍に納められた。しかし、当然ながら従来からの方法で大きな利益を得ていた企業、あるいはそれによって利益の供与を受けていた政治家や軍属は提案が本採用となることを良しとはしていなかったようである。その結果、「スタイン01」と共に奪取されたMS用統合兵器システムは即座に次期主力・支援兵器候補を外れ、試作型式番号などは抹消された。

フル・フロンタルが選択したのはMS用統合兵器システムに含まれる「長銃身」の、俗に「イーガー・タイプ」と呼ばれるライフルで、長・中射程向きのものである。もとよりサイコミュ対応機構は搭載されてはあらず、ビーム生成と発射機構の構造は整備性を重視して極力単純化されており、いわゆるカスタム機向けの多用途無段階可変出力のビーム兵器ではなかった。フロンタルは配下の技

術者はライフルの調整と改修を命じ、これに従ってカスタム・チューンされたものが「ヘシナンジ専用ビーム・ライフル」と呼ばれることになる。

ライフルの長い銃身には、ビーム収束率を維持するため全長にわたってフィールドを発生する装置が内蔵されている（これはもともとあった機構である）。そのフィールド先端部には最終集束装置が追加装備された。これにより発射されたビームは集束状態を最大限維持したまま直進する。この方式は他の長射程ビーム・ライフルと同じである。元となったライフルに装備されていた外装ジャケット式の冷却機構は廃し、冷却装置は最低限、銃身上部にある桿状エントロピーのみとされた。単射におけるビーム出力は通常のライフルより高く、その結果射撃も長い。冷却系を大幅に削減しているためライフルの連続使用には制限が生じている。しかしフル・フロンタルはそれで充分である、とした。フル・フロンタルにとってライフルがオーバーヒートするような戦闘はありえないという自負の表れともとれるが、けっして自信過剰なのではなく冷静に自身の技量を分析したうえでの結論であり、事実、それが原因となる失敗をおかしてはいない。

BEAM RIFLE

BEAM RIFLE
+ GRENADE LAUNCHER

GRENADE LAUNCHER

BEAM RIFLE

BEAM RIFLE

BEAM RIFLE

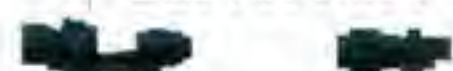
■ビーム・ライフル+グレネードランチャー



■ビーム・ライフル+ロングレンジセンサー



■ロングレンジセンサー



■グレネードランチャー



■ビーム・ライフル



■センサードーム



■ロケット・バズーカ+ビーム・ライフル



■ロケット・バズーカ



ライフルの照準装置は統合火器システムの外装式ユニットで、着脱が容易な装備である。ロングレンジ・センサーと通称される照準装置はタンデム配置の複式であることが特徴といえる。個々の照準装置にはMSの機体に搭載される標準的な複合センサーも内蔵される。照準装置に複合センサーを用いるのは、単なる火器照準だけではなく、機体搭載センサーが機能不全に陥った場合に外部センサーとして働くようにするためで、これは一年戦争末期、一部の連邦軍MSが装備するようになり、戦後になつて標準化された。

火器の射撃管制は永らく機上AIによるコントロールが通例だったが、時代とともに照準の固定と継続維持、目標追跡を、火器本体または照準装置に内蔵された専用の制御コンピュータが引き受けるようになっていった。自動追跡と照準固定は、パイロットがこれを解除しないしはマニュアルに切り替えない限り、MSの腕の可動範囲内で照準を外さないよう自動的に追隨して動くまでになっている。これを嫌うパイロットがあつたことも事実だが（とくにMSの操縦と戦闘に習熟したエキスパートやベテランに多かった）、一般のパイロットにとつては、照準のみならず発射タイミングと出力調整まで自動化された火器射撃管制システムは非常に頼もしい味方で、これが備わっていることでルーキーも即戦力として実戦投入が可能であると見られていた。

完全自動化された射撃管制システム搭載火器の完成形がサイコミュ対応機器を備えたハイ・ビーム・ライフルといえるが、その多機能ぶりがむしろフル・フロントルには煩わしかったのかもしれない。彼は、自身専用にチューン

させたビーム・ライフルでも照準はじめ射撃管制システムへの依存度は最低レベルに抑えて使用していたらしい。むしろ邪魔でさえあるとして取り付けを渋ったとも伝えられるが、機体センサーのバックアップとして装備するように説得され承知したという。

専用ビーム・ライフルのグリップ／トリガー・グループ前方には、多機能マウントが装備される。このマウントには主に小口径の実体弾発射筒（慣例的にグレネードランチャーと通称される）が装備される。発射弾体は対MS用を中心に数種用意されていた。いずれも二段式ロケット推進で、発射筒内でごく低圧の二段目が噴射、弾体が発射筒を離れると高推力の二段目に点火、飛翔する。発射時の反動は低く抑えられているため機体質量で受け止める形になる。もちろんこれは、宇宙空間で運用するものとして設計されているため、重力下での使用には不向きなものである。単発式のため連続発射はできない。

フル・フロントルが部下の助言に従ってグレネードランチャーを装備したのは、使用できる弾種に有用性を見いだしていたからである。彼が装填携行したのはMS攻撃用の弾種ではなく、短時間ながらビーム攪乱幕を展開するもので、攪乱幕展開と同時に閃光を放つように改造されていた。この特殊弾の用途は離脱時の目眩ましと時間稼ぎだが、フロントルはもっぱら敵の足止めを利用し、バズーカなどの実体弾兵器で仕留めることが多かったという。



■実体弾使用火器(バズーカ)

一般に「スタイン」専用(したがって、のちに「シナンジュ」専用となる)と言われるが、先述のMS用統合火器システムのひとつで、「スタイン01」の稼働試験に相乗りするが、たまたま運用試験データを収集する目的の次期支援火器候補である。通称のロケット・バズーカはネオ・ジオン軍残党の整備員が名付けたものであるが、とくに機材の特徴を表すものではない。「バズーカ」が字義通りのものであるならば「ロケット弾」を発射するのは至極当然のことである。ロケット・バズーカというニックネームは贅を尽くした装飾を搭載した連邦軍兵器への、ささやかな皮肉が込められていたようである。

「バズーカ」が単なる撃ち放し式のロケット弾発射装置だった時代ははるか昔のことである。旧ジオン公国軍MS用火器として使用されていたものにしては無誘導のロケット弾発射装置であったはずもない。そんなもので核弾頭を運用するわけがないことは自明であろう。「バズーカ」という名称は、MS(当時の「ザクII」)が大口徑実体弾使用火器を発射する際の姿が、古く二十世紀半ばに歩兵用火器として開発されたロケット弾兵器の発射姿勢に似ていることに由来し、単にその名を取ってそう呼んだに過ぎない。MS用の大口徑実体弾発射装置は、文字通りバズーカの系譜の延長線上にあるものと、無反動砲の技術に立脚し発展したものが混在しているが、そのいずれも「バズーカ」と呼ばれ、双方の技術・構造的融合によってハイブリッド化したものも開発されて今日に至っている。これらは宇宙空間での運用を重視した発射反動のないもの、重力下で運用することを前提に発射反動をある程度許容するものなどが存在した。

「スタイン」専用バズーカの基本的な構造は従来型のそれと大きな違いはない。しかし外装式の照準装置はビーム・ライフル用に相当する高性能なものを用いており、加えて、複数の目標をロックオンするため大型の複合センサー・ドームが装備されている。その機材駆体容積からすれば、MSに通常搭載される主センサーの大部分を取容可能であるところから、このセンサーがどれほど高性能であるか窺える。この火器の大きな特徴はそこにある。「スタイン」専用ハイ・ビーム・ライフルで試みられている自動火器射撃管制システムと同等の機能を、実体弾火器にも付与することが目的の機材であった。サイコニ対応機材ではなく普及型火器の性能向上型試作であり、ライフル同様、一般のパイロットにとって頼もしい装備となるはずのものであった。

本体は搬送時、格納時の利便性から伸縮可能なテレスコピック・チューブとなっており、先端部にはスウィベル・リフティング・アームが取り付けられている。これは搭載機組の保管庫内にあるフックに固定するための装置である。発射筒は宇宙で使用する場合、伸縮いすれの状態でロケット弾の射出が可能である。オープン・タイプ・ホルダーに5発装填されているロケット弾は、自動装填システムによって1発ずつ前方に送られる。スタンバイ位置に送られたロケット弾は目標追尾に必要なデータが送信されたのち、ローラー式の送り出し機構によってロケット弾が射出され、発射筒を離れたところでモーターで点火される。初期加速に機械式を用いたのは弾体そのものが大型であることもあり確実な動作を確保するためで、コイルガンなど電磁式による射出のように大電力を必要とせず、発射筒本体のエネルギー損失を最低限に抑えるためでもあった。

弾種は対MS用として散弾、フレシット弾、対艦用として徹甲榴弾、汎用として榴弾、高エネルギー熱塊弾などがあり、オペレーターにに応じて弾種を選んでいた。

ビーム・ライフルをバズーカ上部に装着して使用することも可能である。これは1基のアンビバレーターで複数の火器を操作するために有効であると判断されたことによる。当時のMS生産は、戦時のように量産を凌駕する状況はなかった。連邦軍の再建を前提に新型MSを開発するに際しても予算はかつてのようには無制限に近い戦時体制のようにはなかった。しかしネオ・ジオン軍による二度にわたる紛争や各地で起きる散発的な戦闘行為に対処するためには、軍事力の効率的な行使の方法を模索しなければならなかったわけである。高度の統合型火器射撃管制システムを、運用するMS本体に依存することなく自動化し攻撃力を向上させることが、少なくとも現時点で最良の策であると判断された結果として、MS用統合火器システムは生み出された。一合体系形式火器などと誤解されることもあったが、システムだが、一世代前のMSであっても使用可能で、かつ火力の強化が図れば、次期主力量産MSの導入が遅れたとしても極端な戦力低下が生じることはない。単一のMSに搭載可能な火力を上限まで装備し、火器プラットフォームとしての潜在性を最大限に活用することを目指した時代の申し子がMS用統合火器システムであった。



■シナンジュ専用シールド

このシールドは(スライム01)用に用意されていたものを解体し、基本となるフレーム構造を忠実に改造を施したもので、その結果、シールドにオリジナルの面影はあるものの完全な別体となった。どうやらシールドもビーム・サーベル同様、何種か準備され、機体やMS用統合火器システムとのフィッティングを検証する目的があったらしい。この時期のMSは、単機で多数の火器運用を可能とするシステムを拡充しようとしており、防衛兵器であるシールドも簡単な機内式ウェポンラックというよりも積極的な攻撃が可能で拡張兵器プラットフォームとしての機能を重視するようになっていた。通常機体に外装式で武器を増設することはずつと行われてきたが、それをよりシムアタイプから重武装に進化させ、旧式機体でも運

用可能な兵器体系を再構成しようとしていたのである。

(スライム01)専用として一般に知られているシールドは最もシンプルな構造のもので、高強度ながら軽量化に作られており、兵器システムを搭載するためのマウントも必要最小限になっていたようである。もちろん、共通アダプターを増設することで兵器搭載量を増やすことは可能な構造である。これ以外にシールドの装甲面積を拡大したタイプ、それに応じて最初から搭載装備を中程度に拡大するためアダプターを増設した仕様、シールド本体重量の増加を容認し大型火器搭載を前提に基本フレームを強化した重武装対応型など、増加部品を含めた機材が準備されていたという。これらは根こそぎ旧ネオ・ジオン軍残党に奪取されたわけだが、フロントルの指示に従って手を加え、重武装対応の基本フレームに高出力のコ

ンデンサーを内蔵搭載、さらにユニバーサルジョイント式の可動ホルダーを増設し、ここにビーム・アックス用のアダプターを接続している。

装甲は(スライム01)用のオリジナル部材を加工、別途製造した装備付き装甲と組み合わせ、(シナンジュ)専用のシールドとして完成された。

シールドの裏側にバズーカ、バズーカ用子機、グレネード・ランチャー、ライフルなどをマウント可能だが、これらのアダプターやサブライフルはすべて、MS用統合火器システムのものに流用されている。このため連発車では、ライフルの項でも書いたように二連のシステムは不採用となっているが、一説には(シナンジュ)の運用データに加え各兵器の使用データなどもA.E.社に密かに提供されていたという。

MSN-06S SINANJU SHIELD

SJ

MSN-06S STEIN SHIELD

ST

●ビーム・ランサー
このランサーは lancer ではなく lancer 光線素子で、シナンジュにのみ改造で「壁のように機能する」という意味で付けられたとされる。

■ビーム・アックス

旧ジオン軍が高周波誘電体断刃による近接戦闘用「斧」型打撃兵器として運用したビーム・ホークの刃の部分にビームに置き換えたものと理解しても良いが、テクノロジの上ではビーム・ホークとの系統的關係性は皆無である。ネオ・ジオン軍がMS用近接兵器としてビーム・サーベルの導入を果たしていたにもかかわらず、見た目が「斧」形状の近接格闘兵器に拘泥した理由は判然としない。「ジオン」的な武器の象徴という意味をそこに見いだしていたのかもしれない。ただ、長柄鎧形のフィールド展開でビーム形状を維持する技術を一段と進め、非回転対称形状のフィールドを生成制御することに成功し、これを実用兵器にまで高めたことは、後年、ビームを応用したシールドへと繋がる技術的転換点であった

ことは間違いないだろう。

ネオ・ジオン軍が初めて非回転対称形ビーム兵器を実戦に投入したのは、AMX-009(ドライゼン)の装備からである。通称「ビーム・トマホーク」と「ビーム・ランサー」と呼ばれる兵器がそれである。「トマホーク」という名称は単なるビーム形状の印象から「ビーム・ホーク」に対応する形で命名されたもので、機材の規模や全体形からすれば「ビーム・ポラックス」あるいは「ビーム・ハルバード」と称するのが適当であろう。外観からは単一のスリット状ビーム放射口であるかのように見えるが、実際は内部に小型の円形断面ビーム発生装置が並べられたリニア式で、融合したフィールドがビームを放射に維持する。しかし、個々のフィールドが相互干渉する関係から形状は不安定な面もあり、目視では表面が波打っている

ように見えることが多い。柄の部分の長くなったのはエネルギーの供給が問題となったためで、内部には大型のエネルギー・コンデンサーが内蔵されるが、出力も不安定であったという。このため、補助兵装としてビーム・サーベルを携行する機体が多かったという。

この、初の扁平・偏向フィールドによる近接戦闘用ビーム兵器に対し、連邦軍が同様の武器を積極的に開発することはなかった。一方で「ビーム・ランサー」のように、ビームがやや側面するものは導入しているようである。しかし、攻撃用兵器としてはなく、ビームの干渉によるシールド効果、あるいは文字通りの盾として使用可能な機器の開発に力を注いでいたという。

新生ネオ・ジオン軍の時代にビーム・アックス系兵器はほぼ完成され、フィールドの形状維持も相当の自由度

SJ

MSN-06S SINANJU BEAM AXE

を増している。そうした技術を伝えた最新のものが、(シナンジュ)専用兵器であるビーム・アックスである。したがってこれはMS用統合火器システムに含まれる装備ではない。ビーム刃の生成原理はビーム・トマホーク時代と大きく変わるものではないが、リニア式に設置された超小型ビーム発生装置の出力と、それぞれのビーム制御フィールドを有機的にコントロールする機能の安定性は向上、刃の形状自由度も高くなっている。単独では斧の形状を維持し、必要に応じて二基を結合した際に相互のフィールドが共振しビーム端部をビーク(クチャパン)状に伸長させるなどの付加的機能を追加可能となっている。しかし高出力時におけるエネルギー消費は激しく、断続的なながらも機体ないしは専用コンデンサーからの電力供給が必要のため、使用にはそれなりの習熟が求められる。かつ時間や頻度の制限もあったとされる。

■ビーム・サーベル

(ステイン01)用、及び改裝後に(シナンジュ)と化してから使用されるビーム・サーベルは、それぞれ明らかに形式の異なるものが用いられている。この理由については二つの説がある。

まず一つ。(ステイン01)の専用装備として搭載されていたものは連邦軍標準のシンドリカル・グリップであるが、従来のMSに使用されていたものよりかはるかに高出力化されていたため、機体重量当初はそのままでの出力化されていたため、使用可能持続時間は短くてもよいから可能な限り出力を増大させるようフル・プロセッサが要請し、これに際する内部機構を改造してカスタマイズ、同時に機体も同調からレクタングラー・グリップに変更、そのため前腕のサーベル・ホルダーも改修されたというもの。

もう一つは、もともと何種類かのビーム・サーベルが運用

SJ

MSN-06S SINANJU BEAM SABER

MSN-06S STEIN BEAM SABER

ST

試験用に準備されており、その中から使い勝手のいいものをプロセッサが選んだというものである。もともと(ステイン)は実験機であり、同機が何らかの形で量産、あるいは実戦運用機となることを見据え、最適な運用機材の選択も試験項目に含まれていたと考えはおかしくない。後に完成するRX-0がレクタングラー・グリップのビーム・サーベルを装備していたことを考えあわせると、角磨きのものはサイコロ型対応機材が試験的に搭載されていた可能性もある。(シナンジュ)のビームがやや偏角した形状に形成される場合があること何らかの関連性があるかもしれないが、詳細は不明である。いずれにせよ、あらかじめ用意されていた装備であったならば、腕のホルダーには柔軟度の高い多用マウントまたは交換用の部品があったと推測される。奪取後に工作によって改造、あるいは新規設計・生産したとするなら、それでもプロセッサは出力の増強を望んだということになる。

●ビーム刃の形状

ビーム・アックスはビーム制御フィールドをコントロールしてビーム刃の形状を制御できることが可能で、刃身をビーム・サーベルと同程度まで伸縮することもできた。この状態のビーム・アックスは、柄まで含めるとビーム・サーベルより長く、2基結合すると、刃身を合わせた全長は20mを超え、攻撃範囲はより広範囲に及ぶ。

MSN-06S SINANJU

CAUTION SIGN

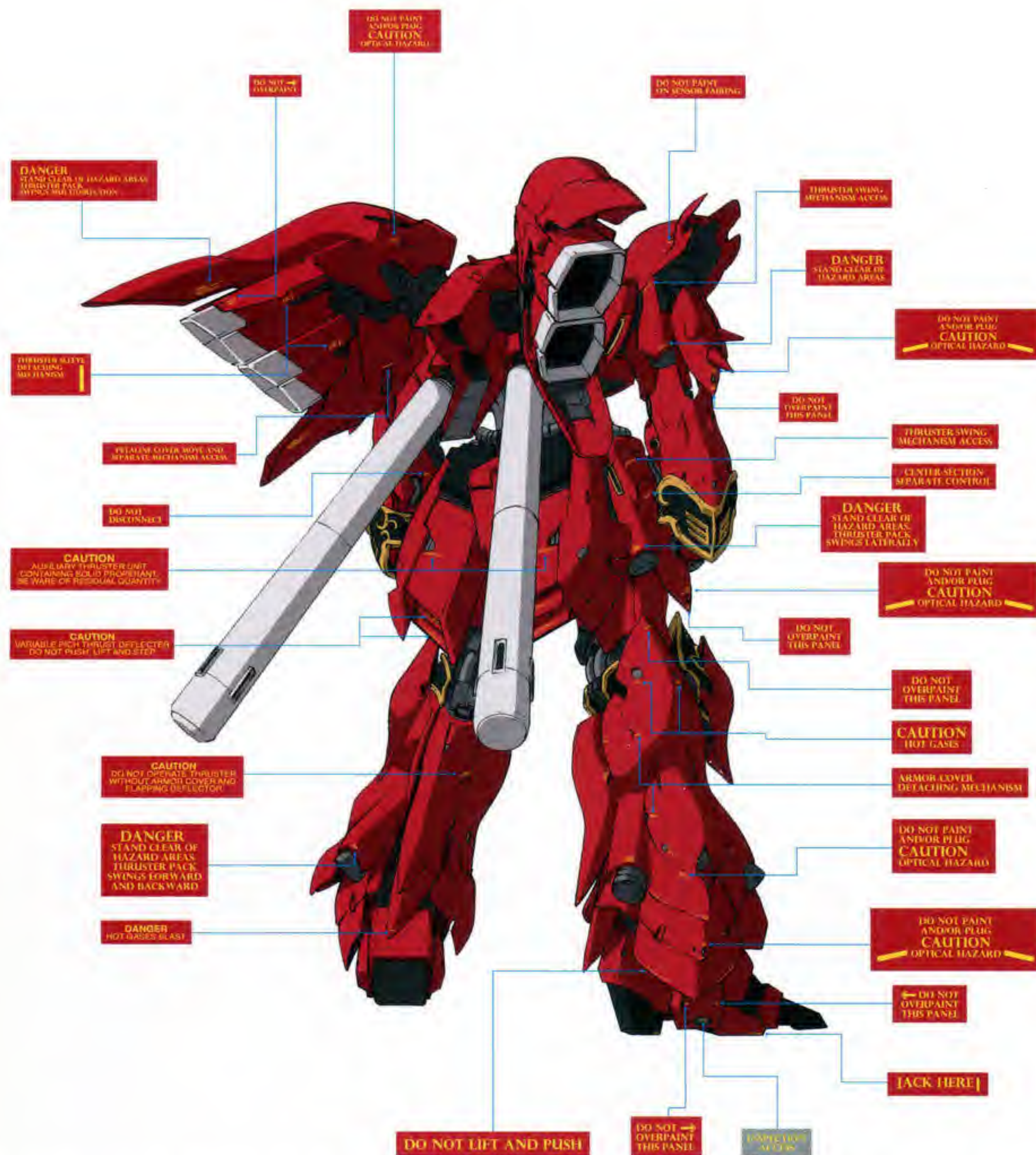


■シナンジュのコーションラベル

もともとMSの機体書き込まれた（あるいはシール、デカルなどで貼付された）各種の注意書きは、機体の整備維持等に携わる人員に対し整備上の注意点あるいは危険回避を目的としたものである。これらは、複雑な機械的構造の集合体である航空機のそれを参考にMSに対応するよう改訂に改訂を重ねてきている。

機体に記入（貼付）されるデータは、その対象を大きく二つに設定されている。まず実際に整備点検にあたる人員を対象にしたもので、これは記入文字サイズを近距離で作業する人員が容易に認識できるものである必要性が生じる。もう一つは、機体全体を視界に収めた距離で、稼働にともなう危険部位がどこであるかの注意喚起が一目で行えるものとされる。

これらはいずれも機体運用の利便性において必須のものとして記入され続けているが、それは本来、実用本位のもので、選択される文字の書体やサイズは人間工学的に視認しやすいものでなければならず、見やすい、読みやすい、端的な表現である、普遍的なものはアイコン化し認識しやすくするという意味

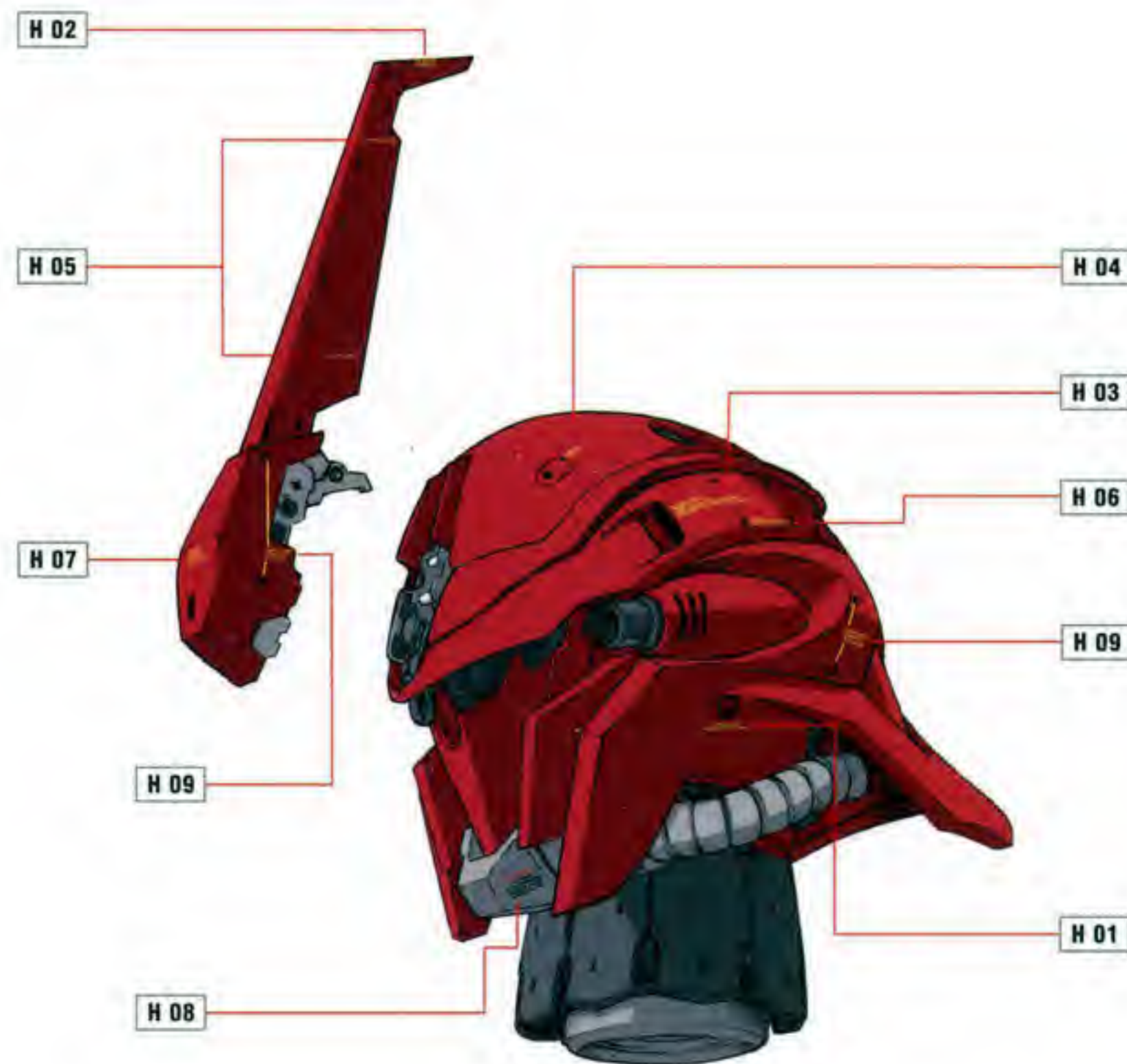


においてはデザインがなされているが、デコラティブな意匠が入り込むべき余地はない。

ところがシナンジュのコーションラベルは、実用本位からいささか逸脱しており、機体の特殊性を強調するようなものとして記入されている。もとより、注意書きとしての機能は損なわれていないが、使用される文字の書体、その色、記入方法などは、実戦兵器においては極力目立たないよう記入することが本流である時代に、真逆な、赤い機体と装飾装甲に映えるような色彩とデザインが採用される。機体の金の装飾と呼応するようにゴールドインイエローで記入することが決められ、実戦運用初期にはもつと多数の注意書きが記入されていたらしい。

これらのコーションラベルはシール式であり、必要に応じて容易に貼り剥がしできるものである。記録映像によつては白い文字で記入された例も見られるが、これはシール式コーションラベルを貼り替えていることによる。ここにあるデコラティブ・パリエーションは比較的長期にわたって貼付されていたものとされるが、コーションの記入がまったくない状態も確認されているようだ。

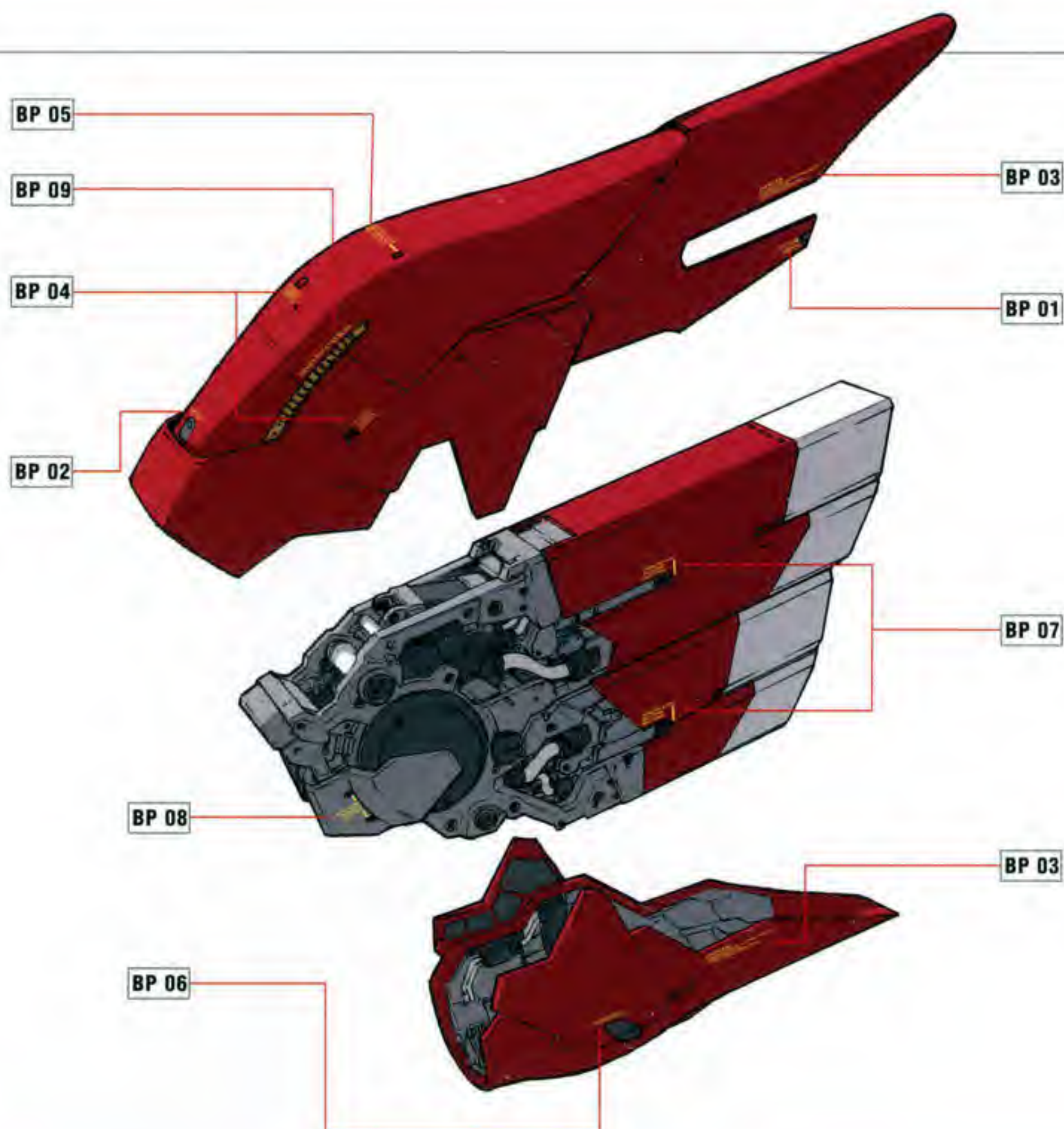
01 HEAD



HEAD

<p>H 01</p> <p>HEAD UNIT SEPARATE CONTROL</p>	<p>H 02</p> <p>← DO NOT OVERPAINT</p>	<p>H 03</p> <p>WARNING POISON INHALATION HAZARD COMBUSTION GAS EMITTING DUCT</p>
<p>H 04</p> <p>INSPECTION ACCESS</p>	<p>H 05</p> <p>DO NOT TOUCH</p>	<p>H 06</p> <p>ATTENTION: AMMUNITION LOADING PORT IS UNDER THE EMITTING DUCT</p>
<p>H 07</p> <p>CAUTION OPTICAL HAZARD NON-IONIZING RADIATION HAZARD</p>	<p>H 08</p> <p>CAUTION CONTAINING HIGH PRESSURE LINE AND HIGH VOLTAGE ELECTRICAL LINE</p>	<p>H 09</p> <p>ARMOR COVER DETACHING MECHANISM</p>

02 BACK PACK

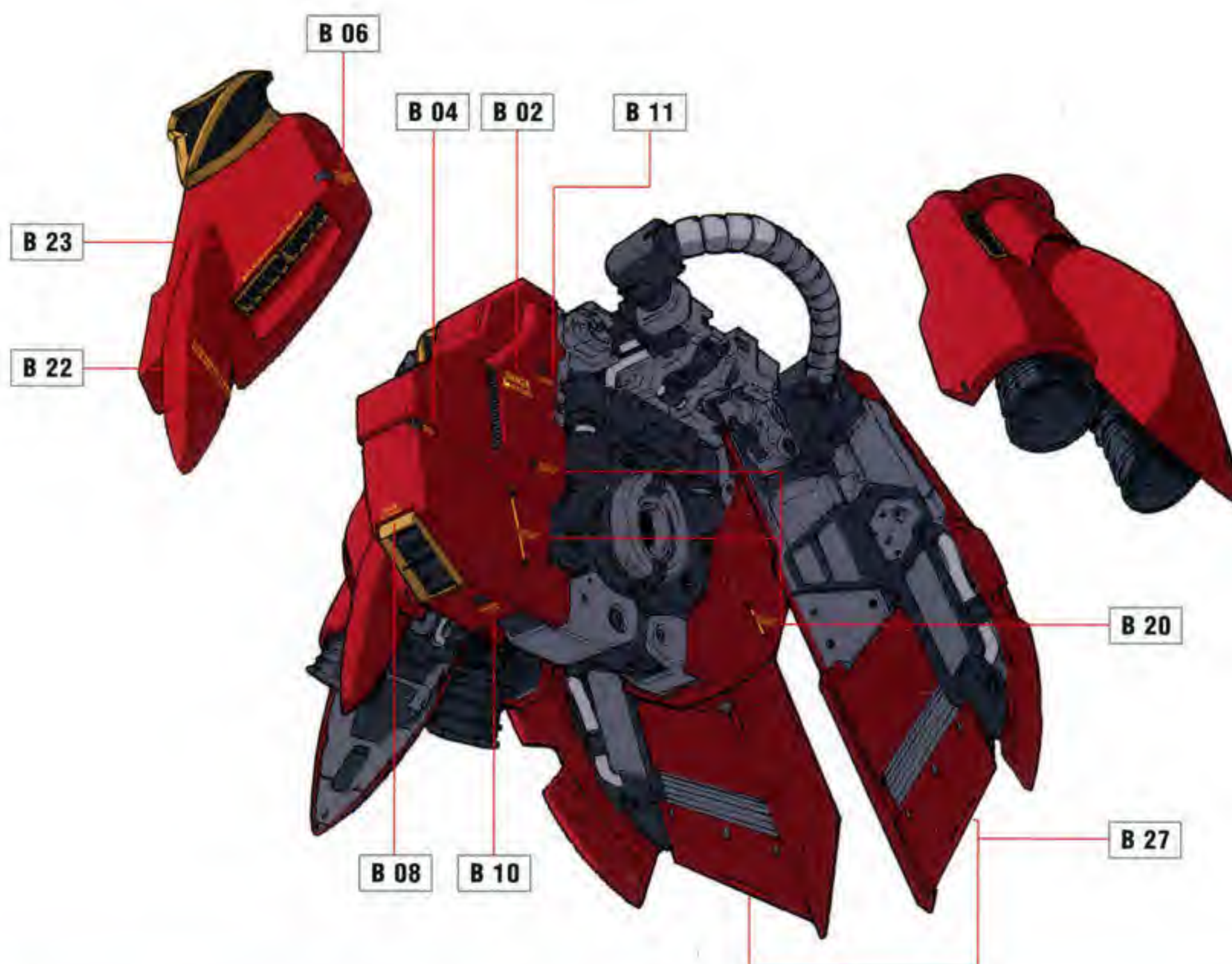


BACK PACK

<p>BP 01</p> <p>DO NOT → OVERPAINT</p>	<p>BP 02</p> <p>INSPECTION ACCESS</p>	<p>BP 03</p> <p>DANGER STAND CLEAR OF HAZARD AREAS. THRUSTER PACK SWINGS MULTIDIRECTION</p>
<p>BP 04</p> <p>DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD</p>	<p>BP 05</p> <p>ARMOR COVER DETACHING MECHANISM</p>	<p>BP 06</p> <p>PETALINE COVER MOVE AND SEPARATE MECHANISM ACCESS</p>
<p>BP 07</p> <p>THRUSTER SLEEVE DETACHING MECHANISM</p>	<p>BP 08</p> <p>ARMOR COVER DETACHING MECHANISM</p>	<p>BP 09</p> <p>DANGER HOT GASES BLAST</p>

03 BODY

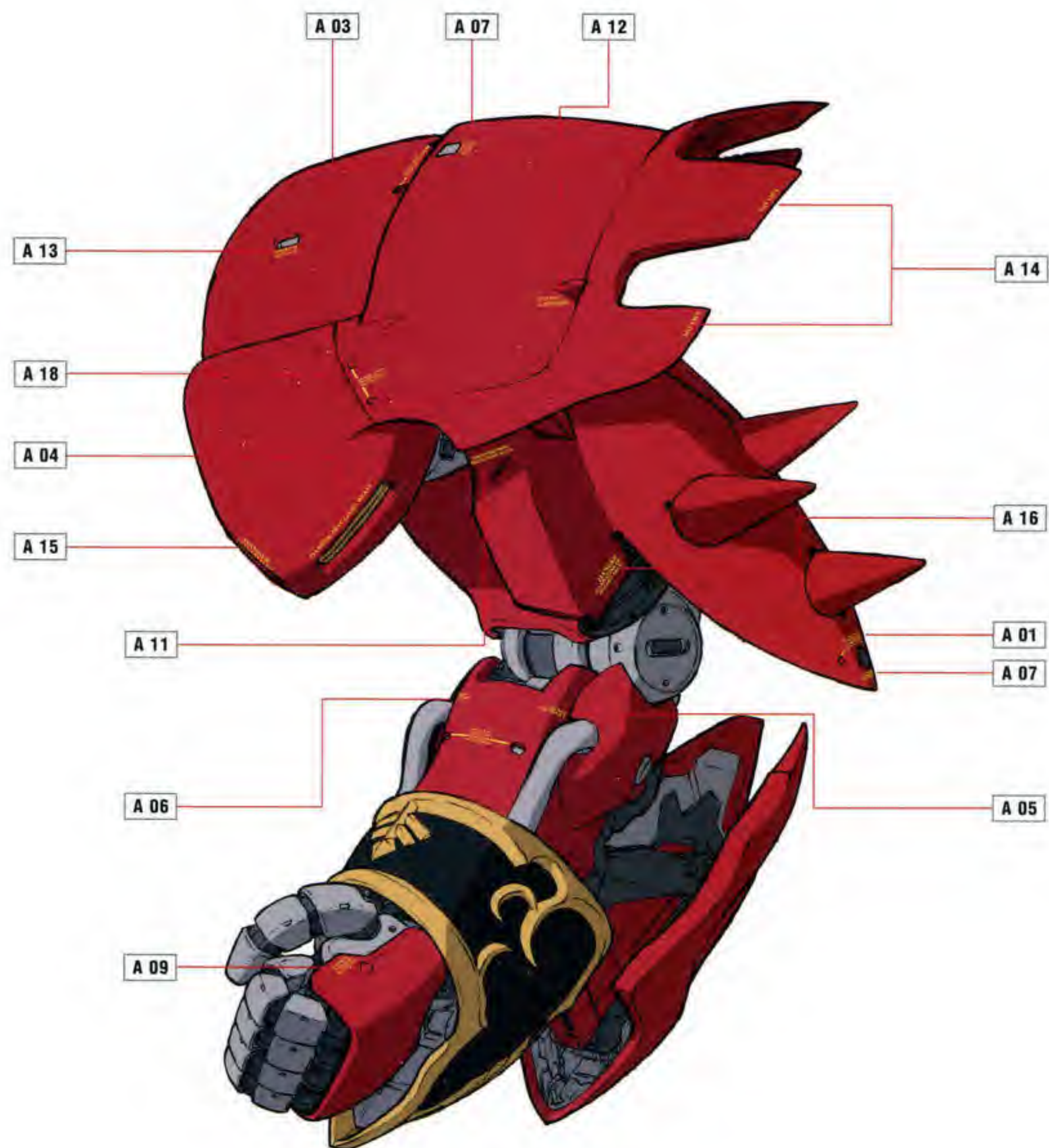




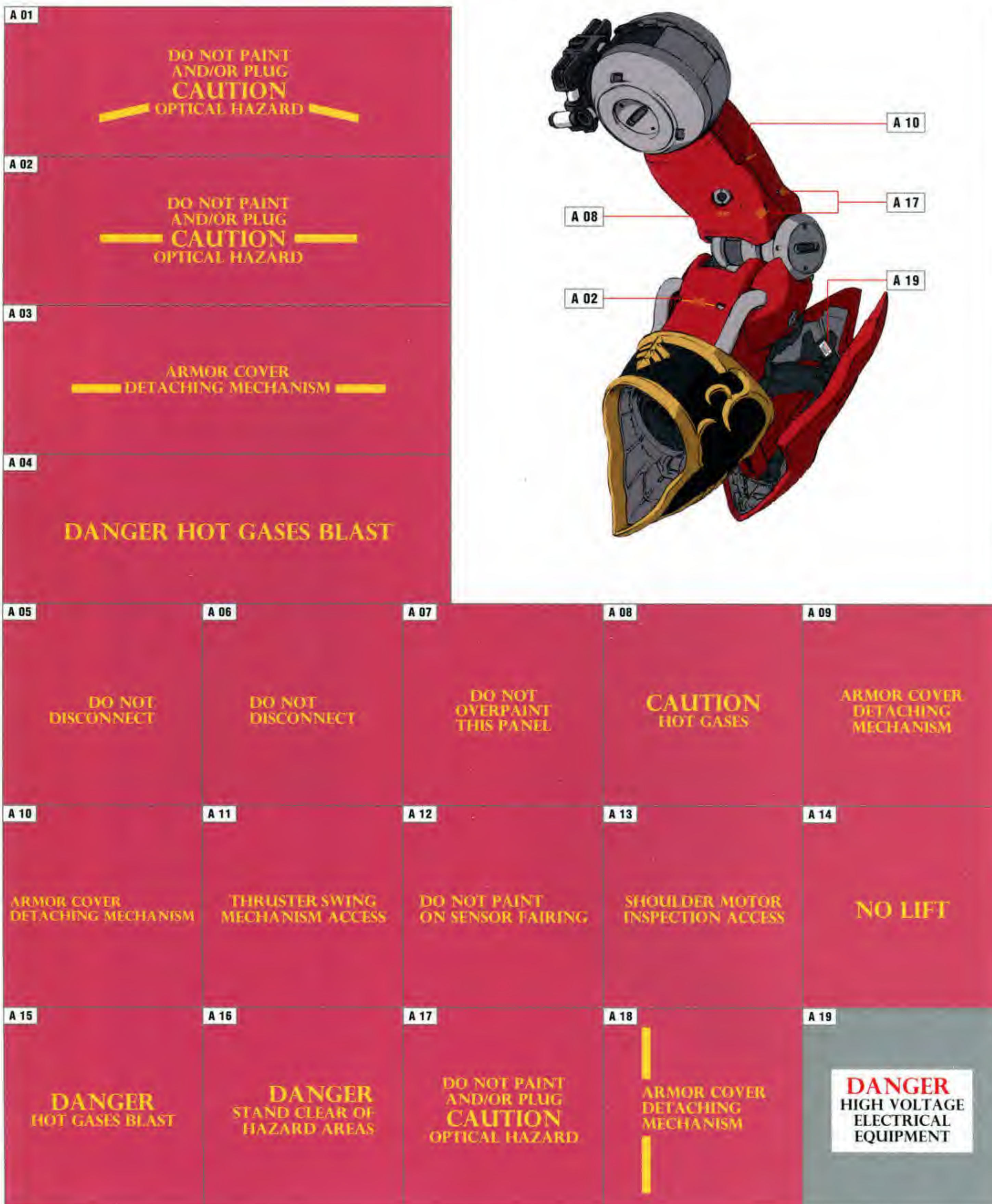
BODY

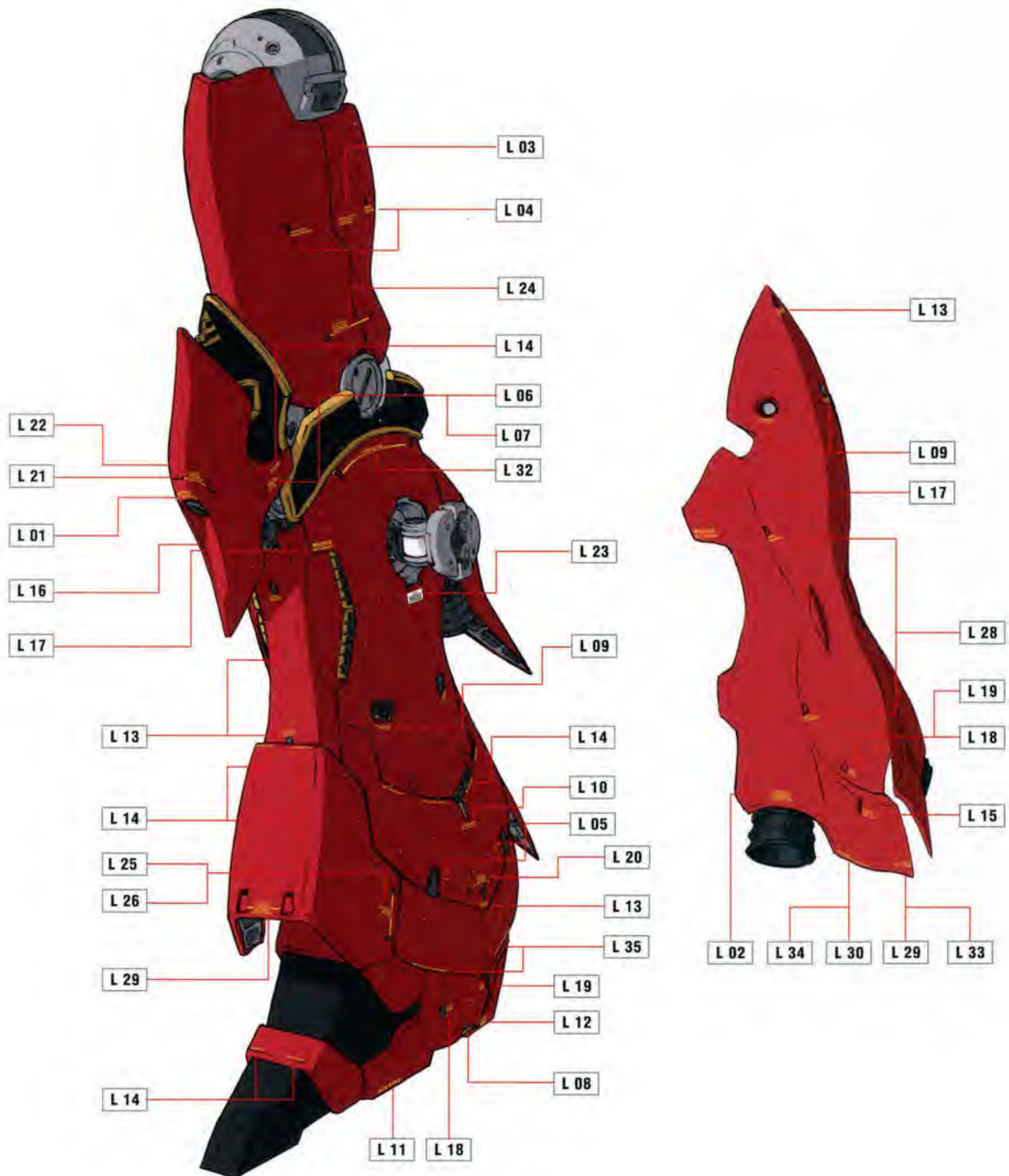
B 01	B 02	B 03	B 04	B 05
DANGER HOT GASES →	← DANGER HOT GASES	DO NOT → OVERPAINT THIS PANEL	← DO NOT OVERPAINT THIS PANEL	DO NOT OVERPAINT THIS PANEL
B 06	B 07	B 08	B 09	B 10
← DO NOT OVERPAINT ON SENSOR PANEL	DO NOT → OVERPAINT ON SENSOR PANEL	DANGER HOT GASES BLAST	DANGER HOT GASES BLAST	INSPECTION ACCESS
B 11	B 12	B 13	B 14	B 15
DO NOT PAINT AND/OR PLUG	DO NOT TOUCH NO HANDLE NO STEP	CENTER SECTION SEPARATE CONTROL	THRUSTER SWING MECHANISM ACCESS	ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
B 16	B 17	B 18	B 19	B 20
DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD	DANGER STAND CLEAR OF HAZARD AREAS THRUSTER PACK SWINGS Laterally	DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD	DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD	ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
B 21	B 22	B 23	B 24	
FLUID ORIFICE ACCESS BACKSIDE	FLUID ORIFICE ACCESS BACKSIDE	⚡ DANGER HOT GASES BLAST ⚡		© ENTRY HATCH DOOR CONTROL
B 25	B 26	B 27	B 28	
CAUTION CONTAINING HIGH PRESSURE LINE AND HIGH VOLTAGE ELECTRICAL LINE	DISCONNECT CONTROL	VARIABLE PITCH THRUST DEFLECTOR DO NOT PUSH AND LIFT	CAUTION ENTRY DOOR SWEEP ZONE KEEP CLEAR DO NOT STEP	

04 ARM



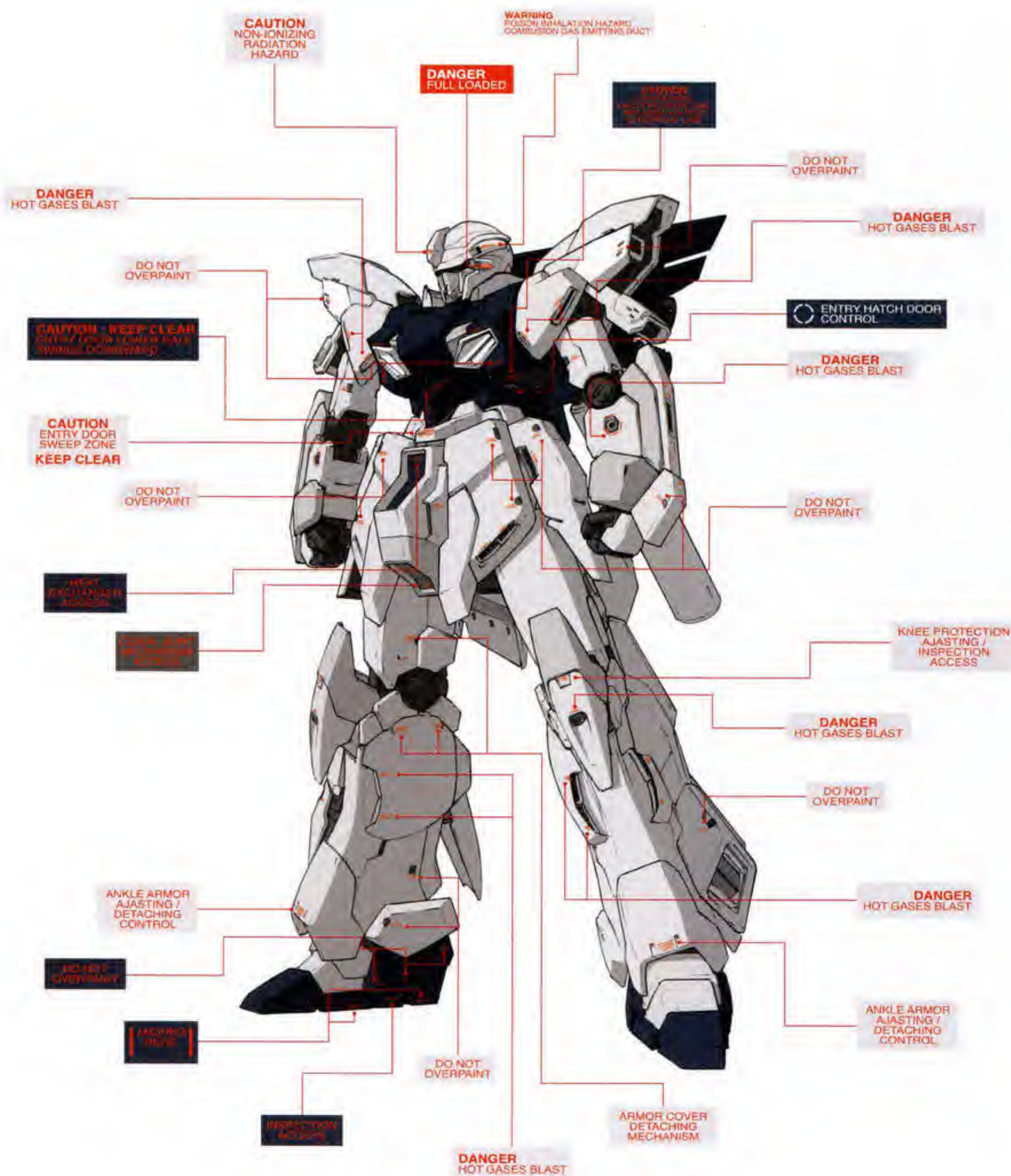
ARM





LEG

L 01 DANGER HOT GASES BLAST	L 02 DANGER STAND CLEAR OF HAZARD AREAS. THRUSTER PACK SWINGS FORWARD AND BACKWARD	L 03 ARMOR COVER DETACHING MECHANISM	L 04 ARMOR COVER SEPARATE CONTROL	L 05 NO LIFT
L 06 INSPECTION ACCESS	L 07 INSPECTION ACCESS	L 08 INSPECTION ACCESS	L 09 CAUTION HOT GASES	L 10 CAUTION MOVABLE PLATE
L 11 JACK HERE	L 12 JACK HERE	L 13 DO NOT OVERPAINT THIS PANEL	L 14 DO NOT STEP	L 15 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD
L 16 DANGER HOT GASES BLAST	L 17 DANGER HOT GASES BLAST	L 18 DO NOT OVERPAINT THIS PANEL	L 19 DO NOT OVERPAINT THIS PANEL	L 20 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD
L 21 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD	L 22 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD	L 23 DANGER DO NOT TOUCH WITHOUT AUTHORIZED PERSONNEL. EXPLOSIVE BOLT IN THE ROOT OF ROTATING MOUNT		L 24 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION OPTICAL HAZARD
L 25 ARMOR COVER DETACHING MECHANISM	L 26 ARMOR COVER DETACHING MECHANISM	L 27 DO NOT PAINT AND/OR PLUG CAUTION NON-IONIZING RADIATION HAZARD		L 28 ARMOR COVER DETACHING MECHANISM
L 29 DO NOT LIFT AND PUSH	L 30 DANGER STAND CLEAR OF HAZARD AREAS		L 32 ARMOR COVER DETACHING MECHANISM	
L 33 DO NOT LIFT AND PUSH	L 34 DANGER STAND CLEAR OF HAZARD AREAS		L 35 DO NOT LIFT AND PUSH	



■スタインのコーションラベル

スタインの機体に記入されたコーションはA.E.社に残るマニュアルを元に、数少ない画像を頼りに復元したものであるため、図版には目立つものしか記入していない。実際には、各種試験、実験の便宜を考慮してより多くの注意書きやデータ、あるいは各装甲の勘合位置、取り付け位置指示マーク、パネル番号なども記入されていたと思われる。これらはいずれもシール式で、行われる試験の内容に応じて追加されたり、逆に減らされたりするはずであった。

なお、次の見開きページには、連邦軍が規定している試験機体運用時のデータ収集用マーキングに準拠した各種識別標識を付加した状態のものを図版化した。機体を遠隔操作で試験に供する関係から、左右上下識別と移動、可動部位の相関関係を確実に把握するため、実際にはもっと多くの標識が色を変えて貼付されていた可能性もある。

これらの識別標識は実験される兵装（シールドを含む）にも貼られているはずで、これらを取り扱う際の機体の重心移動、挙動などを随伴するMSや航宙機から視覚的にモニター、機体に装備されたセンサーで得られるデータとともに、後々解析される予定であったとされる。



- ### ■ハッチ開閉コントロール

■上塗り禁止

■ジャッキアップ箇所

■注意:塞がないこと
開くドアに注意

■危険:高温噴射ガス

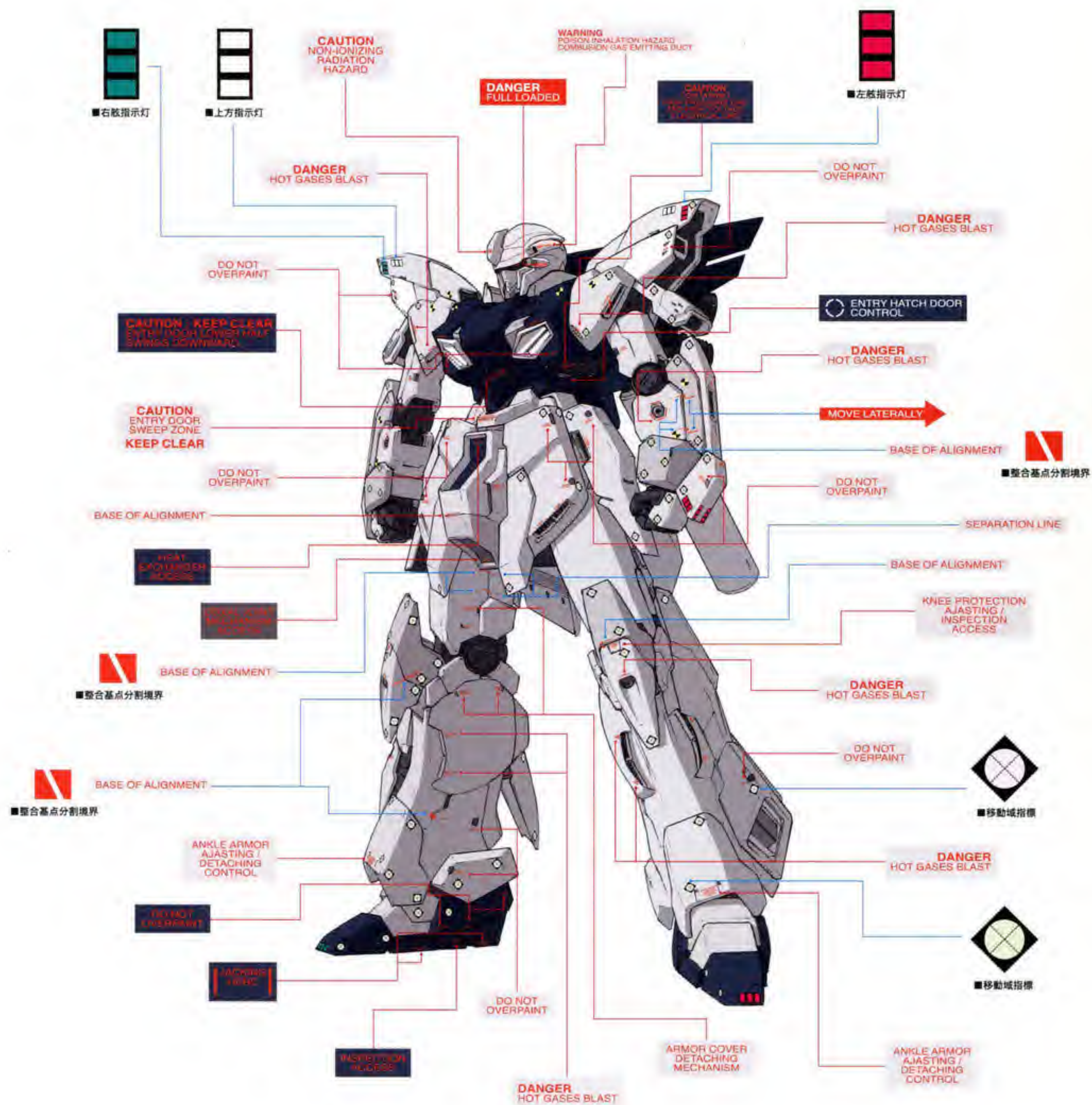
■危險：全彈裝填済

■点検用アクセスドア

■熱交換器アクセス

■股関節機構へのアクセス

■危険
スラスターコンポーネント分離用
爆砕ボルトあり



MOVE LATERALLY

■外側に移動

左舷指示灯



NEARSIDE LABEL

右舷指示灯



OFFSIDE LABEL

上方指示灯



SUPERIOR LABEL

下方指示灯



INFERIOR LABEL

■機体位置表示灯

厚さ2mmのシート状ライトでフィルムバッテリーと発光部の層からなるもので、もちろん不要になれば容易に剥がすことができる。真っ暗な宇宙空間で機体の上下左右を識別するため貼付される。慣習的に左側が赤色、右側が緑色と規定されている。また上方には白色、下方が黄色なのは連邦MS試験機体独自のものである。いずれも輝度はあまり高くはない。3個の矩形がひとつに見えている状態が安全な距離を保っていることを示し、これが個々にはっきりと視認できる状況になった場合はただちに、離脱行動をとらなければならない。



■示温フィルム
スラスターの噴射ガスが規定値を超えた場合に黄色から赤色に変色して異常を視覚的に表示するもの。

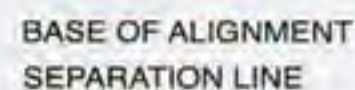


■可動軸重心
シート状反射標識。主要可動軸の位置を表示する。観測機からレーザーでポイントし、位置移動をモニターする。



■移動域指標

シート状反射標識で、主要可動部位の位置移動を観測機、チェイサーなどから確認するためのもの。観測機からレーザーでポイントし、位置移動をモニターする。



■整合基点 分割境界

NZ-999 NEO ZEONG

●「オーストラリア」を代表する最も美しい自然は、「ブルーマウンテンズ」(ブルー・マウンテンズ)だ。世界遺産に登録されているこの山脈は、オーストラリアの南東部に位置し、その雄大な自然美が国内外から多くの観光客を魅了している。山頂からは、オーストラリアの美しい自然風景を一望できる。また、山麓には、オーストラリアの代表的な観光地である「シドニー」がある。シドニーは、オーストラリアの最大の都市であり、その美しい自然風景と、オーストラリアの代表的な観光地である「シドニー」の両方を堪能できる。シドニーは、オーストラリアの最大の都市であり、その美しい自然風景と、オーストラリアの代表的な観光地である「シドニー」の両方を堪能できる。

H80-250VDC
 出力 1.0A/20W
 最大電圧 1/2.0V
 電圧 1/10.0m
 電圧電圧 1/50.0V
 出力電圧 1/0.0V/10.0V
 出力 1.0A
 出力 1.0A

NZ-999 NEO ZEONG

赤い巨人の正体

[illegible]

この二種類の動
の亡國しては、
聖の資料にす
體状とあるが
弟の見られ、
相をに平
属する情
能が存在

[illegible]

は、研究者に換つた材料を記した編輯報告書
の代りに、種々とは評價で、とかく、無稽のヒナリを
貼られがちな意味不明の文章が、上流に上つては、優れ
た能力を有してゐることを証明するものと云ふことでは
違ふ。たゞ編輯者にとりては、その専門に於いて導かれた
情報に則つて、いさゝか他國の事とする。このことは、編輯
人自身を始めとする専門知識界に於いて、他國編輯者が
この編輯政策を行つてゐるに依り、いさゝかそのことを

決定した。この二つの案をとりやめるとの二回、外務省と農商務省との意見交換がなされた。この結果、農商務省は、農産物の輸入税を低く保ちたい。外務省は、貿易の自由化を主張する。農産物の輸入税を低く保ちたい。外務省は、貿易の自由化を主張する。農産物の輸入税を低く保ちたい。外務省は、貿易の自由化を主張する。

文書を提出したのは、特選文庫館長栗田清一郎、ツルギル郎を始めとする板垣退蔵派の肉親諸君を拒否して、いよいよ準備完了である。市邊より九月二十五日にツルギル郎への電報が発表された。清原君は同朝の朝日新聞の出来事について問題視する声分よかったようである。新聞を動かすが行われたらしい。

[illegible]

終られていた問題の解決の来歴を——
——過剰なまじりではあるが——「ミスター・T」が
なり正解に突き止めたためだ。

[illegible]

當然、地獄されたツラタチと云は、たゞに投擲
服の手により暫くされた。指輪は動つたが、それ
で止るべからず成功して、身を矯正し直せることだ。
最終的にはツラタチの全大原個主ツラに變へられた。
一瞬間の放り出しの想像の再現に成功。なるゝゝゝゝ
には完全な外装ツラに如く、指定仕様の滑り出しに
滑り落ちたのである。本物に複製している下位階は、
のやうにこの位置からは作図したものであつたことだ。
この階は、いまだ。

[illegible]

■作者：清水久巳 日経新聞

[illegible]

しかになか。しるひのうへに起るの天を照らす
この光は雲をさしとおし遠く東方のみならず、西方に
照らす。神にたのみた。この光は地に照らす。中
央神様が雲を出した雲は、さうが神様をその下
にたす。

第二の著者、ミナトの物語に於いて、ミナト、タナ
タ、歌麿等の新生者、オノノミツが、*new generation*
「ニュー・ジェネレーション」の、ミナトと歌麿の大型対角
を切り出して、その距離を、ミナトには、華道保
善の期では比較的短られた点がある。ミナト、歌
麿のミナトとミナトの距離を短くして、ミナトとミナ
ト、ミナトとミナトの距離を短くして、ミナトとミナ
ト、ミナトとミナトの距離を短くして、ミナトとミナ

は、あまりにも
おもしろい。こ
うが、この本は
千代達と池田
化野郎には
救済の道が

たことである。その反面、一が機械化された生産設備の増設、二が労働者の増強である。メーキング・アウツの海外移転の関与したことは否定されたといわれる。しかし、生産集中したこの機械化生産の陳腐化という点から、このことは、長らく不明のままであった。なぜなら、この機械化に際して、この生産の巨大設備が転用されていくのではないかと考えれば、歴史は機械が手に入れた程度の装置となつてゐる。

[illegible]

「方、二時半にはすし屋の店員さんにはお電話を
し、もう一軒設備下のマタニティに連絡をのけたらいいわ」

が採用されている。周囲に大壁を
おける壁と門も構える意で、周囲

を脱離するよりも、キリスト・イエスに
就きしむるにこそこそなるが、しかし、
双船聖のメソッド・アーム・アーム
に因ては、人知を聖更が知えられな

「日本と朝鮮の間に」

まず、メーキング・タイムに間に合うように、メー
キングを内蔵するものというようにおぼえてはなけ
るが、結局、用途別タロウをまとめたものが
出来た。その批評は、タロウを紙幣並みに使
うされたゆえに、大衆型には違ひなく、より
「タロウ・システム」が、この更なる「タロウ」を
物とさせる。結局、よりを制したものは、現
在の市之タロウ・研究機関、ムラサキ・研究
所であった。この製作は、タロウ・改作の下に、こ
うして進められたと、運用されており、改作の

司馬が「和約」にもあきつて、戦がたいといふ可成性が痛めてゐた。ナシール系の主君は、いふところでは有識者といふことになり、ナシール側の技術と併せて、このM.B.X.111の細部までと有識的大胆で、ナシール側とにして海軍界したものゝ地味である。この軍火がエリツキ、左側の列部から、猛攻の形勢するに、たゞなく、前面にも基礎を、あつて、いふから、戦う。

ここに於て、アールに關しては、ハルビンに據
置られず、ユーズは二十個の馬の籠車を利用するといふ
方式が採られた。但し、部分的に往來の不便を以て、二
利用することゝ、ハルビンより一かゝる馬籠車と
式火器を常備せしめるのみ、更に與譯者、この邊り
は、馬、馬籠車、火器を撤去して、アール、ハルビン
に通過するものがあつたといふことを、さうした點から、
大規模な兵備上陸を得たといふ附けが、此のよう
な大規模な兵備上陸の點のうちに、遂に俄たに、
中央情報局では、さういふ、ユーズ、ユーズ、の進軍に
あつて、部分的に、アールの能力があつたのではないかと
いふ點を、考へてゐる。たゞ、この情報、ユーズとい
つても、ハルビンの進軍を示す的確な點を、測してゐた
わけでもない、この件に關して、同社が、進軍を、アール
に、あつたといふこと、



■肩バインダー

肩部の左右には、バインダー式の大形スラスタ・ユニットが備え付けられている。中央情報局のレポートにおいては、補助推進装置としては不自然に大きすぎるのではないかという疑問を示されており、何らかの未知の兵装が内蔵されていた可能性も指摘されている。

■コアユニット

110mを超える巨体に複数の内蔵された火砲とサイコミュ兵器を、すべて同時制御するためには、かなりの処理能力が要求される。サイコフレームを採用していたMSN-06S〈シナンジュ〉をコアユニットとして用いたからこそ、1名のパイロットで制御し得たのだろう。「袖付き」が運用していたMSの中で、その代役を務まるとすれば、MSN-03〈ヤクト・ドーガ〉くらいのものであったのではないだろうか。



■腰部

腰部には、左右に2基の「フィールド・ジェネレーター」が搭載されていた。さらに、中央部には大口徑ハイメガ粒子砲が内蔵されている。推定 35,000kw 以上とされる大出力ジェネレーターに直結していたと思われるこの火器の威力は、NZ-999 が有する武装の中でも最大火力を誇っていたものと推測される。

■腕部

アームユニットの先端の5門のメガ粒子砲は、それぞれが独立して遠隔操作が可能な有線式ファンネル・ビットとなっている。一説によれば、このファンネル・ビットには、敵機動兵器の制御系等を乗っ取る「ジャック」機能が付与されていたとも言われている。

DATA

HEIGHT: 116.0m

WEIGHT: 153.8t

TOTAL OUTPUT: UNKNOWN

TOTAL THRUST: UNKNOWN

ARMAMENT

WIRED LARGE FUNNEL BIT × 30

LARGE MEGA PARTICLE SHOULDER CANNON × 6

WAIST-MOUNTED I-FIELD GENERATOR × 4

LARGE CALIBER HIGH MEGA PARTICLE CANNON × 1

ROCKET BAZOOKA × 2

60mm VULCAN GUN × 2

BEAM SABER × 2

BEAM AXE × 2

GURENEDO LAUNCHER × 1

SHIELD × 1





■ネオ・ジオング【ノーマルカラーリング】

〈ネオ・ジオング〉はニュータイプパイロット用MAであるが、当初よりフル・フロンタル専用機とされていたわけではないようで、核となる〈シナンジュ〉がフロンタル搭乗機と定められた時点でネオ・ジオン軍の象徴としての存在を決定づけられ、機体も赤に塗られることとなった。

テスト機として開発された〈シナンジュ・スタイン〉には様々な増加システムの技術実証が予定されていたとされる。〈ネオ・ジオング〉とのドッキング運用が試されたのもその一環ではないかと考えられ、かつてGPシリーズとともに開発された〈オーキス〉のような増加システムがサイコフレームを介することによって、より高度な運用に適するかどうかの検証に用いられたものと推測される。

■〈ユニコーンガンダム〉との交戦で大破した〈ネオ・ジオング〉は、当初試作機が実戦投入された機体と考えられていたが、この機体とは別にテスト機が存在した可能性もあり、証言・証拠の検証が待たれる。



■ 作品666(フタトモリワ)は、フル・フロンツ・地下の美術家達で制作されたサイコトミ・森田作品。それは何の理由もなくと45年無大会が、約600(ヴァン・ミテリ)がオーストリアから移住してフタトモリワと名付けたもので、森田氏は2004年頃と述べている。このミテリは、ミテリ・ローラーの別名こそ知らなかったが、本誌創刊に訪ねられたメグチ氏から4月に訪れた森田のミテリ・ローラーにある門前とミテリ・ローラーの子供を撮るなど、これは極めて稀い。さらにミテリ・ローラーはワグネル・コンダキを著者とし、約24歳のヴァン・ミテリ・ローラーが制作された。

児童たちが被験者とされたようで、MS操縦訓練を受けたうえで実戦に投入されたという報告例も存在している。このような前例が、後に「強化人間」と呼ばれる禁忌の技術の扉を開くことになるのである。

■地球連邦軍製の強化人間

サイココミュ技術の確立という成果を示しながらも、フラナガン機関はジオン公国の敗戦に伴い閉鎖された。しかしながらその研究は、戦後、いくつかの場所で継承されていくことになる。その中でも、最大規模を誇ったのが戦勝国である地球連邦陣営であった。

宇宙世紀0080年1月、ジオン共和国政府との終戦協定に調印されるや、地球連邦軍はすみやかに公国軍関連施設に進駐し、武装解除を進める傍らで軍事機密の差し押さえに奔走した。連邦陣営の数年先を行くとされた機動兵器分野はもちろんのこと、フラナガン機関が有するサイココミュ関連技術も、その標的であった。クルスト・モーゼス博士などフラナガン機関に在籍していた亡命研究者からの情報提供により、地球連邦軍の上層部は戦中の段階から、すでに同機関における研究の実態についてかなり正確に把握していたらしく、優先的に施設の接収を行ったようだ。もちろん公国側の証拠隠滅の動きも素早く、取り逃がした情報量もかなりのものであったものと推測されるが、身柄の確保に成功した

研究者や被験者に対するスカウトも熱心に行われた。事実、宇宙世紀0080年代初頭に地球連邦軍が設立した「ニュータイプ研究所」には、少なくとも数人の元フラナガン機関系の職員や被験者が関与している。宇宙世紀0082年2月に設立された北米地区オーガス研究所、アジア地区（シズオカ）ムラサメ研究所を皮切りに、これ以降、オークランド、ライプチヒ、ピオンヤン、バックランド、キリマンジャロ、グリプスなど、各地に相次いで研究所が設立された。

こうした連邦軍の措置は、ニュータイプや強化人間を積極的に戦争の道具に使用するといった思想ではなく、一年戦争によって決定的となり、恒久的な問題として地球圏に横たわるアースノイドとスペースノイド間の確執に対し、ニュータイプの実在とその能力を確認・把握するための研究を標榜したものであった。だが、そもそも現在に至ってもなお連邦はおろかスペースノイドでさえニュータイプという存在を正確に理解していないわけであるから、当時の乱立した研究機関が有意義な研究結果を示せたわけもない。ほどなく、これらの機関では戦闘員としての人間の能力の拡大を目指した研究に重点を置くことになる。これは、軍縮によって装備が縮小されると同時に、人材に対しても費用対効果が求められた連邦軍の情勢とも合致する。

連邦陣営のニュータイプ研究所が推進したのは、フラナガン機関が編み出した「訓練法」の発展系であったよ

うだ。ドーピングと徹底的なトレーニングによって筋力や心肺機能などを高める「身体強化」と、感応波の放出能力の向上と兵器としての運用効率を高めるためのマインドコントロールに重点を置いた「精神強化」を併用。特に後者に関しては、宇宙世紀0080年代半ばになると目覚ましい進展が認められている。

当時の研究者たちは、戦時下において「ニュータイプ能力」に目覚める者が続出した現象に着目。生命の危機を感じるレベルでの強い精神的負荷が、一種の生存本能を刺激することで、異能を目覚めさせるのではないかと仮説に立ち、被験者のトラウマを利用する手法を編み出したのである。幸か不幸か戦後世界には、戦時中に大きなトラウマを抱えることになった人材が多く存在した。過酷な従軍経験を持つ将兵や身寄りの無い戦災孤児などが集められ、被験者として研究所に収容されたのである。彼らは薬物と催眠法によって心の傷を抉られ、苦しみの中に才能を開花させていった。もちろん戦時下ではない状況で、人体実験と批判されるような過激な行為が行われたと信じたくはないが、トラウマに対する「治療」を名目として被験者には様々な身体的、心理的操作が試みられたのも事実であるようだ。時には、満足な装備を与えられぬまま雪山に放置されるなど、度を越した訓練によって肉体と精神を追い込まれ、強制的な「目覚め」を促された者もいるという。

しかしながら、少なくとも宇宙世紀0080年代初

※MS操縦訓練を受けた児童たち
一年戦争末期に設立された突撃
機動軍特別編成大隊「キマイラ」
には、少なくとも2名の児童が
MSパイロットとして所属してい
たとされている。



頭においては、それぞれの研究機関はまだ強化手法を模索している段階であり、本格的な研究が進められるようになるのは、0083年以降にティターンズが台頭を始めた頃からである。

■強化人間の戦投入

宇宙世紀0087年、エウゴの蜂起に伴い地球圏が事実上の内紛状態に陥ると、各地のニュータイプ研究所は決断を迫られることになる。ジャミトフ・ハイマン准将率いる「ティターンズ」陣営に付くのか、あるいは反地球連邦組織として台頭してきた「カラバ・エウゴ」陣営に付くのか、その選択は組織の運命を分ける重要なものであった。そんな中、多くのニュータイプ研究所が前者を選ぶことになる。ロビー活動に長けたティターンズは連邦議会を掌握しており、多額の資金を有していたことも研究を続けるためには有利な条件であった。しかしながら最大の決め手となったのは、リベラル寄りのカラバ・エウゴ陣営が人体実験に否定的立場を示しており、その下では研究の縮小が予測されたことであろう。こうした状況下にあつて、チャクラ研究所など二部の例外を除く主要な研究所が、ティターンズに同調していくことになった。

その後、両者の軍事的衝突がいよいよ近くなると、ティターンズのニュータイプ研究所に対する結果を求める

圧力は次第に強まってくる。その頃には、多くの研究所でそれぞれ目指す方向性や理論、訓練法といったものが確立し始めており、ティターンズの要求に対してともかくもなにかしらの「戦力」を形として提示する動きが見られるようになる。旧ジオン公国軍で曲がりなりにも実戦に投入できるレベルで完成していたサイコミュ・デバイスは、引き続き小型化、高出力化といった解りやすい形で開発が継続していたが、まずはこれらサイコミュ・デバイスの操作を行えるレベルの人材が育成されていたのである。

だが、ストレスをかけての精神訓練や薬剤によるマインドコントロールといった手法には大きな欠点があった。初期の「強化処置」は成功率が低く、精神に変調をきたして廃人化する者や、サイコミュ・デバイスからの感応波の逆流現象によって死亡するケースが後を絶たなかった。また運良く「強化処置」を乗り切ったとしても薬物中毒に陥り、禁断症状を抑えるために定期的な投薬が必要となることも多かった。さらに精神的に不安定化する傾向も強く、軍務中の命令違反を始めとする暴走のリスクを抱えていた。強力なサイコミュ兵器の運用をその手に委ねるがゆえに、これは致命的な欠陥であった。そこで研究者たちは、特定の人物を「マスター」に設定し依存させることで、精神的均衡を保つ「刷り込み」を行うという手法を考案。これが一定の成果を挙げたことで、強化人間の実用化の目処が立つこととなった。

とはいえ「グリプス戦役」の勃発という事態の急変により、調整も不十分な状態で実戦投入が急がれ、結果としてこれが裏目となるケースも多発した。ムラサメ研究所のフォウ・ムラサメ少尉、オーガスタ研究所のゲーツ・キャバ大尉、ロザミア・バダム中尉、エリシア・ノクトン少尉、グリプス研究所のサラ・ザビアロフ曹長など、記録で確認できるだけでも幾人かの被験者が、この時期、ティターンズの戦列に加わったが、一時的に戦果を挙げる一方、かなりの確率で問題行動を起こしているのだ。撤退命令を無視しての無謀な攻撃などまだ可愛げがある方で、戦闘中に錯乱状態に陥り民間人居住区への無差別攻撃を行った事例や、作戦行動中に離反して味方機を攻撃するといったケースまで報告されている。訓練段階では優秀な成績を残していたとしても、実戦という極限状態に置かれることで、精神的な不安定さを露呈してしまったということだろう。こうした不本意な結果を受け、強化人間はサイコミュ搭載型兵器を運用させることで多大な戦果が期待できる一方で、暴走リスクも極めて高い「諸刃の剣」として認識されるようになっていく。

さらに宇宙世紀0088年2月、「グリプス2」を巡る攻防戦にてティターンズ艦隊が敗北したことで、地球連邦における強化人間研究は大きく後退することになる。政権転覆が確実なものとなり、ニュータイプ研究所はティターンズという後ろ盾を失ったのだ。カラバ・エウゴ陣営は、しばしば敵陣営を糾弾する手段として、強化人間にまつわる人体実験の数々を人道に反する行為

※グリプス戦役時の強化被験者正式に強化人間と登録された者もいれば、ニュータイプ候補生という曖昧な表現が用いられた事例もある。こうした被験者は、前線部隊やパイロット訓練校から志願者を募る一方で、一般市民からスカウトするケースもあった。例えば、グリプス研究所では十代半ばという若さでハンバーガー・チェーンの店長に抜擢され、異様な勘の良さで記録的な売上を見せていた少女を、候補生として招聘したという事例が記録されている。また、ブローカーを通じて、経済弱者の戦災孤児を「買い叩く」こともあり、カラバ・エウゴ陣営による批判の対象ともなった。

■多くのMSパイロット。中でも地球生まれのパイロットのほとんどは無意識的に機体を空間上の想定水平面（作戦目標や戦況によってその角度設定される）を基準とし、機体の傾きをやみくもに動かすことはない。空間認識能力（ハーティコ）に陥る危険性が高まるからだ。だが、機体にいる空間認識能力に長けた者、特にニュータイプもしくはそれに準ずる能力を持つ者は自在に空間内を飛び回る。（シンジ）はそうしたパイロットの意思を汲んで思い通りに、かつ高速に運動するための機動性を備えたMSである。逆にいえば、その操縦応答性を的確に操作・制御できる能力がなければ本機はとてつもないものではなかった。



としてやり玉にあげてきた。それゆえ、いかに兵器として有望な可能性があったとしても、研究を続行させるわけにはいかなかったのである。かくして、政権を奪取したエウゴ・カラバ陣営の指示により、地球連邦軍のニュータイプ研究所は、次々と閉鎖・解体されていったのだ。

ただし、ニュータイプ研究所を閉鎖し、表向きは強化人間技術の廃棄を謳った地球連邦陣営であったが、一部ではその知見が受け継がれていたとも言われている。たとえば、ティターンズ政権下で開発された、特殊なサイコミュ・システム「ナイトロ」もそのひとつである。ナイトロは、一般的な人材の微弱な感応波でも運用可能な、準サイコミュ兵器的存在であった。それだけであれば、何ら問題はないがシステム起動時に搭乗者の脳波を上書きするという機能が備えられていたらしい。開発資料の多くが処分されているため、推測の域を出ないが、おそらくこれは初期のサイコミュ・システムの欠陥であった「感応波の逆流現象」を応用したものではないかと推測される。この仮説が正しいとすれば、ナイトロ・システムを起動するたびに、搭乗者は自身の感応波に晒されることになる、結果的に催眠法による「強化処置」と同等の効果が生じていた可能性が高い。人格崩壊を含む精神面でのリスクはあるにせよ、薬物を伴わない分、猛烈な頭痛などの中毒による禁断症状に苦しめられることがないわけで、「より効率的な強化処置」と言えないこ

ともないだろう。とはいえ、このシステムがその後の地球連邦軍内で一般化している痕跡がないことから、何らかの重大な欠陥を抱えていたものと思われる。

■アクシズ製強化人間

フラナガン機関に所属していた研究者たちの中には、地球連邦軍に協力の意志を示す者がいる一方で、恭順を拒んだ者も存在していた。彼らの多くは、関係が深かった突撃機動軍のつてを使って地球圏を脱し、アステロイド・ベルトの小惑星基地「アクシズ」に逃れて研究を続行することとなる。そして、「アクシズ」においても地球連邦系のニュータイプ研究所と同様に、薬理的処置と精神操作による「強化処置」の手法が開発されていく。事実、宇宙世紀0080年代半ばから後半にかけて、一部の青年将校の中から被験者を募り、強化人間が生み出されることになる。

だが、これとは異なるアプローチが行われていた点にも注目したい。時を少々逆上り、宇宙世紀0070年代、ジオン公国では優生学的見地に立った研究が行われていた。優秀な頭脳や身体能力を有する人材の遺伝子を掛けあわせる、いわゆる「試験管ベイビー」の生成が行われていたのである。たとえば、この時期、ジオン公国総帥ギレン・ザビとニュータイプの素養を持つとされる女

性の遺伝子を受け継ぐ男児が生み出されていたともいう。この研究は、その後ごく限られた人間たちを乗せた「アクシズ」が地球圏を離れた後、単純に必要な人口を増やす目的で応用されたほか、さらに一歩進み、受精卵の段階で遺伝子操作を行った「デザインベイビー」も誕生させられたようだ。そして、こうした特異な経緯で生み出された子供たちが、研究者たちの手によって「アクシズ」の公国軍残党勢力というコミュニティの中で育てられることとなる。地球圏から追いやられた「アクシズ」の環境は過酷であり、地球圏とも異なつて生存そのものや地球連邦に対する復讐、そして「再興」といった目標に対し、どのような手段も正当化される素地があった。したがって、これらの研究は倫理の束縛からも比較的無縁であったと考えられる。

特に注目すべきは、宇宙世紀0077年3月8日に誕生した「エルピー・プル」と呼ばれる女児と、彼女を元にしてクロウニングによって生み出された「姉妹」たちである。少なくとも12体が「製造」されたと言われる彼女たち「プル・シリーズ」は、遺伝子改造によって高G状態下においても血流量を一定に保つための強化筋肉、計12カ所の心臓補助器官、情報処理速度を高めた神経系などが付与されていた。そして何より、彼女たちはサイコミュ兵器を自在に操れるほどの、高い感応波放出能力を有して生まれた「人工ニュータイプ」とも言うべき存在だったのである。さらにプル・シリーズは、「アクシズ」内の

※プル・シリーズ

フル・フロンタル派ネオ・ジオン残党に属していたエースパイロット、マリーダ・クルス中尉(宇宙世紀0096年戦死)がプル・シリーズの生き残りだという未確認情報もある。その真相は定かではないが、彼女がNZ-666(クシャトリヤ)といったサイコミュ搭載型MSを運用可能な「ニュータイプ」的素養を有する人材であったことは確かだろう。



■ネオ・ジオン軍ノーマルスーツ

一年戦争の終結後、連邦軍の制式ノーマルスーツは逐次装備の更新を受け、宇宙世紀0083年前後を境としてモデルチェンジしていく。だが、これに対し最新装備の供給を受けることができなかったかつての旧ジオン公国軍残党は、一年戦争時に使用していた装備品をそのまま使い続け、少なくとも第一次ネオ・ジオン戦争の時代まではその多くが旧式装備のまま戦っていた。ハマーン率いるネオ・ジオン軍に合流、あるいは親しく協力した部隊にはこの頃、同軍からMSやパイロットの装備品が支給されることがあったと言い、新式のノーマルスーツに身を包んだパイロットたちの士気向上や忠誠心の喚起に大いに役立てられた。

というのも、ネオ・ジオン軍は旧ジオン公国軍の掲げた思想を継承することを標榜しており、その中にはニュータイプを象徴的に最上に置く“優良種”優遇の施策も含まれていた。一年戦争の時代から、エースパイロットと呼ばれるパイロットには階級や賞与といった待遇のほか、カラーリングを含めたMSのカスタマイズ、及び軍装の特注を認めていたが、それはすなわち“優良種”であることの証明とみなされ、彼らの自己顕示欲を満たすものでもあったのである。組織における結束を示すと同時に、同一組織内における優劣を示し、競争心を煽るこうした優遇策は、少ないコストで効果を挙げられるということもあり、ハマーンがそれを見逃すはずがなかった。彼女は自らも唯一無二のデザインが施されたノーマルスーツを眺めていたという。

地球圏から離れていた（アクシズ）は連邦軍とは異なるノーマルスーツの仕様を策定し、地球圏帰還と同時にこれを制式化する動きを見せる。ネオ・ジオン軍でも実験的・先鋭的な性格を多分に有するニュータイプ部隊をはじめとして、新型ノーマルスーツが一部で実戦に投入された。その後、改良を経て現在に至るが、前述のような個人のカスタマイズは現在も引き継がれているようである。中でも、総帥であるフル・フロンタルはプロバガンダの重要性を心得ており（というよりも、極論すれば彼の存在そのものがプロバガンダのためにあるようなものである）、ハマーンと同じく特異なノーマルスーツを身に着ける。軍装やノーマルスーツに施された縁取り模様は、MSにまで反映されて彼らの所属を示す“袖付き”という言葉の元にもなった。

フル・フロンタルや彼の側近であるパイロットが身に着けるものも、通常の機能は一般兵や連邦軍のものと大差ない。肉体改造を受けた強化人間であるがゆえに、ノーマルスーツに特殊な機能は付与されていない、ということである。その点に関して、筆剤なども併用し常人を強化人間相当にすることを前提として専用開発されたRX-0（ユニコーンガンダム）のノーマルスーツの特殊性は際立つであろう。ただし、フロンタルや側近用のノーマルスーツはサイコミュ搭載MSを扱う関係上、これに必要なデバイスや受容器の類いが実装されている可能性はある。

秘密施設にて催眠学習と過酷なトレーニングを受け、MSパイロットとしての教育を受けることとなる。結果的に、宇宙世紀0088年の第二次ネオ・ジオン戦争時に10歳という若さで実戦投入されたのだ。戦時下においては、18歳未満の児童たちが少年兵として徴用されるケースが絶えないが、プル・シリーズの場合は、最初から兵器として運用されるために生み出されたという点においてはるかに非人道的である。軍としては——育成に時間がかかるとはいえ——優秀な人材を安定供給できるといふメリットはあるのだろうが、あまりにも悲惨と言わざるを得ない。なお、実戦投入された10数名の「プル・シリーズ」は、いずれも未帰還となっている。

プル・シリーズは強化人間というカテゴリーの中でも、適格者を人為的に生み出したという点で特異でもある。「アクシズ」出身の強化人間が、フラナガン機関に源流を持つ強化訓練・措置によって生み出され、従来と同じかそれ以上に不安定さを内在していたのに対し、プル・シリーズの完成度は高かったとされる。彼女らは限られた手勢しか持たなかったグレミー・トトの文字通り「虎の子」であり、グレミー一派の中核的戦力となるはずだった。彼はこれを切り札としてハマーンの目から隠し、来る日に備えていたが、そのために1体を除いて冷凍睡眠処置を施していたという。諸説あるが、強化人間としての能力は彼女たちの肉体・精神年齢に大きく依存しており、完成された安定状態を永く保持しておくために冷凍睡眠で固定していたのではないかという説が有

力だ。

なお、冷凍睡眠されなかった最初の1体（個体名エルピー・プル）については、最も初期に訓練を施された個体であり、調整が後続の個体群ほど上手いかなかった可能性はある。彼女らの訓練はすべての個体に同時に行われたわけではなく、冷凍睡眠と促成処置を並行し、時間差で様子を見ながら実施されたと考えられ、恐らく最初の個体であるエルピーに対しては、強化措置にしても最も実験的な内容が適用されていたのだろう。結果、エルピーは能力こそ一定値を示したものの不安定さを最後まで取り除けず、調整を繰り返す中で敵側であるエウーゴのパイロットに触発され、グレミーの下から離反するのである。この事件はグレミーの誤算でもあったろう。本来であれば、プル・シリーズを目覚めさせる際には、その不安定さが彼女らに影響を与えることを避けるべく、入れ替わりにエルピーを冷凍睡眠させる予定であったとも考えられるからだ。

■新生ネオ・ジオンの強化人間

宇宙世紀0088年12月、青年将校グレミー・トトに率いられた旧ザビ派が、ネオ・ジオンの本流であったハマーン派に対し反乱を起こす。年を越して1月に入り、両陣営の艦隊が「コア3」沖で激突したが、この隙をエウーゴ部隊に突かれた結果、ハマーン・カーンおよびグレミー・

トトは戦死。指導者を欠いたネオ・ジオンは事実上、瓦解したが、これにより研究機関が存在していた小惑星基地「アクシズ」もまた、エウーゴ政権下の地球連邦の手に落ちることとなった。プル・シリーズによって構成された「ニュータイプ部隊」は壊滅。主流派であったハマーン陣営に所属した強化人間たちも、次々と戦火の中で斃れていったことで、被験者側もほとんどが消息不明となった。

しかしながら、シャア・デュランによって再興した新生ネオ・ジオンにおいても、強化人間が造られ続けることになる。「アクシズ」を脱した研究者たちが、多くのシンパが存在した「サイド3」の「ジオン共和国」や、多数の難民が流入していたスペース・コロニー「スウィート・ウォーター」に潜伏することで難を逃れていたのだ。さらに、ネオ・ジオン系の人材に加え、「人道上の罪」によって裁かれることを嫌い、逃亡生活を余儀なくされていた地球連邦軍系のニュータイプ研究所に属していた研究者たちまでもが集められたのである。かくして装いも新たに設立された新生ネオ・ジオンのニュータイプ研究所では、「連邦」と「アクシズ」というふたつの場所で受け継がれてきた知識が、ふたたびひとつの場所に集まったのであった。

彼らが行った強化処置は、薬物と精神操作を併用した比較的オーソドックスなものであった。新生ネオ・ジオンが欲していたのは即戦力であり、クロニング技術による人工ニュータイプの育成に要する時間がなかったため



■フル・フロンタルの側近たちが身に着けるパイロット用ノーマルスーツ。カラーリングは身分の高さを象徴するパープルを基調としており、細部は異なるが一般に“袖付き”と認識される意匠は共通している。ヘルメットデザインの原型は第一次ネオ・ジオン戦争時代にニュータイプ部隊が使用したものに遡る。なお、携行小火器のホルスターを腰部に設けている点は、あくまでもこれを非常用装備と認識していた連邦軍とは違い、フロンタルの護衛を任務とする、より実戦的な部隊であることの表れと言える。

ある。しかし、これまでの強化処置とは異なり、何よりも安定性が重視されていた点には注意が必要である。グリプス戦役と第二次ネオ・ジオン戦争で投入された強化人間の多くが精神の不安定化に苦しみ、最終的には自滅するという道を歩んだためである。なお、いわば伝統的なフラナガン機関由来の技術は、その後数年を経て成熟の域に達していたようである。

新生ネオ・ジオンの上層部は、最低ラインとして無線誘導型攻撃端末「ファンネル」3基の同時操作という目標を掲げることとした。「アクシズ」や地球連邦軍で強化された人材が、10数基以上のファンネルを同時操作したことに比べると、極めて控えめな目標設定といえる。しかしながら、圧倒的な戦力であったとしても、その矛先が自軍に向けられるような暴走リスクがあったのでは、兵器として欠陥としか言いようがない。彼らの決断が、極めて現実に即したものであったことは評価し得るのではないだろうか。

また、被験者にそれと報せず強化処置を加えるような真似をせず、自軍内から志願者を募っていた点も特徴的だ。前時代の強化人間は、しばしば戦う理由を持たない者が半ば強制的に被験者とされていた。そのため、命がけの戦闘を行わせるために敵意を操作するための「刷り込み」が必要となっていたのだ。これが精神の不安定化を促したとする見方があり、最初から戦意と忠誠心の高い志願者を募ったようである。

しかしながら、過度な強化処置を控えた結果として、成果もなかなか挙がることなかったようだ。かなりの人数の志願者が、ニュータイプ候補生としての訓練と強

[illegible]

化処置をふけたが、最低要件を満たすレベルでファンネルの操作に成功したのは千ネー・ガス准尉ただひとりであつたという。とはいへ、当のガス准尉が第一二次ネオ・ジオン戦争において、「ファイブス・ルナ」の核パルス・エンジン防衛戦や「ルナⅡ」制圧戦など、重要な局面で想定通りの活躍を見せたことを考えれば、彼らの採った選択が極めて正しかつたと評価できよう。

な料、この試みの先駆的なものは第一次ネオ・ジオン戦争の頃にも見られ、ネオ・ジオン軍が軽度の強化段階の若年士官をMSパイロットや部隊指揮官として実験的に実戦投入していた例がある。その代表的なサンブルがマシマー・セロやキラ・スーシなどと考えられ、肉体強化のほか、マインドコントロール、歩手前の思考誘導といった処置の段階で前線に送られたとされる。その後、戦局の進展につれて再強化が施された時には、彼らの外見や行動にすら極端な変化が表れたという証言がある。

なお、地球寒冷化作戦の失敗の後、半ば崩壊しかけていたオーストリア残党をまとめ上げることとなったブル・フロンタル大佐についても、強化装置を受けていたのではないかとという疑惑が持たれている。この説によれば、ブル・フロンタルは、感応波の放出能力や空間認識能力の向上を軸とした「ニュータイプ能力」の付与に加え、組織再建の核としての「シャアの再来」を演じるために、容姿や声帯を外科的処置によって整形なども施されていたという。今となつては真相は闇の中であるが、主義者たちの手によつて「人造の英雄」が造られたのだとしたら、狂気の産物というより他にない。

以上のように、「強化人間」と口に言っても様々な出自、選抜法、強化法が存在し、それぞれに性質や能力に差違があったことが理解されたことと思う。これらの例証によって導き出されるのは、強化人間の能力発露には個体の「素養」が未だに重要であるということであろうか。ただし、その素養は遺伝子操作などによってコントロールすることが可能というサンプルも存在し、ニュータイプ能力が後天的に発生し得るという論の反証になっているのでは、という指摘もある。ただし、誤解してはならないのは強化人間に求められる能力がイコール、ニュータイプの能力であるとは限らないという点である。結論としては、実戦投入に耐え得る強化人間を生み出す技術に関しては、現在のところ（条件つきではあるが）ほぼ確立したといってもいいが、ニュータイプに関してはなんともいえない。もともと潜在的に素養のあった者が、強化訓練によってニュータイプといえる能力を獲得した例が多々ないわけではないだろう。だが、そもそも著名なニュータイプとされる人物たちのほとんどが、いずれも人工的な強化、といった手段に依らず誕生しているという事実も忘れてはなるまい。人類進化の結果としてのニュータイプ出現が必然か否か、またそれを人為的に促進できるのかどうか否か、といった事柄に関しては、今後も議論・研究の余地があることは間違いない。

●第二次ネオ・ジオン戦争の強化人間
新生ネオ・ジオンのニュータイプ研究では、地球連合化作战戦艦に志願兵として参加したダス・エアなる人物が「強化」し、実験に投入したことが確認されている。ただし強化については、ほとんど強化処置を行うことなく、サイコミュ兵器を操作できたとも言われており、天性の才能を有する人材であったようだ。



MSN-06S SINANJU

RESOURCES

瀧川 虚至 Kyoshi Takigawa

All Mechanical Illustrations

大脇 千尋 Chihiro Owaki

Text: p001, p017-031, p106-122, p124-127 & captions

大里 元 Gen Osato

CG Modeling; NAHEL ARGAMA

Caution & marking design

Text: p032-072, p076-103 & captions

ハギハラシンイチ Shinichi Hagihara(number4 graphics)

CG Modeling; SINANJU & SINANJU STEIN

河津 潔範 Kiyonori Kawatsu(number4 graphics)

CG Modeling Assistant; SINANJU & Weapons

Modeling; SAZABY

ナカジマアキラ Akira Nakajima

CG Modeling; Z GUNDAM

しらゆき Shirayuki

p123 & 125 Pilot Suit

志条 ユキマサ Yukimasa Shijyo

Model repaint; JAGD DOGA & GEARA DOGA

風花 Kazahana

Modeling; KSHATRIYA

佐藤 始 Hajime Sato

CG Modeling; ARGAMA

橋村 空 Kuu Hashimura

Text: p123 & captions

STAFF

SFX Works

GA Graphic 編集部

GA Graphic

Cover & Design Works

ハギハラシンイチ

Shinichi Hagihara(number4 graphics)

河津 潔範

Kiyonori Kawatsu(number4 graphics)

吉野 英武

Emu Yoshino(number4 graphics)

Editors

佐藤 元 (GA Graphic)

Hajime Sato (GA Graphic)

小芝 龍馬 (GA Graphic)

Ryoma Koshiba (GA Graphic)

村上 元 (GA Graphic)

Hajime Murakami (GA Graphic)

Special Thanks

株式会社サンライズ

SUNRISE Inc.

小倉 信也

Shinya Ogura

※背景写真提供

佐藤 充

Mitsuru Sato

※営業

永井 聡 (SBCr)

Satoshi Nagai

※編集補佐

奥村 英明 (SBCr)

Hideaki Okumura

■モビルスーツアーカイブ MSN-06S シナンジュ

2016年4月1日 初版発行

編集 ホビー編集部

製作 GA Graphic

発行人 小川 淳

印刷 共立印刷株式会社

発行 SBクリエイティブ株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木 2-4-5

営業部 TEL 03-5549-1201

© 創通・サンライズ

© SB Creative Corp.

ISBN 978-4-7973-8532-8

Printed in Japan

<http://masterfileblog.jp/>

本書をお読み頂いた感想、ご意見を上記 URL からお寄せください。

本書の無断複製・複写・転載を禁じます。

落丁・乱丁本は小社販売にてお取り替えいたします。

定価はカバーに記載されています。

本書「モビルスーツアーカイブ MSN-06S シナンジュ」は「公式設定」ではなく、ガンダムシリーズ作品に登場するMSN-06S シナンジュについての歴史的・技術研究書であり、作中のエピソード後に「作品世界の中で刊行された書籍」という設定に基づいて執筆されています。したがって作中や関連作品などと異なる設定解釈が含まれる場合がありますがご了承ください。

SB Creative

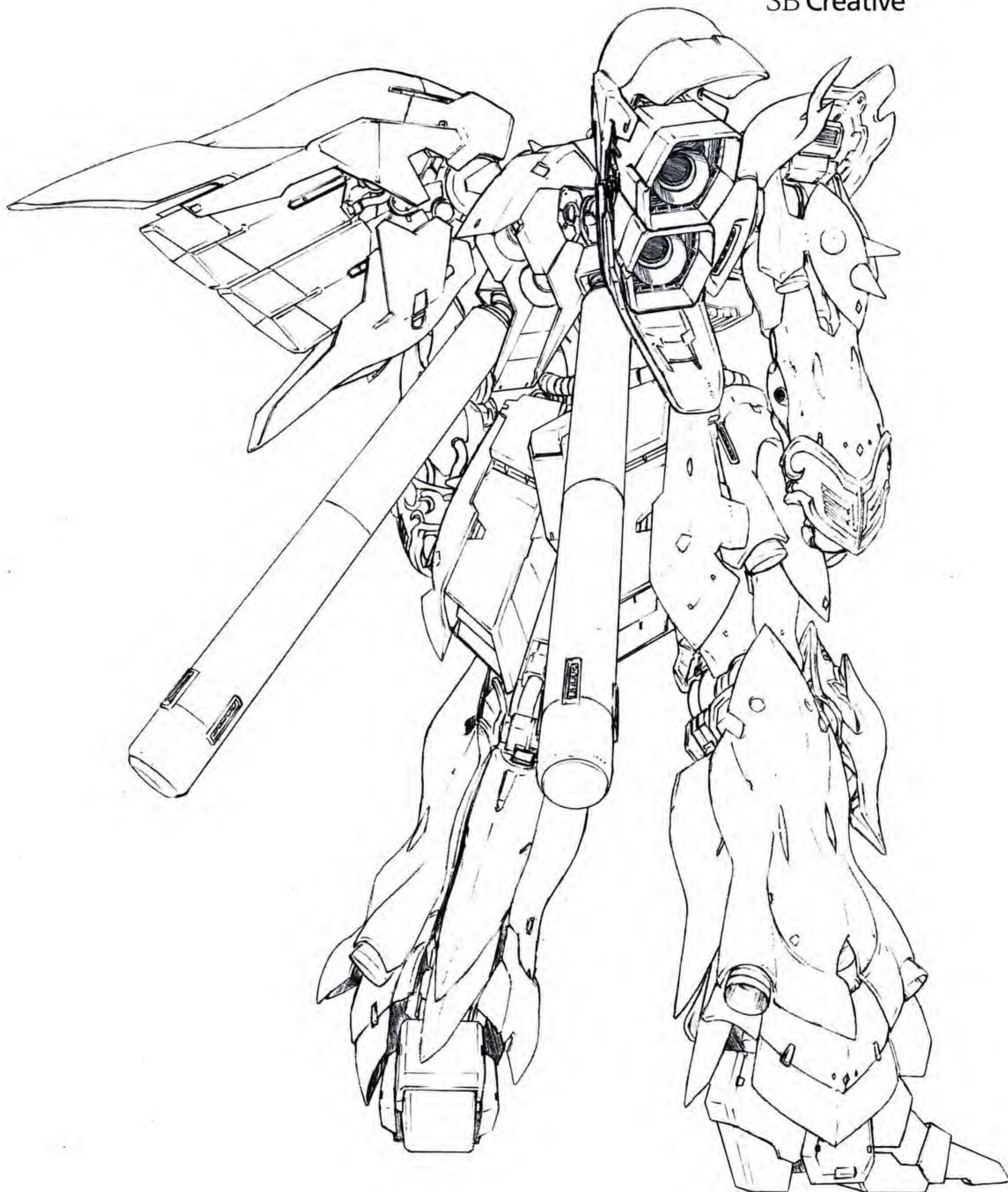
GA Graphic

4
www.nhg.jp



©創通・サンライズ

SB Creative



ISBN978-4-7973-8532-8

C0076 ¥2600E



9784797385328

定価 本体2,600円 +税



1920076026003

©創通・サンライズ

SB Creative



ISBN978-4-7973-8532-8

C0076 ¥2600E



9784797385328

定価 本体2,600円 +税



1920076026003

©創通・サンライズ

SB Creative



「UC計画」の一環として造られたサイコフレームの実験用機体〈スタイン〉と、これを改装し生まれ変わったネオ・ジオンの象徴〈シナンジュ〉。RX-0〈ユニコーンガンダム〉との因縁深いこの機体について開発経緯、構造とシステムを明らかにする一冊。

